六 十 谷 遺 跡

―都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）道路改良事業に伴う発掘調査報告書―

2013年９月

公益財団法人　和歌山県文化財センター

序

和歌山市に所在する六十谷遺跡は、和歌山県北部を西流し紀伊水道に注ぐ紀ノ川が南側にあり、東西に連なる和泉山脈を北側に背しています。

六十谷遺跡は、今日まで大規模な発掘調査が行われてきませんでしたが、縄文時代の遺物や弥生時代の土器・サヌカイト製石鏃などが多く採取されてきました。このことから、紀ノ川北岸に位置する和歌山平野の主要な弥生時代遺跡の一つに挙げられてきました。

今回、当センターでは、都市計画道路西脇山口（園部・六十谷）線道路改良事業に伴い発掘調査を実施しました。その結果、弥生時代・古墳時代・中世といった幅広い時代の遺構を検出し、これまで不明であった六十谷遺跡の一端を垣間見ることのできる成果となりました。

ここにその成果を発掘調査報告書として刊行いたします。本書が県民のみならず、より多くの方々が歴史を知るための一資料となり、埋蔵文化財への関心を深めていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたりご指導、ご協力を賜りました関係各位、地元の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 25 年 9 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理 事 長 工 楽 善 通

例　　言

1．本書は和歌山県和歌山市六十谷に所在する六十谷遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）道路改良事業に伴い、第１次調査を平成23年５月～８月、第２次調査を平成24年３月～６月、第３次調査を平成24年８月～９月に実施し、平成25年４月～８月に出土遺物等整理業務を実施した。

3．発掘調査・出土遺物等整理業務は、和歌山県海草振興局の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

4．調査組織は下記のとおりである。

［発掘調査・出土遺物整理業務］

事務局長	田中　洋次（第１次調査）　渋谷　高秀（第２次･第３次）
	勝浦　久和（遺物整理）
事務局次長	山本　高照（第１次調査）
埋蔵文化財課長	村田　弘（第１次･第２次･第３次調査）
	井石　好裕（遺物整理）
発掘調査・遺物整理担当	津村　かおり

5．本事業に際し、海草振興局並びに和歌山県教育委員会、地元自治会、地域の方々から多大なご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を示す。

6．出土遺物は和歌山県教育委員会が保管し、発掘調査・出土遺物等整理作業で作成した実測図・写真・デジタルデータ・台帳等の記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが保管している。

凡　　例

1．実測図及び地区割りの基準線は、平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）を基準とし、数値はｍ単位で表示している。また図示した北は座標北を示す。

2．発掘調査で使用した標高は、東京湾標準潮位（T．P.）を基準とした。

3．土色・出土遺物の色調は小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省水準技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）『新版標準土色帖』2011年度版を基準とした。

4．遺構番号は基本的に発掘調査時の登録番号を踏襲した。各事業に遺構の検出順に通し番号を付しており、「遺構の種類-調査区-遺構番号」で表記した。また遺構面が複数面ある場合は、「遺構の種類-調査区-調査面-遺構番号」を記している。ただし、遺構番号の煩雑な場合は、便宜的に「竪穴建物1」のように遺構名で表記した。

【例】1区第2面土坑2→土坑1-2-2,　　2区堀状遺構1→堀状遺構2-1

5．報告書掲載遺物については、通し番号を付け、遺物番号と写真番号は一致する。

本書掲載の遺構平面図・断面図・出土状況図は、基本的に縮尺1/80、1/60、1/40とし、遺物の縮尺は土器・石器・金属製品は、基本的に縮尺1/4、1/2とし、遺構・遺物共に各図にスケールを表示した。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過・・・・・・・・・1
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・1
　第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・1
　第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・2
　第３節　既往の調査・・・・・・・・・・・3
第３章　調査方法・・・・・・・・・・・・・4
　第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・4
　第２節　基本層序・・・・・・・・・・・・4
第４章　調査成果・・・・・・・・・・・・・5
　第１節　１区の遺構・・・・・・・・・・・5
　第２節　２区の遺構・・・・・・・・・・・15
　第３節　３区の遺構・・・・・・・・・・・23
第５章　出土遺物・・・・・・・・・・・・・25
　第１節　土器・・・・・・・・・・・・・・25
　第２節　石器・・・・・・・・・・・・・・31
　第３節　金属製品・・・・・・・・・・・・34
第６章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・34

挿 図 目 次

第１図　六十谷遺跡周辺の遺跡分布図・・・1
第２図　調査区の位置と既往の調査・・・・3
第３図　基本層序・・・・・・・・・・・・・5
第４図　土坑1-1-30・・・・・・・・・・・・6
第５図　１区第１面検出遺構（ピット・土坑）・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第６図　１区遺構配置図（第１面・第２面・第３面）・・・・・・・・・・・・・７・８
第７図　土坑（1-2-50・1-2-51・1-2-52）・ピット（1-2-35・1-2-62・1-2-63･1-2-65）・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第８図　土坑1-2-22・・・・・・・・・・・・10
第９図　土坑1-2-41・・・・・・・・・・・・10
第10図　柱列（1-2-16・1-2-17・1-2-18）・・・11
第11図　落ち込み２・・・・・・・・・・・・12
第12図　土坑1-2-2・・・・・・・・・・・・13
第13図　竪穴建物１・・・・・・・・・・・・14
第14図　１区第３面検出遺構（土坑）・・・・15
第15図　２区遺構配置図・個別遺構土層断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第16図　堀状遺構2-1・・・・・・・・・・・18
第17図　掘立柱建物・・・・・・・・・・・・19
第18図　２区検出遺構（ピット・柱穴・土坑）・・・・・・・・・・・・・・・・・20
第19図　土坑（2-101・2-113）・ピット（2-79・2-105）・・・・・・・・・・・・・・21
第20図　竪穴建物２・・・・・・・・・・・・22
第21図　３区遺構配置図・落ち込み４・遺物集中箇所・・・・・・・・・・・・・・23
第22図　３区検出遺構（ピット・土坑）・・・24
第23図　土坑3-5・・・・・・・・・・・・・24
第24図　出土遺物１（１区）・・・・・・・・26
第25図　出土遺物２（１区）・・・・・・・・27
第26図　出土遺物３（２区）・・・・・・・・29
第27図　出土遺物４（３区・包含層）・・・・30
第28図　出土遺物５（石器）・・・・・・・・32
第29図　出土遺物６（石器・金属製品）・・・33

表 目 次

表１　出土遺物観察表（土器）・・・・・・・36
表２　出土遺物観察表（石器）・・・・・・・38
表３　出土遺物観察表（金属製品）・・・・・38

図 版 目 次

写真図版１　1. 調査地全景（西から）
2. １区全景（第１遺構面）
3. １区全景（第２及び第３遺構面）
写真図版２　1. 土坑1-2-50・1-2-51・1-2-52（東から）
2. 土坑1-1-30（南西から）
3. 柱穴2-2-18遺物出土状況
4. 柱列（東から）
写真図版３　1. 土坑1-2-2（南東から）
2. 土坑1-2-2土層断面
3. 土坑1-2-22遺物出土状況
4. 土坑1-2-22土層断面
5. 竪穴建物１
写真図版４　1. 土坑1-2-59土層断面
2. 土坑1-2-60土層断面
3. 柱穴1-2-61土層断面
4. 井戸上遺構1-2-94（北西から）
5. 落ち込み２西半（北から）
6. 落ち込み２土層断面
7. 落ち込み２遺物出土状況
写真図版５　1. ２区西半全景（東から）
2. ２区東半全景（東から）
3. ２区東半全景（西から）
4. ２区南西部全景（北西から）
写真図版６　1. 溝2-20土層断面
2. 土坑2-118土層断面
3. 土坑2-2（北から）
4. 土坑2-2付近検出柱穴及びピット（南から）
写真図版７　1. 堀状遺構2-1（南西から）
2. 堀状遺構2-1土層断面（南から）
写真図版８　1. 竪穴建物２全景（南西から）
2. 土坑2-114（炉）（北西から）
3. 土坑2-114（炉）遺物出土状況
4. 柱穴2-91土層断面
5. 柱穴2-100土層断面
写真図版９　1. 掘立柱建物（南西から）
2. 土坑2-101及び2-113(南西から)
3. 土坑2-133遺物出土状況
4. 落ち込み３土層断面
写真図版10　1. ３区全景（西から）
2. 土坑3-5（南西から）
3. 土坑・ピット（南西から）
4. 土坑3-5遺物出土状況
写真図版11～15　出土遺物（1）～（5）

第１章　調査の経緯と経過

本発掘調査は、和歌山県により都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）道路改良事業が計画され、その一部が周知の埋蔵文化財包蔵地である六十谷遺跡に位置することから、文化財保護法第94条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出された。その後、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（以下、県文化遺産課）により試掘・確認調査が実施された。

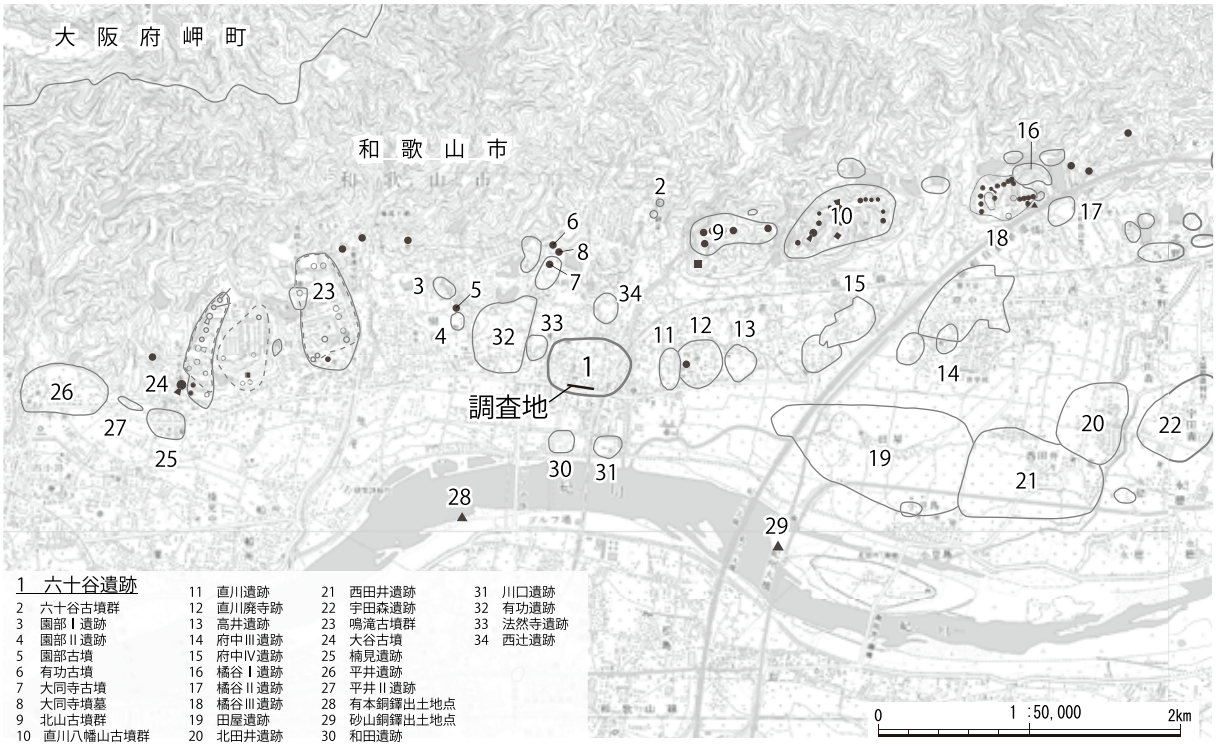
調査の結果、弥生時代、古墳時代、中世の遺構・遺物が確認されたことから、記録保存のための本発掘調査を要すると判断され、和歌山県海草振興局から当センターが発掘調査業務を受託した。調査は平成23年５月～平成24年９月にかけて３次にわたり、調査面積1,667㎡を実施した。平成25年度において、発掘調査で出土したコンテナ計39箱分の出土遺物について整理作業を行い、本書を作成した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

六十谷遺跡のある和歌山市は、和歌山県の北西端に位置する。市域の北は、和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市、東は岩出市及び紀の川市、南は海南市に接しており、西は紀伊水道に面している。

和歌山市は中央構造線により南北に分断され、中央構造線の北側では南向き斜面が険しくなり、



第1図　六十谷遺跡周辺の遺跡分布図

東から西へと標高を下げる。中央構造線による地溝には奈良県の大台ケ原から西流する紀ノ川が紀伊水道へ抜ける。和泉山地から紀ノ川へ注ぐいくつかの支流により複合扇状地が形成され、紀ノ川の侵食により扇状地末端は段丘地形を成している。

六十谷遺跡は紀ノ川河口より約８㎞さかのぼった北岸に形成された複合扇状地に位置し、紀ノ川の氾濫の危険性のない西側南端の段丘上に立地している。遺跡範囲は南北360m、東西550mを測り、南側は段丘地形の境界に県道粉河・加太線が東西に走る。段丘以南は低地となり、段丘縁辺部から低地部へと移行する傾斜地となっている。また調査地は遺跡の中央南側にあり、段丘上端部に位置する。

第２節　歴史的環境

六十谷遺跡が所在する紀ノ川北岸では、縄文時代から近世まで多数の遺跡が存在し、長期間に亘り生活の場であったことが窺える。以下、周辺の遺跡について記述する。

旧石器時代・縄文時代　旧石器時代の遺跡は、和歌山市園部付近や紀ノ川南岸の鳴神遺跡でナイフ形石器と多数の剥片が出土している。縄文時代の主な遺跡としては、楠見遺跡、高井遺跡、府中Ⅲ遺跡などがあげられる。楠見遺跡からは縄文時代晩期の土器やスクレイパー等が出土し、高井遺跡からはサヌカイト製の凹基式打製石鏃が出土している。府中Ⅲ遺跡では縄文土器や石鏃・石棒などの石器が出土している。当遺跡においても縄文時代晩期の土器が出土している。

旧石器時代、縄文時代に帰属する遺構・遺物は少量の為、当該期の全様は明らかではない。

弥生時代　橘谷遺跡、宇田森遺跡、北田井遺跡、西田井遺跡などがあげられる。橘谷遺跡は、和泉山脈から派生した尾根上の高地性集落として知られ、円形の住居跡３棟や４本の空壕が検出されている。出土遺物は銅鏃や弥生時代後期前半の土器がみられ、短期間に集落が営まれたと考えられる。宇田森遺跡では、竪穴建物跡、溝、土坑、土壙墓などが検出されている。溝からは瓢箪型を呈した台付瓢形壺が出土している。北田井遺跡、西田井遺跡では、多数の竪穴建物跡が検出され、ベッド状遺構も確認されている。県内出土の銅鐸は31点が知られ、紀ノ川南岸の河川敷から出土した有本銅鐸や中洲から出土した紀ノ川銅鐸などがあり、和歌山市域では６点が出土している。当遺跡では、弥生時代前期の土器や石器が採取されている。

古墳時代　和泉山脈から派生する丘陵上には古墳が築かれる。５世紀後半には大谷古墳が築かれ、朝鮮半島との関りを示す馬甲など多くの馬具、武具が出土し、石棺は家形石棺と長持形石棺の両者の特徴をもつ特異なものである。大同寺古墳では家形瑳を始め陶質土器が出土している。直川八幡山古墳群では13基の古墳が尾根状に造られ、そのうちの１基から内行花文鏡が出土したと伝えられている。集落遺跡としては田屋遺跡、北田井遺跡、西田井遺跡などから竪穴建物跡が検出され、弥生時代より継続して集落が営まれた。楠見遺跡では甕、器台、異形台付鉢など複数の初期須恵器が出土しており、平井Ⅱ遺跡からも初期須恵器が出土している。鳴滝遺跡では７棟からなる倉庫と考えられる大型掘立柱建物群が検出され、柱は全て意図的に抜き取られた跡が残り、

楠見遺跡で出土した初期須恵器と類似する多量の須恵器が打ち砕かれた状態で出土している。

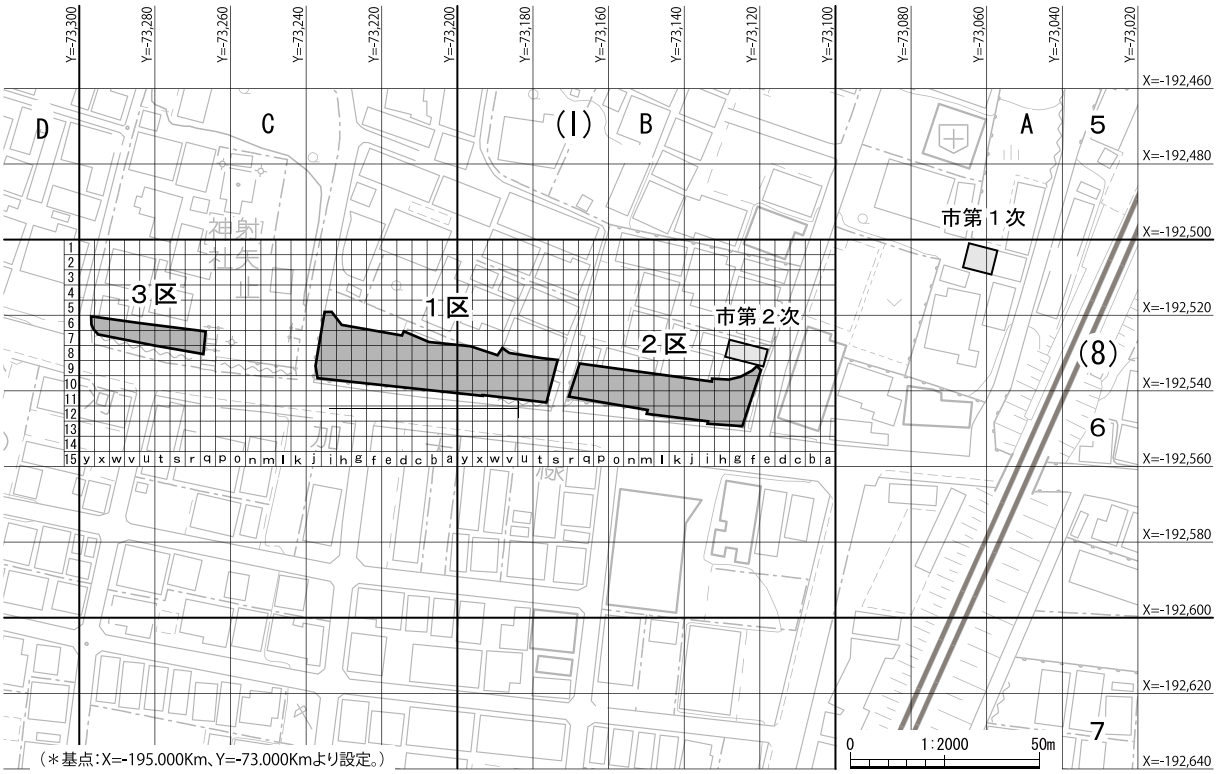
古代　高井遺跡、大同寺墳墓、直川廃寺跡、山口廃寺跡、上野廃寺跡などがある。奈良時代以降、古代南海道・淡路街道（淡島街道）がそれぞれ東西に走ると推定されており、その沿線に古代寺院や国府に関連する遺跡が展開する。高井遺跡では平安時代の掘立柱建物８棟が検出され、直川廃寺跡では複弁八葉蓮花文軒丸瓦が出土している。大同寺墳墓がある標高約50mの丘陵上方から銅製蔵骨器と石櫃蓋身１対が出土している。

中世・近世　高井遺跡では、掘立柱建物や北宋銭15枚が副葬された土葬墓、集石遺構が確認された。府中Ⅳ遺跡で掘立柱建物が２棟検出されている。西田井遺跡では「コ」の字状の溝により区画された屋敷地跡で掘立柱建物群・井戸・池泉などが検出されている。また所在地は不明であるが、六十谷城跡の存在が『崎山家文書』より読み取れる。

近世以降、慶長検地目録の記載などから、六十谷遺跡周辺は耕作地として利用されていたと考えられ、当遺跡西側に射矢止神社が名所として紀伊国名所図会に記載されている。

第３節　既往の調査

六十谷遺跡では地表面踏査等により、千手川の堤防で縄文時代晩期の土器や石器が見つかっており、今回の調査地に隣接する射矢止神社付近で、弥生時代中期を主体とし、前期から後期の弥生土器のほか、石包丁やサヌカイト製石鏃が多く採取されている。特に石鏃未完成品が多く出土しており、『石鏃生産地』として和歌山平野の主要弥生時代遺跡の一つにあげられるが、本格的



第2図　調査区の位置と既往の調査

な発掘調査は行われておらず詳細は不明であった。平成21年度（市第１次）と平成23年度（市第２次）に財団法人和歌山市都市整備公社により合わせて約80㎡の調査が実施されている。

市第１次調査では、JR六十谷駅西側で弥生時代前期から近世にかけての遺構が検出され、平安時代から鎌倉時代の屋敷地の区画溝と考えられる溝が検出されている。緑釉陶器や中国製磁器などが出土しており、古代南海道などの古代の交通との関りが示唆されている。市第２次調査は本調査地２区の北側隣接地で行われており、溝の東肩を検出している。この溝は本調査で検出した堀状遺構に続くもので、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器等の遺物が出土している。

第３章　調査方法

第１節　調査の方法

調査は表土、撹乱、旧耕作土の掘削をバックホーで行い、包含層及び遺構は人力により掘削した。第１次調査は、遺構面が２面あると確認された部分のみ２面調査を実施した。また掘削土置き場を確保する為、第１次、第２次は反転調査を行ったが、本報告では便宜上、第１次調査を１区、第２次調査を２区、第３次調査を３区と表記する。調査終了後は、掘削深度が深い箇所のみ埋め戻しを行った。

調査区の地区割りは、和歌山市を網羅する範囲の北東に任意の基点（X=-185,000km　Y=-73,000km）を設定した。この基点を基準とする１km四方の大区画､100m四方の中区画、４m四方の小区画を設定した。本調査地は、大区画I8、中区画B6,C6に位置している。小区画は北東端を基点とし、西方向へローマ字の小文字でａ～ｙ、南方向へアラビア数字で１～25と設定し、遺構図作成や遺物取り上げの基準とした。

調査における記録として、写真撮影は４×５判・６×７判・35mm判のカラーリバーサル及びモノクロフィルムを使用し、適宜デジタルカメラによる撮影を行った。またラジコンヘリコプターによる空中写真撮影で調査地全体を撮影したほか、俯瞰写真撮影を実施した。図面は必要に応じて、遺構平面図及び土層断面図、遺構配置図を作成した。

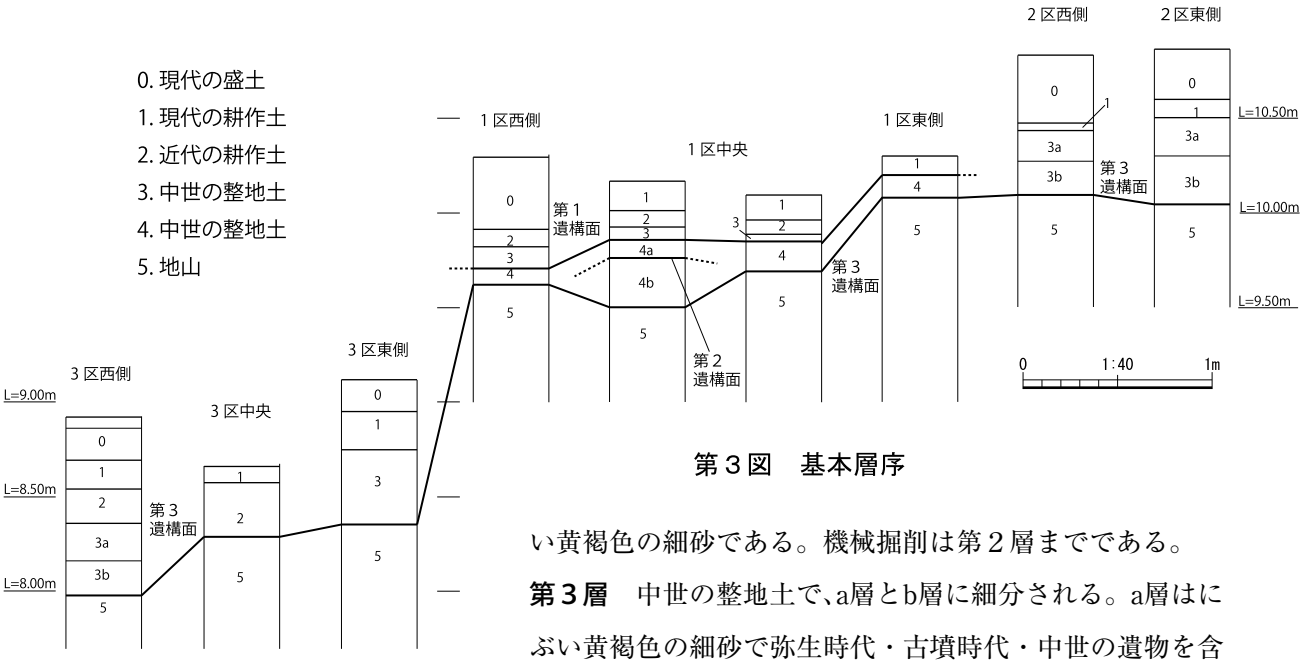
第２節　基本層序

調査前の現況は宅地や駐車場として利用されており、地山は東側から西側に向かい標高を下げる。基本層序は大きく６層に大別した。また細分したものは基本層の後にアルファベットの小文字を付し表記する。

第０層　現代の盛土層である。調査地は宅地及び駐車場等の利用の際に、砕石やコンクリート、盛土により整地されており、広い範囲で確認した。

第１層　近・現代の耕作土で、褐灰色の細砂である。

第２層　近代の耕作土及び整地土層で、３区の西側で確認したものである。にぶい黄橙色～にぶ



第３図　基本層序

い黄褐色の細砂である。機械掘削は第２層までである。

第３層　中世の整地土で､a層とb層に細分される。a層はにぶい黄褐色の細砂で弥生時代・古墳時代・中世の遺物を含む。２区において遺物の包含量は多く、厚く堆積する。b層は褐色の細砂で、遺物の包含量は少ない。人力掘削対象土である。

第４層　中世の整地土でa層とb層に細分される。第４層は１区のみに堆積するもので、a層はにぶい黄褐色の細砂で上面が第１遺構面である。b層は黄色～灰黄褐色の細砂で、上面が第２遺構面である。第５層の落ち込み部分の整地の際に堆積した層である。遺物は弥生時代・古墳時代・中世の遺物が含まれる。

第５層　遺物を包含しない基盤層であり、地山である。黄褐色の細砂が風化礫に入る層で、上面が第３遺構面である。第５層の標高は、調査地東端で約10.30mである。中央東側で約10.10m、中央で約9.50mとやや下がり、射矢止神社東側の中央西側では約9.70mを測る。３区は東側の調査区より南西側に位置し、段丘の裾部分になると考えられ標高は東端の約8.50mから西側でさらに標高を下げ約8.0mとなる。

第４章　調査成果

第１節　１区の遺構

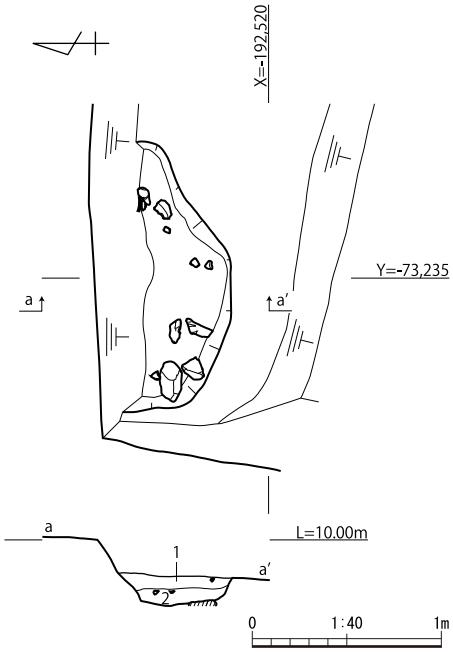
第１遺構面　第１遺構面は調査区の北側に形成されている。遺構は土坑とピットを数基検出した。遺構の主な時代は中世に帰属するものと考えられ、以下に主な遺構について記述する。

土坑1-1-16　調査区C6･b8で検出した土坑で、一部は撹乱により削平されている。長辺1.82m以上、短辺0.62mの隅丸長方形を呈し、深さは0.18mである。埋土はにぶい褐色の細砂で、遺物は瓦器片のほか、弥生時代の石錐・石包丁片が出土している。

土坑1-1-30　調査区C6・i5で検出し、北側は調査区外に広がる。東西1.42m、南北0.6m以上で、深さは0.3mである。埋土は褐色の細砂で、約30㎝大の砂岩が含まれる。遺物は土師器・瓦器が出土している。

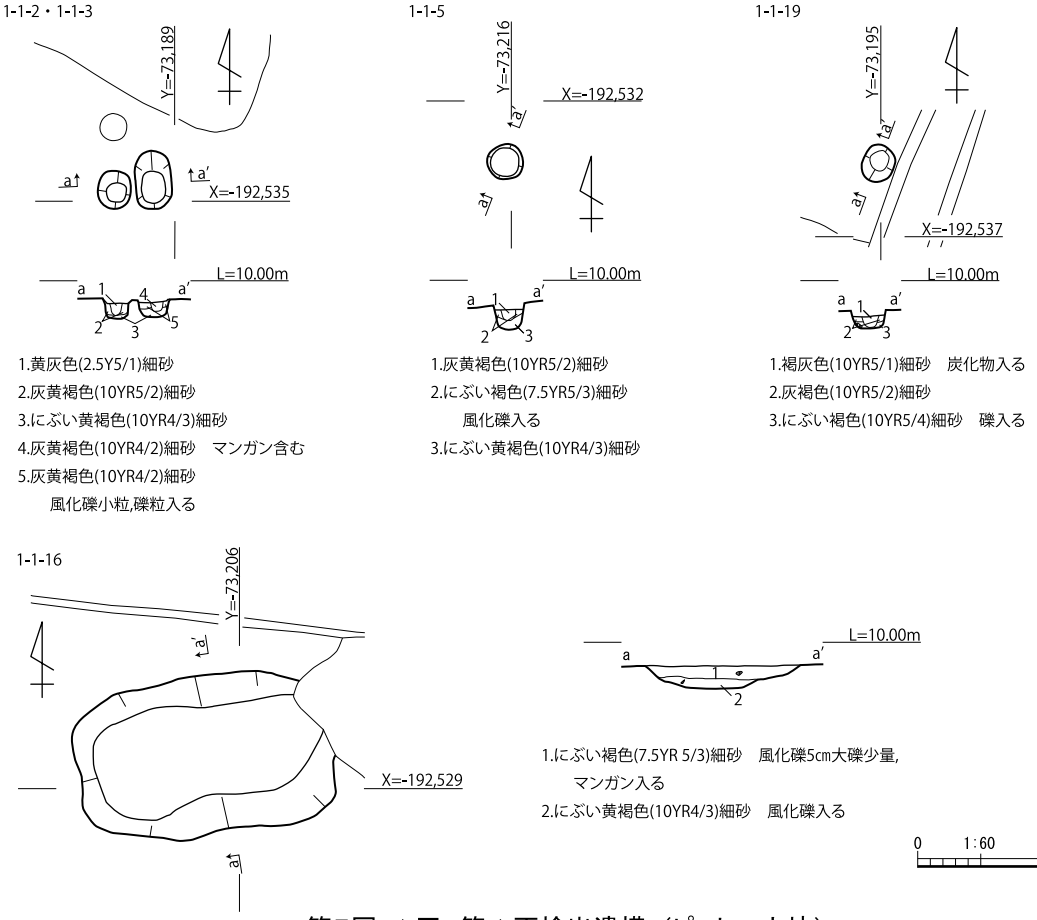
第２遺構面　第２遺構面は調査区の中央北側の一部に形成されており、第１遺構面埋土を除去後の第3b層上面に形成されている。第3b層は、中世の鎌倉時代後半以後に整地等で堆積した層と考えられる。検出した遺構はピット・柱穴・大型の土坑が上げられる。

土坑1-2-50・1-2-51・1-2-52　調査区中央北側で検出した大型土坑で、遺構の北側は調査区外に続く。３基の内1-2-50は西側に位置し、東西3.04m、南北2.56m以上である。底面は凹凸が多く、最も深い箇所で0.26mを測る。中央に位置する1-2-51は、南東部が1-2-52と重複し検出された。切り合い関係から1-2-51の方が古い。東西2.11m以上、南北

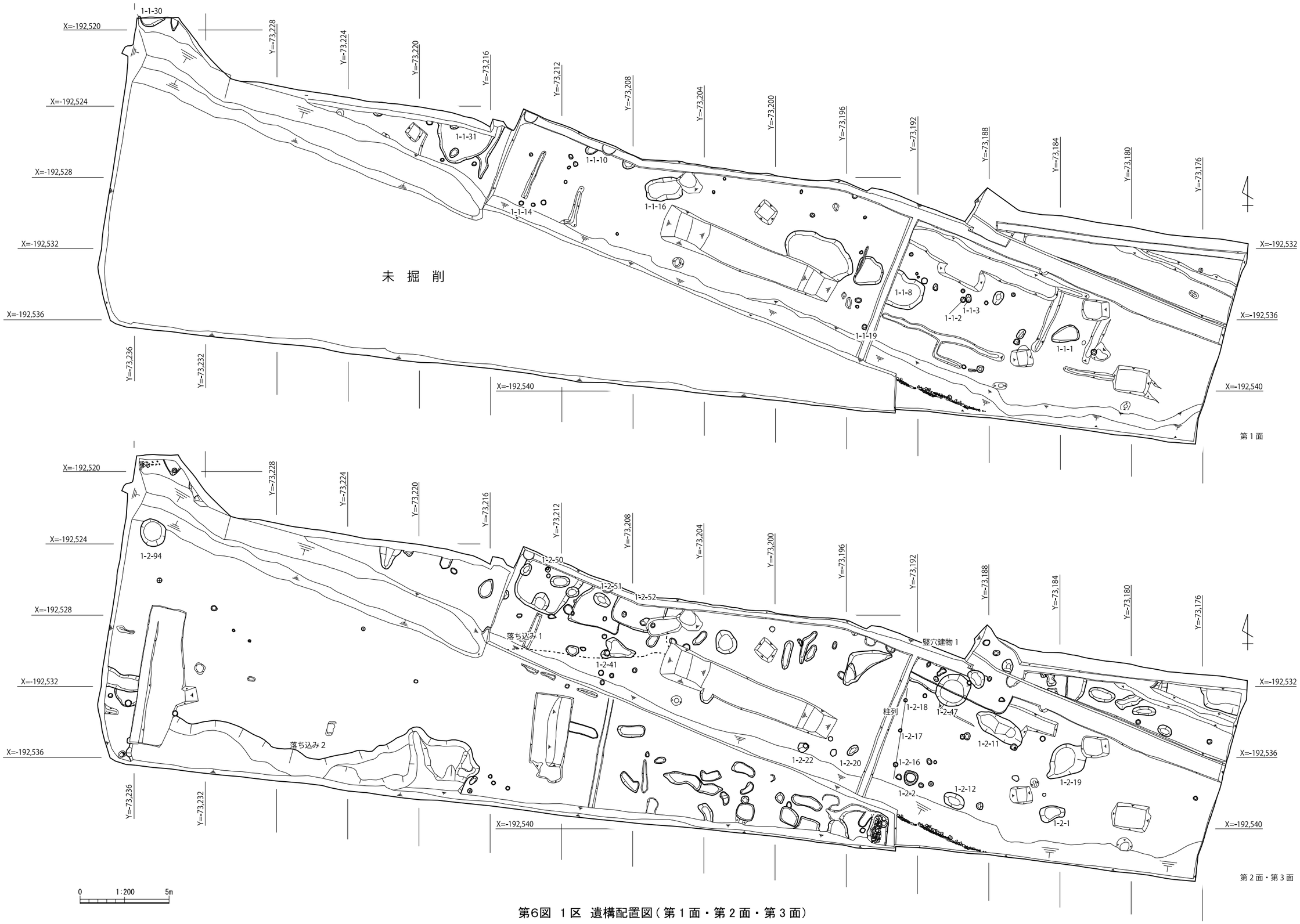


1.褐色(10YR4/4)細砂　風化礫,炭入る
2.灰黄褐色(10YR4/2)細砂　褐灰色(10YR5/1),風化礫入る

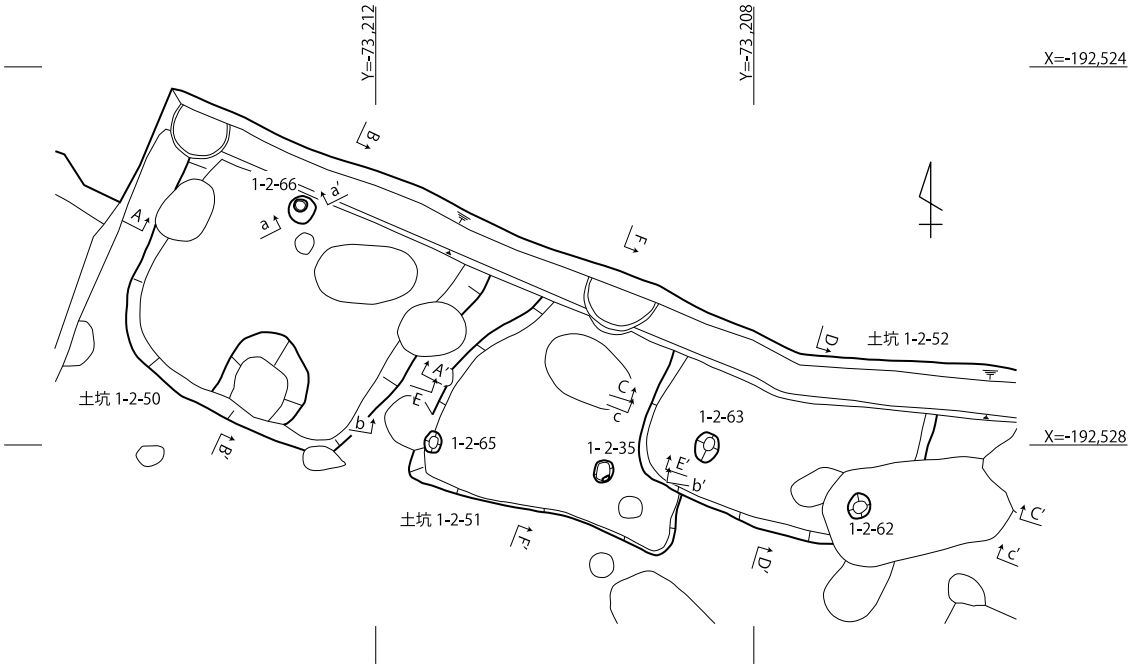
第4図　土坑1-1-30



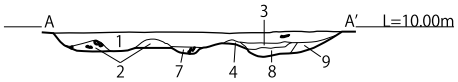
第5図　１区　第１面検出遺構（ピット・土坑）



第6図　１区　遺構配置図（第１面・第２面・第３面）

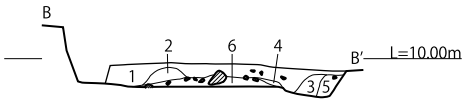


土坑 1-2-50
東西セクション



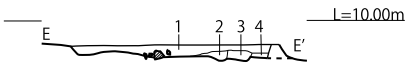
1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　黄褐色 (10YR5/6), マンガン入る
　中央部遺物多量
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　風化礫粒状 , 礫入る
3. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂　風化礫少量 , マンガン入る
4. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂　マンガン入る

南北セクション



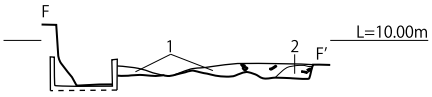
5. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　風化礫少量 , マンガン入る
6. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　風化礫 5cm 大入る
7. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂　マンガン入る
8. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫小粒入る
9. 黄褐色 (10YR5/6) 細砂　マンガン入る

土坑 1-2-51
東西セクション



1. 灰黄褐色 (10YR4/2) ～にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫粒状に入る
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　炭 , 風化礫少量に入る

南北セクション

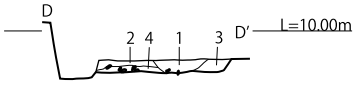


3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫 3 ～ 5cm 大多量に入る
4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫入る

土坑 1-2-52
東西セクション

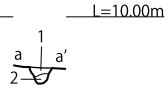
1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫 2 ～ 3 ㎝大入る
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　風化礫入る

南北セクション



3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　炭入る
4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫 2 ～ 3 ㎝大多量に入る

ピット 1-2-66

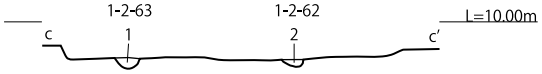


1. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　風化礫入る

ピット 1-2-35・1-2-65

1. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　褐灰色 (10YR4/1) 混ざる
3. 褐色 (10YR4/4) 細砂
4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　褐灰色 (10YR3/1) 混ざる

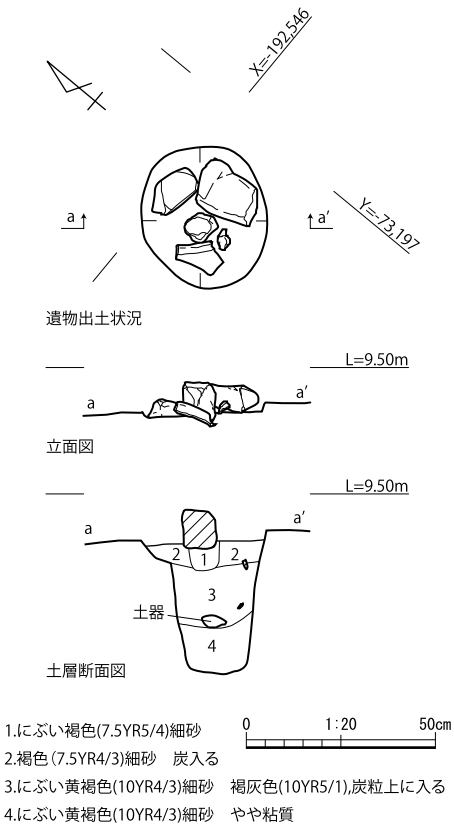
ピット 1-2-63・1-2-62



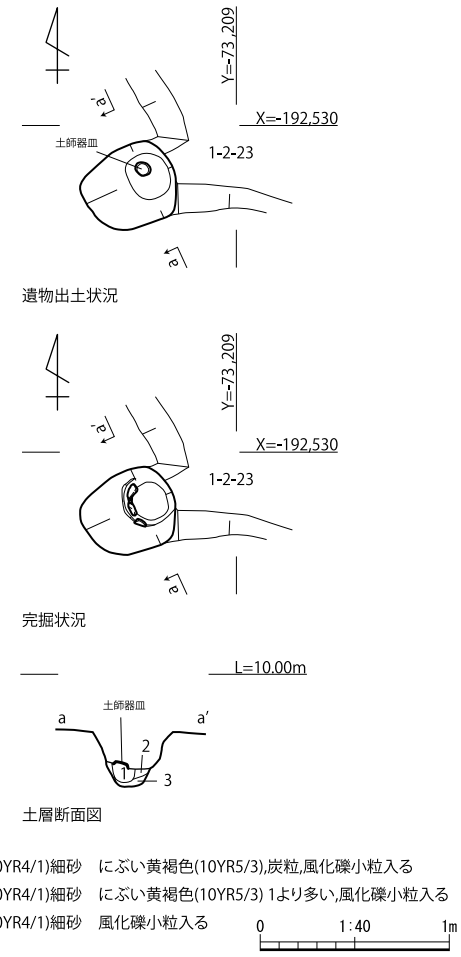
1. 褐色 (7.5YR 4/3) 細砂　風化礫小粒入る
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂

0　1:80　2m

第７図　土坑 (1-2-50・1-2-51・1-2-52)・ピット (1-2-35・1-2-62・1-2-63・1-2-65)



第8図　土坑1-2-22



第9図　土坑 1-2-41

2.13m以上で床面は部分的に凹凸が見られるが概ね平坦面を呈し、深さは0.20 ～ 0.06mである。東側で検出した1-2-52は南東隅部分が上層遺構の土坑1-1-16により削平されており東西約2.9m、南北1.42m以上である。底面はほぼ平坦面となり深さは約0.06mである。これらの遺構は調査区外に延びるため平面形は不明であるが、隅丸方形の大型土坑と推測される。埋土は灰褐色～にぶい黄褐色の細砂に地山の風化礫が混ざり、1-2-51、1-2-52には炭化物が少量含まれる。遺物は弥生土器、土師器、瓦器が出土し、埋土の様相からいずれも時期的な違いはほぼないと考えられ、鎌倉時代中頃と推測される。

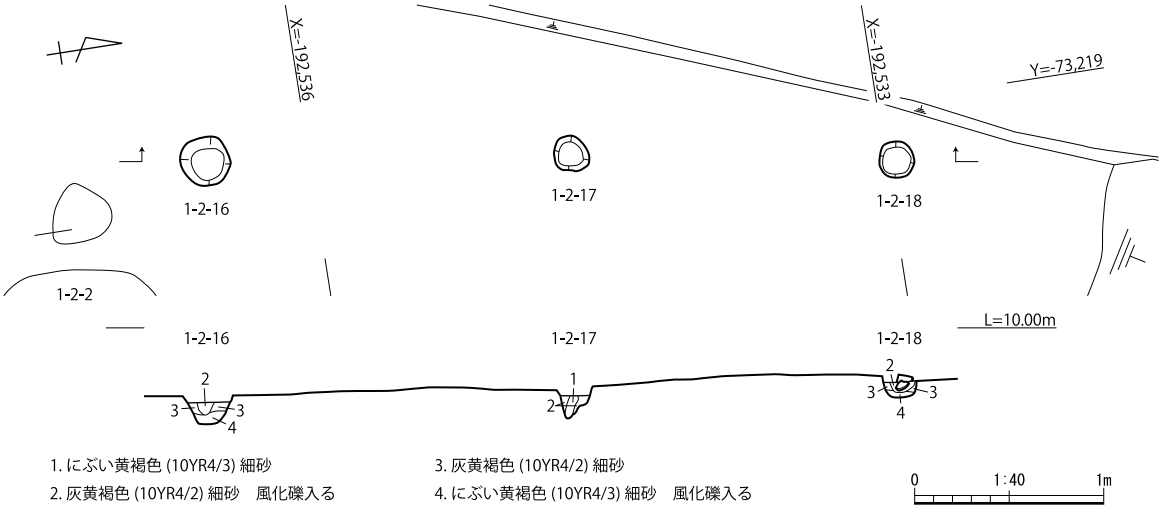
第３遺構面　第３遺構面は地山上面に形成された遺構面で、弥生時代・古墳時代・中世の遺構が見られる。当初第２遺構面として遺構検出を行ったため、遺構番号については検出時の遺構番号を踏襲する。検出した遺構は竪穴建物や土坑・柱列などがあり、調査区南西部分は削平されていたが、井戸状遺構や旧地形の落ち込みを検出した。

中世の遺構

土坑1-2-22　調査区B6・y9で検出した土坑である。東西0.39m、南北0.33mの楕円形を呈するもので、深さは0.37mである。中央に直径約0.10m、長さ0.10mの角がとれた砥石を転用し、縦に据えられていた。砥石は砂岩製で、焼成を受けて赤く変色したと考えられる。埋土はにぶい褐色からにぶい黄褐色の細砂で炭化物を含むが土坑には焼成の痕跡は見られない。用途については不明であるが、地鎮等の何らかの祭祀を行った可能性も考えられる。埋土から土師器や瓦器の碗や小皿などが出土し、鎌倉時代後半のものと考えられる。

土坑1-2-41　調査区C6･ｃ8に位置し、南北0.42m、東西約0.60mの楕円形を呈するものである。深さは0.29mを測り、埋土は褐灰色の細砂である。中層から土師器の小皿が底部を上にして出土した。

柱列　調査区東側に位置し、南北方向に３基（1-2-16・



第 10 図　柱列（1-2-16･1-2-17･1-2-18）

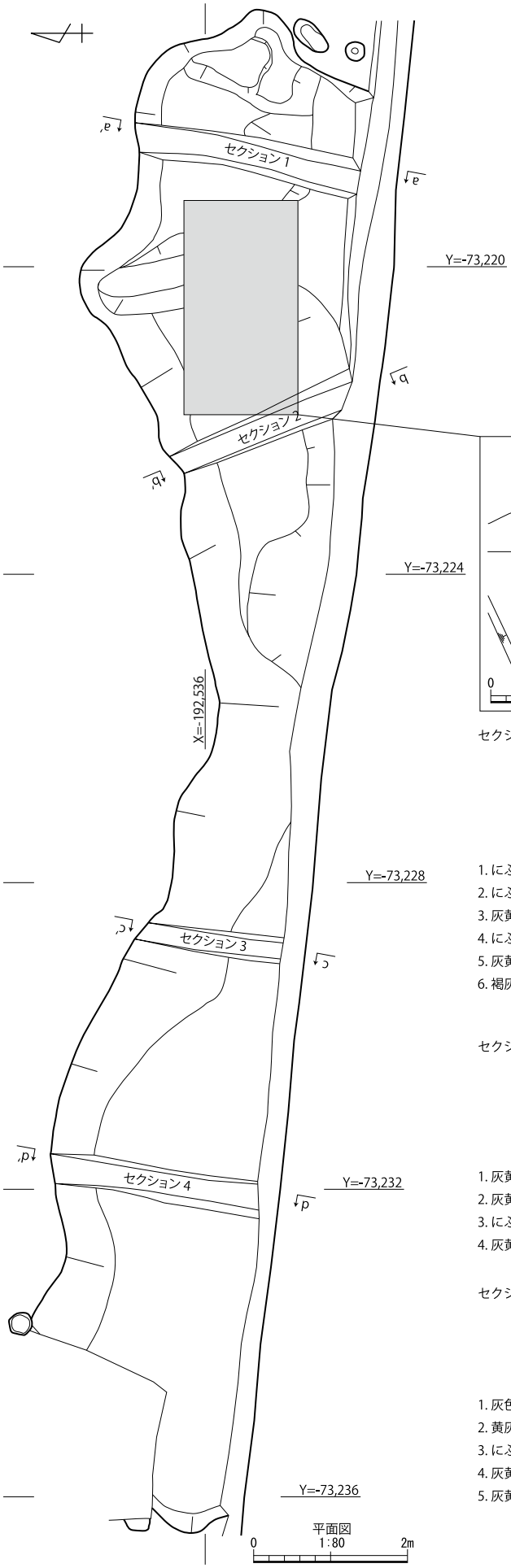
1-2-17・1-2-18）の柱穴から構成される3.9m分を検出した。主軸方向はN-9°-Eである。柱間は1-2-16と1-2-17間は1.90mで1-2-17と1-2-18間は1.80mである。1-2-16は直径0.23m、深さ0.14mで埋土は灰褐色の細砂、1-2-17は直径0.18m、深さ0.16mで柱痕跡が深く入り、埋土は灰黄色の細砂である。1-2-18は直径0.19m、深さ0.16mで埋土は灰黄褐色である。1-2-18からは土師器の小皿が重なり出土しており、鎌倉時代のものと考えられる。周辺にはいくつかの柱穴を検出したが、建物跡を復元するには至っていない。

井戸状遺構1-2-94　調査区C6･ｉ6に位置し、直径1.40mの円形を呈する。深さ0.65mで湧水層に達し、上部は現代の擁壁により削平されていた。遺物は土師器の皿や瓦が出土しており近世以降の所産と考えられる。

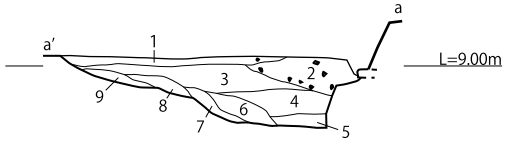
落ち込み１　調査区中央北側で検出した。1-2-50から1-2-52付近に広がる第4b層の堆積土である。北から南に向かって深くなるが、南側は現代の擁壁や耕作に伴い削平されているため、南側の広がりは不明である。深さは北側で約0.1m、調査区中央で約0.3mとなる。遺物は瓦器と共に弥生土器も出土している。

落ち込み２　調査区南側のC6･e9 ～ ｉ9にかけて広範囲で検出した。東西に19.92m、南北の幅は最も広い箇所で1.76mを測り、狭い箇所では0.5mの規模である。南側は調査区外となり、北から南に向かい傾斜しており、最大傾斜角は約30°である。深さは東側で最も深く1.1mを測る。中央付近では0.5m、西側で0.3mとなる。遺構中央やや東側付近の上層から土師器と瓦器の皿・小皿が纏まって出土している。出土遺物から、鎌倉時代中頃に旧地形の整地に伴い埋没したものと考えられる。

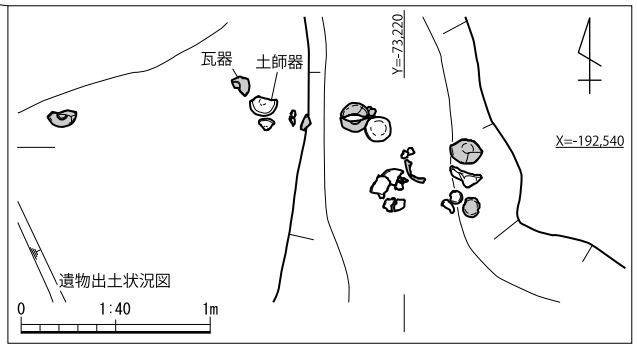
その他、１区では各遺構面において複数の柱穴を確認した。第１面では４基、第３面で５基が近接して検出されている。明確な建物跡を確認するまでには至っていないが、何らかの建物が存在した可能性が考えられる。また埋土は褐灰色、にぶい黄褐色、褐色の３種類に分けられ、埋土の様相や出土遺物から中世に帰属するものと考えられる。



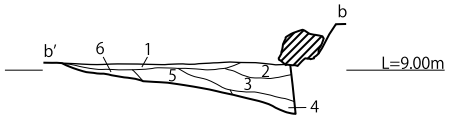
セクション 1



1. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂　風化礫粒状に入る
2. 黄褐色 (2.5Y5/3) 細砂　にぶい黄褐色 (10YR5/3), 風化礫入る
3. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂　風化礫粒状に入る
4. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂　風化礫少量入る
5. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂
6. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂　風化礫入る
7. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂　風化礫 5 ～ 10 ㎝大入る
8. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂
9. にぶい黄橙色 (10YR6/4) 細砂～シルト　風化礫入る

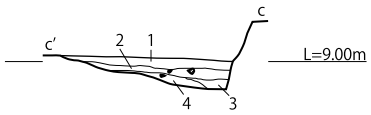


セクション 2



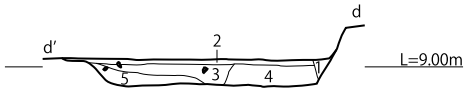
1. にぶい黄色 (2.5Y5/3) ～灰褐色 (2.5YR5/1) 細砂　風化礫入る
2. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細砂　風化礫入る
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　風化礫小粒入る
4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫入る
5. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　褐灰色 (10YR5/1) 混ざる
6. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂　褐灰色 (10YR6/1) 混ざる

セクション 3



1. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂　褐灰色 (10YR4/1) 多量 , 風化礫入る
2. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂　にぶい黄褐色 (10YR5/4), 風化礫 5 ～ 3 ㎝大入る
3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細砂　風化礫粒状に入る
4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂　褐灰色 (10YR4/1) 粒状 , 風化礫 3 ㎝大入る

セクション 4



1. 灰色 (N4/0) 撹乱
2. 黄灰色 (2.5Y5/1) 細砂　風化礫粒状に入る
3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) ～にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫 5cm 大入る
4. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂　褐灰色 (10YR4/1), 風化礫粒状に入る
5. 灰黄褐色 (10YR5/2) 細砂　風化礫 5cm 大入る

土層図
0
1:40
1m

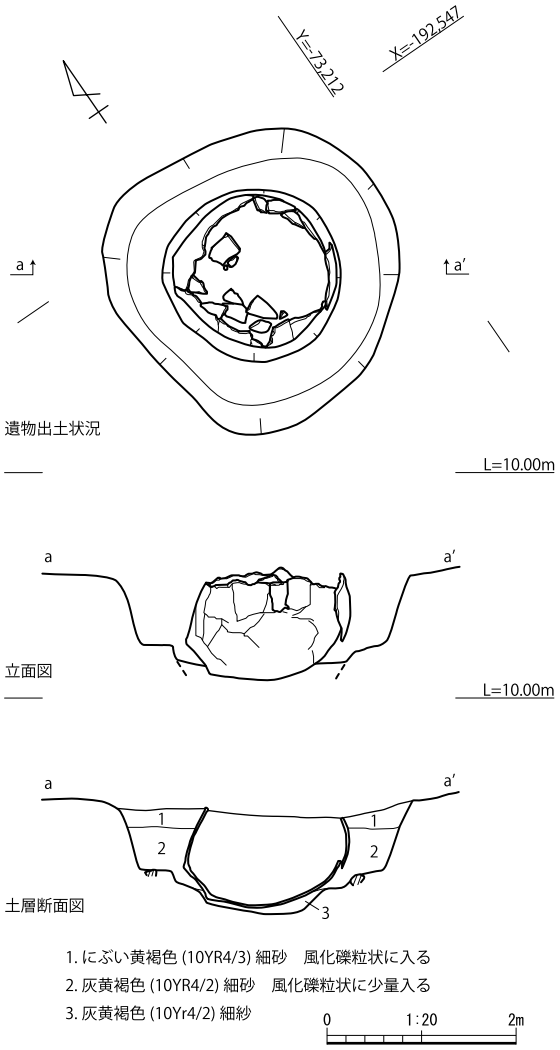
第11図　落ち込み2

弥生時代・古墳時代の遺構

土坑1-2-1　調査区B6･ｖ10で検出した土坑で、南北1.42mで東西0.8mの楕円形を呈し、東側でやや南に曲がる。深さは0.21mで、埋土はにぶい黄褐色の細砂に地山の風化礫が混ざる。遺物は出土していないが、埋土の状況から弥生時代中期に帰属すると考えられる。

土坑1-2-2　調査区B6･w10で検出した土器棺墓である。土器棺の上部が一部露出する状態で検出された。東西0.78m、南北0.80mの不整形な円形を呈し、深さは0.3mで底面に一段面をもつように掘削されていた。埋土は黄褐色の細砂である。土器棺は口縁部を打ち欠いた甕と、甕の底部を倒立させて転用した蓋をかぶせた状態で出土している。口縁部を南東に向け斜めに据えられており、弥生時代中期に帰属すると考えられる。

土坑1-2-11　調査区B6･v9の竪穴建物の南西側で検出した。東西2.92m、南北1.14mの楕円形を呈する。深さは西側で約0.1mを測り、一旦平坦面を持つが、中央付近より一段深くなり、東側では0.29mを測る。埋土はにぶい黄褐色の細砂に風化礫が混じる。遺物は弥生土器片が出土している。

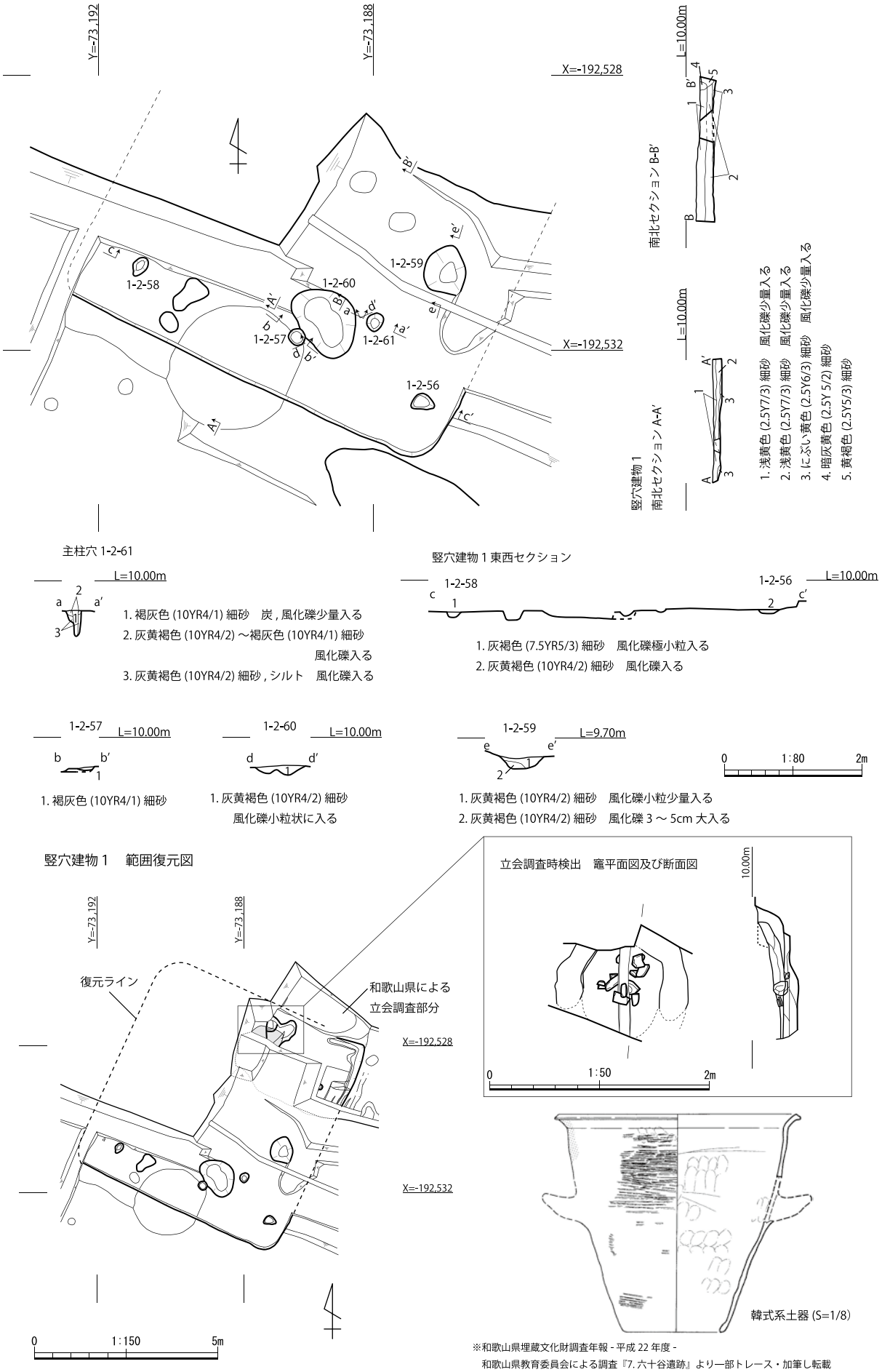


第 12 図　土坑 1-2-2

土坑1-2-47　竪穴建物１の南側で北半分を重複するように検出した。遺構の規模は直径1.88mの円形で、深さは0.23mを測る・遺物は出土していない。切り合い関係より、竪穴建物１より古いと考えられる。

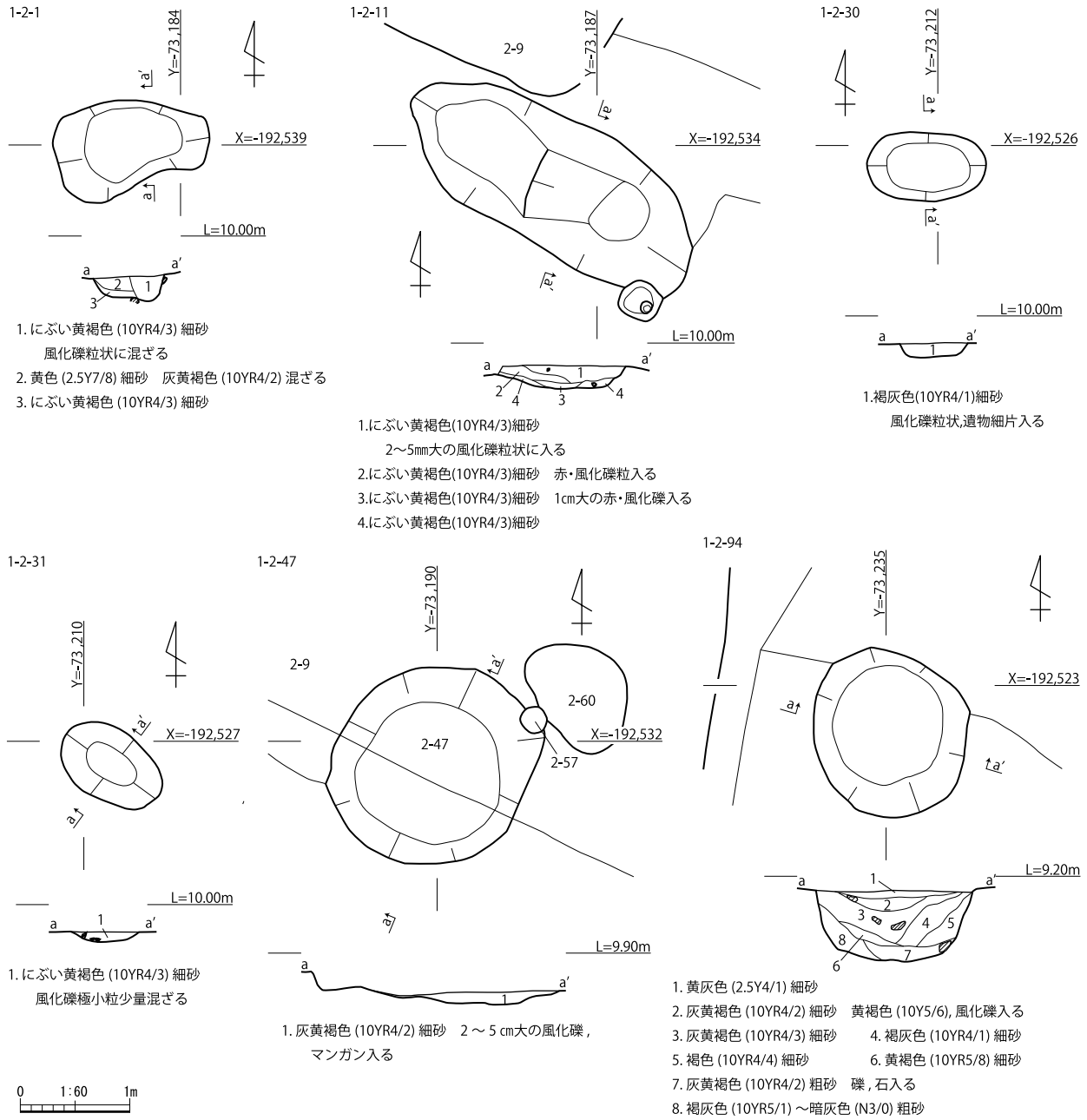
竪穴建物１　調査区B6・ｖ8,9、w8,9に位置し、南半部分を検出した。遺構の北側は調査区外に延び、中央は現代の水道管により削平されていた。規模は南辺が5.42m、形状は隅丸方形の竪穴建物である。上面は後世に削平されたと考えられ残存する深さは0.13mである。遺物は埋土から須恵器杯身や無蓋高杯が出土し、付属施設は貯蔵穴と考えられる土坑を２基（1-2-59・1-2-60）、柱穴１基（1-2-61）を検出した。土坑1-2-60は長径1.09m、短径0.80mの楕円形を呈し、深さは0.15mである。出土遺物は土師器、砥石がある。土坑1-2-59は直径約0.70mの不整形な円形を呈し、深さは0.12mで土師器が出土している。柱穴1-2-61は南東に位置し、直径約0.15m、深さ0.32mを測る。埋土は褐色系の細砂で遺物は出土していない。

本調査区外となる調査区北側部分は、県文化遺産課により立会調査が実施され、その際、竪穴建物の北東隅部と竈が検出されている。竈の焼成部には石製支脚が据えつけられ、周辺に韓式系の甑が出土している。帰属時期は古墳時代中期と考えられる。



※和歌山県埋蔵文化財調査年報 - 平成 22 年度 -
和歌山県教育委員会による調査『7. 六十谷遺跡』より一部トレース・加筆し転載

第 13 図　竪穴建物1



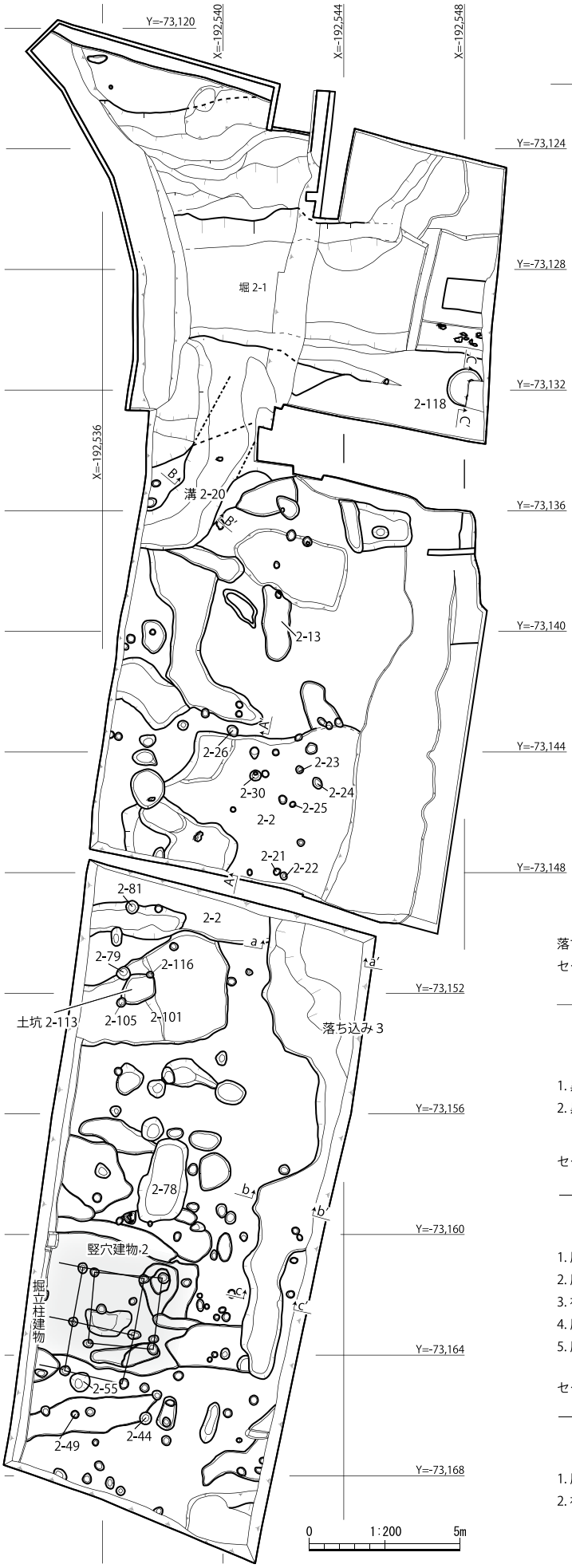
第 14 図　1区　第3面検出遺構（土坑）

第２節　２区の遺構

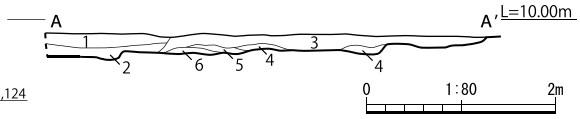
２区では竪穴建物や掘立柱建物、堀状遺構などの弥生時代及び中世の遺構を検出した。また遺構面は上層の整地土層により削平されており時期・用途が不明な遺構も多い。

土坑2-13　調査区B6・j11で検出した土坑で、東西0.6m、南北1.58mの不整形な楕円形を呈する。深さは0.09mである。埋土は灰黄褐色の細砂で、遺物は土師器細片とサヌカイト片が出土している。

土坑2-78　調査区中央やや西側に位置し、後述する竪穴建物２の南東に位置する。南北2.75mで東西は最大で1.54mの長方形を呈し、深さは0.45mを測る。埋土は黒褐色の細砂で炭粒が混ざる。遺物は出土していない。

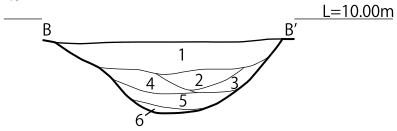


土坑 2-2



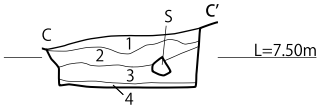
1. 褐灰色 (10YR4/2) 細砂　風化礫粒状に入る
2. 黒褐色 (7.5YR3/1) 細砂　風化礫入る
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　風化礫粒 , 炭 , 土器片入る
4. 黒褐色 (10YR3/1) 細砂　風化礫 5cm 大入る
5. 黒褐色 (10YR3/1) 細砂　風化礫 , 炭入る
6. 黒褐色 (10YR3/2) 細砂　風化礫 5cm 大入る

溝 2-20



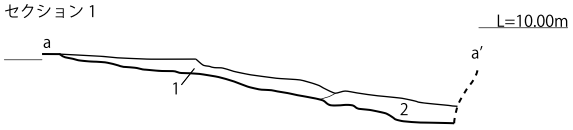
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) ～にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂
　風化礫粒 , 礫入る
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) ～褐灰色 (10YR4/1) 細砂
　風化礫粒 , 炭入る
3. 黒褐色 (10YR3/2) 細砂　にぶい黄褐色 (7.5YR4/3), 炭入る
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂
　にぶい黄褐色 (10YR4/3), 風化礫粒 , 炭入る
5. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂
　灰褐色 (7.5YR4/2), 風化礫粒少量入る
6. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂

土坑 2-118



1. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫粒入る
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　礫多く入る
3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) ～にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂～シルト
　礫多量 , 炭入る
4. 暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルト　にぶい黄橙色 (10YR6/4) 混ざる

落ち込み 3
セクション 1

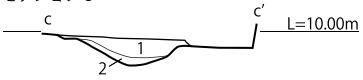


1. 黒褐色 (10YR3/2) 細砂～シルト　風化礫粒 , 炭粒入る
2. 黒褐色 (10YR3/1) 細砂～シルト　風化礫粒多量 , 炭粒入る

セクション 2

1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂　風化礫粒 , 炭入る
2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂
3. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂　風化礫粒多量 , 炭粒入る
4. 灰褐色 (7.5YR5/2) 細砂　風化礫入る
5. 灰褐色 (7.5YR5/2) 細砂

セクション 3



1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂　風化礫粒・炭入る
2. 褐色 (7.5YR4/3) 細砂　黄褐色 (10YR5/4 にぶい), 風化礫入る

0　1:60　1m

第 15 図　2区 遺構配置図・個別遺構土層断面図

中世の遺構

土坑2-2　調査区中央で検出した遺構である。南側は撹乱により削平されており遺構の規模は不明である。検出した規模は東西約3.9m、南北約4.7mと大型のもので、深さは0.17mを測る。埋土は灰黄褐色の細砂で、床面はほぼ平坦面を呈す。遺物は弥生土器や土師器が出土した。遺構の性格は不明であるが、鎌倉時代後期に埋没したものと考えられる。

土坑2-55　調査区南西のB6･g9に位置する土坑である。遺構の規模は東西0.52m、南北0.65mの楕円形を呈し、深さは0.28mである。埋土は灰褐色の細砂で炭が多く含まれる。遺物は弥生土器片、土師器、瓦器が含まれ、埋没時期は鎌倉時代と考えられる。

土坑2-59　竪穴建物２の上層で検出した土坑である。長径約1.70m、短径1.25mの雫型を呈し、深さは0.04mである。遺物は土師器片と瓦器が出土し、中世に帰属するものと考えられる。

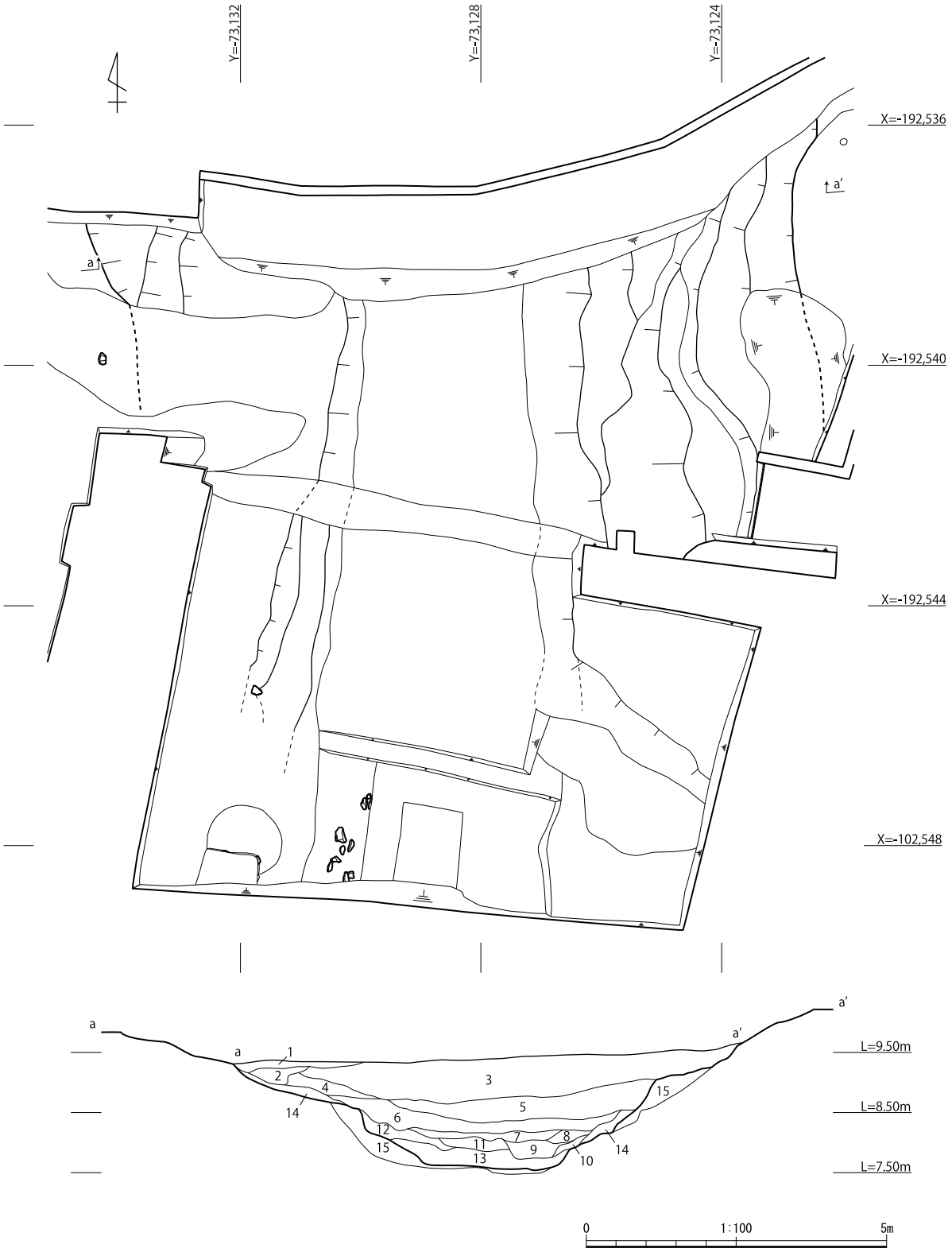
土坑2-101　調査区中央のB6・m10に位置し、土坑2-2と一部重複する。北側は調査区外となる。東西約1.82m、南北約2.45m以上である。深さは約0.07mで遺構中央から南側にかけて一段低くなり約0.12mとなり、埋土は黒褐色の細砂である。切り合い関係から土坑2-2より古いが時期差はあまりないと考えられる。

土坑2-118　調査区南東のB6・ｈ12で検出した。調査区南東は後世に建築物が建設されていたことにより削平され調査区南側の道路面と同じ標高である。直径1.14mで深さは0.38mが残存している。埋土はにぶい黄褐色の細砂で約10㎝大の河原石が入る。床面と壁面には暗灰黄色のシルト質土の堆積が見られた。遺物は室町時代中頃と考えられる備前焼の擂鉢が出土している。掘削深度は旧地山の標高から非常に深いものと推測され、井戸の可能性も考えられる。

堀状遺構2-1　調査区東側に位置する堀状の遺構で、北側は調査区外で、南側の一部は撹乱により削平されており、遺構の全容は不明であるが延長10.92m分を検出した。遺構の掘肩の幅は12.02m、底面の幅は2.65mで、深さは1.89mを測る。断面の形状は逆台形状を呈し、遺構の方位はほぼ真北を向いている。埋土は大きく３層に分類でき、上層はにぶい黄褐色の細砂である。中層は灰黄褐色の細砂でややシルト質土が混ざるようになり、下層では黒褐色のシルト質土となる。出土遺物は上層からは土師器片、瓦器が見られる。またその他、弥生土器や石包丁なども出土している。遺構の埋没時期は遺物の包含状況から下層は14世紀初頭頃、中層は14世紀後半頃と考えられ、徐々に埋没したものと考えられる。

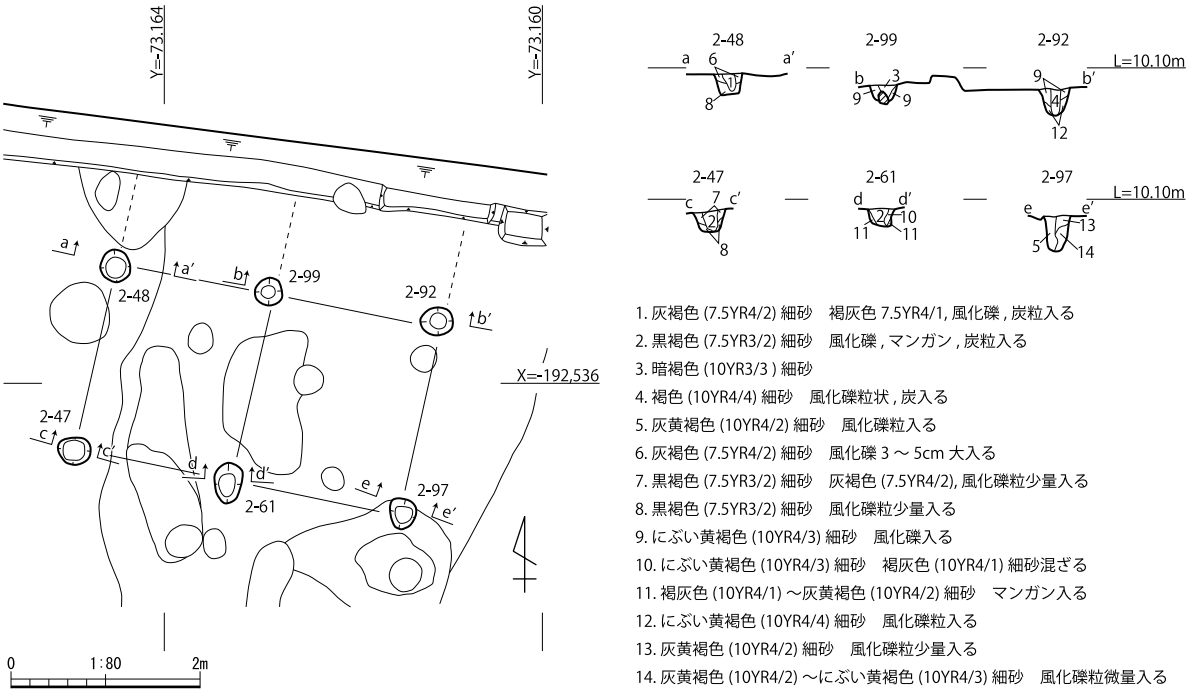
溝2-20　堀状遺構2-1の西側で検出した。遺構北側は調査区外となる。掘肩の幅は1.8mで深さは0.6mを測り、断面の形状はU字型を呈している。流水方向は南東方向で、南に向けて急激に落ち込むように掘削されており、堀状遺構2-1により東側部分は削平されている。出土遺物は土師器や輸入磁器の青磁がある。

掘立柱建物　竪穴建物２の上面で検出した掘立柱建物である。規模は東西２間×南北２間以上で南北方向については調査区外の北側に続く可能性が考えられる。検出した柱穴は直径約0.30mである。深さは約0.20mで、最も深い柱穴2-97は0.37mである。柱間の幅は東西方向の2-48と2-99の



1. 褐色 (10YR4/4) 細砂　風化礫粒多量に入る
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫粒少量 , 礫入る
3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 細砂　灰黄褐色 (10YR5/2), 風化礫入る
4. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　風化礫粒入る
5. 灰黄褐色 (10YR4/2) ～にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫入る
6. 灰黄褐色 (10YR4/2) ～灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂～シルト　風化礫粒入る
7. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂～シルト　褐灰色 (10YR4/1), 風化礫粒 , 炭入る
8.7 よりやや柔らかく粘質
9. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂～シルト　風化礫粒微量入る
10. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂～シルト　風化礫粒 , 玉石入る
11. 褐灰色 (10YR4/1) ～灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂～シルト
　風化礫粒 , 炭少量入る
12. 黒褐色 (10YR3/1) シルト　にぶい黄褐色 (10YR4/3), 風化礫粒入る
13. 黒褐色 (10YR3/1) シルト
　にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト～中砂やや粘質 , 風化礫粒少量入る
14. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 細砂　褐灰色 (10YR 5//1), 風化礫粒入る
15. 褐色 (10YR4/4) 礫層　地山

第 16 図　堀状遺構 2-1



第 17 図　掘立柱建物

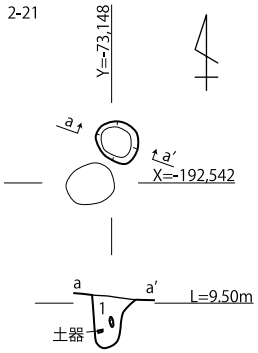
間で1.65m、2-99から2-92の間で1.80mである。南側の2-47と2-61の間では1.65m、2-61から2-97の間で1.90mである。南北方向は2-48と2-47の間で2.01m、その他は2.08mを測る。主軸方向はN-13°-Wである。埋土は黒褐色から灰褐色系で、遺物は2-47から土師器片が、2-61と2-97からは土師器と瓦器の細片が出土している。埋没時期は中世に帰属すると考えられる。

柱穴　調査区の全域で複数の柱穴を検出しており、調査区東側の土坑2-2掘削後に集中して検出した。柱穴2-26は調査区B6・k11で検出し、直径0.32m、深さ0.29mで埋土は黒褐色の細砂である。遺物は摩滅した土器片が混ざる。柱穴2-30は調査区B6・l11で検出し、直径0.35m、深さ0.25mで埋土は黒褐色の細砂である。遺物は土師器砕片が混ざる。また調査区西側では、柱穴2-44は調査区B6・q10で検出し、直径0.33m、深さ0.18mで埋土は灰褐色の細砂である。柱穴2-49は調査区B6・q9で検出し、直径0.26m、深さ0.26mで埋土は灰黄褐色の細砂で遺物は含まない。柱穴2-81は調査区B6・m10で検出し、直径0.36m、深さ0.2mで遺物は弥生土器の細片と土師器片が出土した。

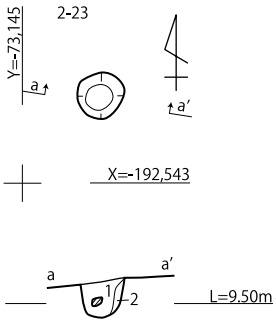
ピット　土坑2-2の床面に集中して見られた。ピット2-21は直径0.23m、深さは0.28mで埋土は灰褐色の細砂である。ピット2-23は直径0.24m、深さは0.19mで埋土は灰黄褐色の細砂である。遺物は瓦器の細片が含まれる。ピット2-25は直径0.20m、深さは0.15mで遺物は土師器が出土した。

複数の柱穴及びピットを検出したが、それぞれの埋土の色は異なっているものの時期差はほぼ無いと推測される。検出した遺構からは明確な建物跡を復元するには至らなかったが、何らかの建物が存在した可能性が考えられる。

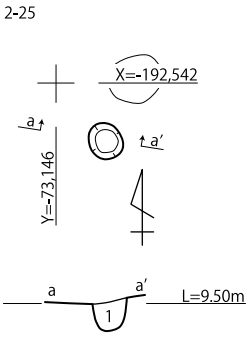
落ち込み３　調査区南側で検出した落ち込みで、１区で検出した落ち込み２と同一のものと考えられる。南側及び東側は既存の擁壁やコンクリート製の階段等の建設の際に削平されていた。東西方向の延長は15.2m以上と考えられる。床面は北から南へ緩やかに傾斜しており、標高は北側



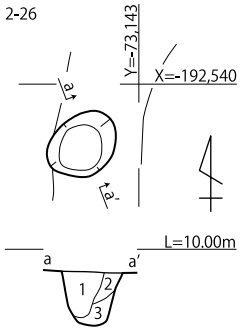
1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂
風化礫 , 炭 , 礫入る



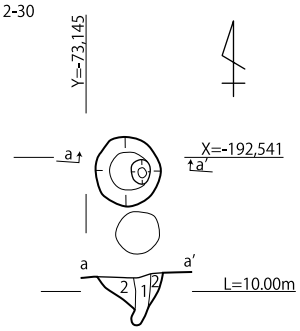
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂
風化礫 , 炭入る
2. 褐色 (10YR4/4) 細砂



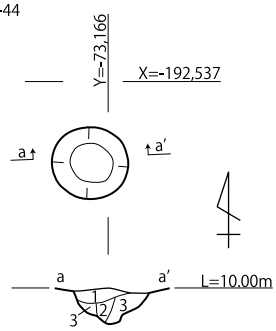
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂
風化礫粒入る



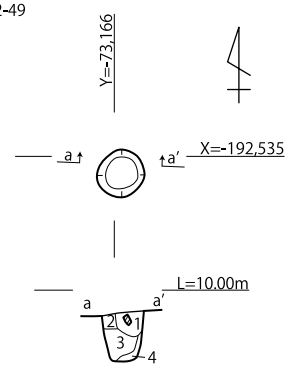
1. 黒褐色 (7.5YR2/2) 細砂　風化礫 , 炭入る
2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細砂　褐色 (7.5YR4/3) 細砂 ,
風化礫 , 炭入る
3. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細砂　風化礫入る



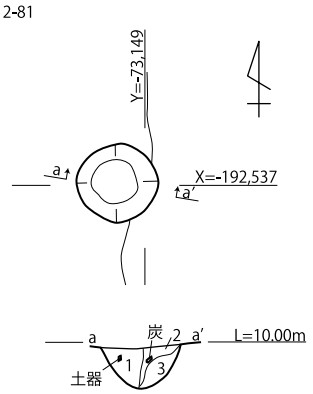
1. 黒褐色 (10YR3/2) 細砂　風化礫粒入る
2. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂
にぶい黄褐色 (10YR4/3), 風化礫入る



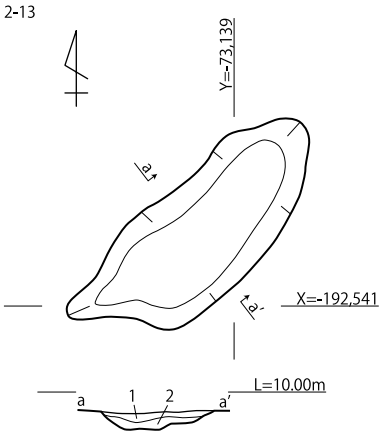
1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂　褐灰色 (7.5YR4/1) 細砂 ,
風化礫粒入る
2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂



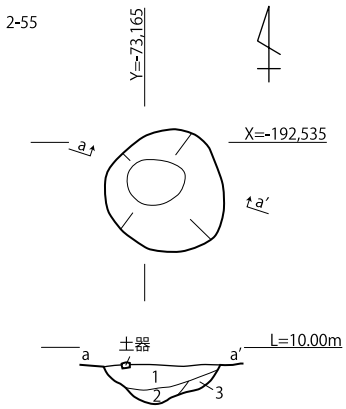
1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　風化礫粒入る
2. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂　風化礫入る
3. 灰褐色 (7.5YR4/2) ～黒褐色 (7.5YR3/2) 細砂
風化礫粒入る
4. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂　風化礫粒入る



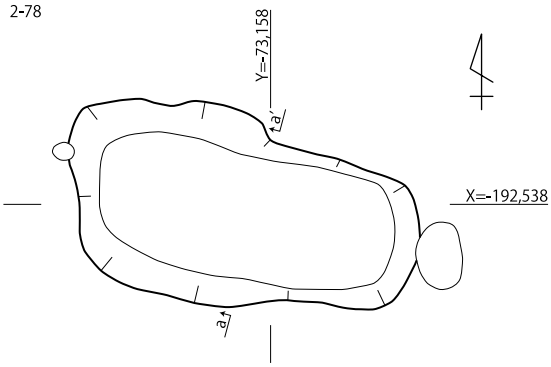
1. 暗褐色 (10YR3/4) 細砂
黄褐色 (10YR5/6) 細砂微量 , 炭入る
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　炭入る
3. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　マンガン入る

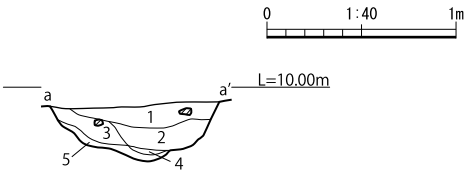


1. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂
風化礫極小粒入る
2. にぶい黄褐色 (10YR5/4) シルト～細砂



1. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂　風化礫粒 , 礫粒 , 炭多量入る
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫入る
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂





1. 黒褐色 (7.5 YR3/2) 細砂　褐色 (7.5YR4/3) 細砂 , 風化礫 , マンガン粒入る
2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細砂～シルト　褐色 (7.5YR4/3), 風化礫 , 炭粒入る
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫粒入る
4. 暗褐色 (10YR3/3) シルト　マンガン粒微量入る
5. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫粒多量入る

0　1:60　1m

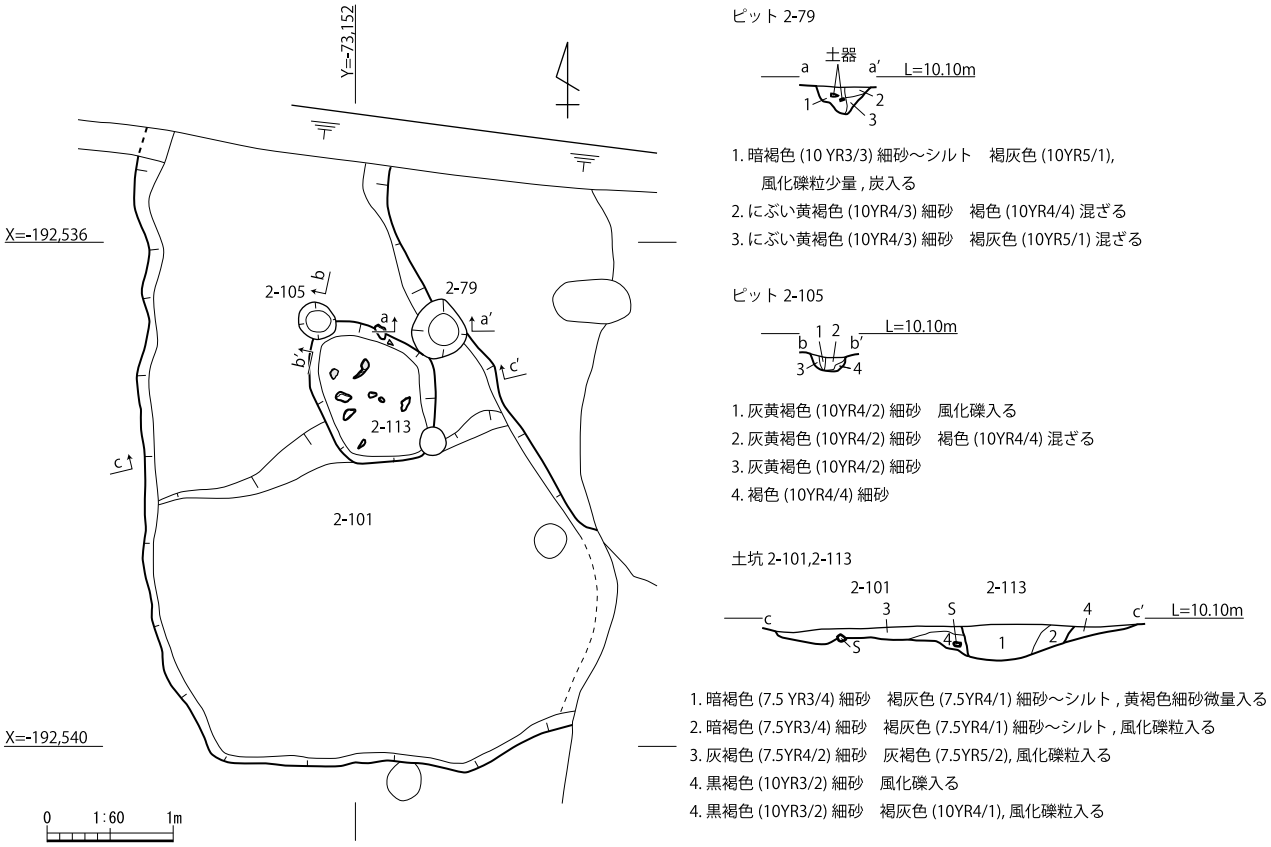
第 18 図　2区 検出遺構（ピット・柱穴・土坑）

で9.6 ～ 9.8m、南側は中央付近が高く9.66mで最も低い南東側は9.28mである。遺物は土師器、瓦器等が出土している。

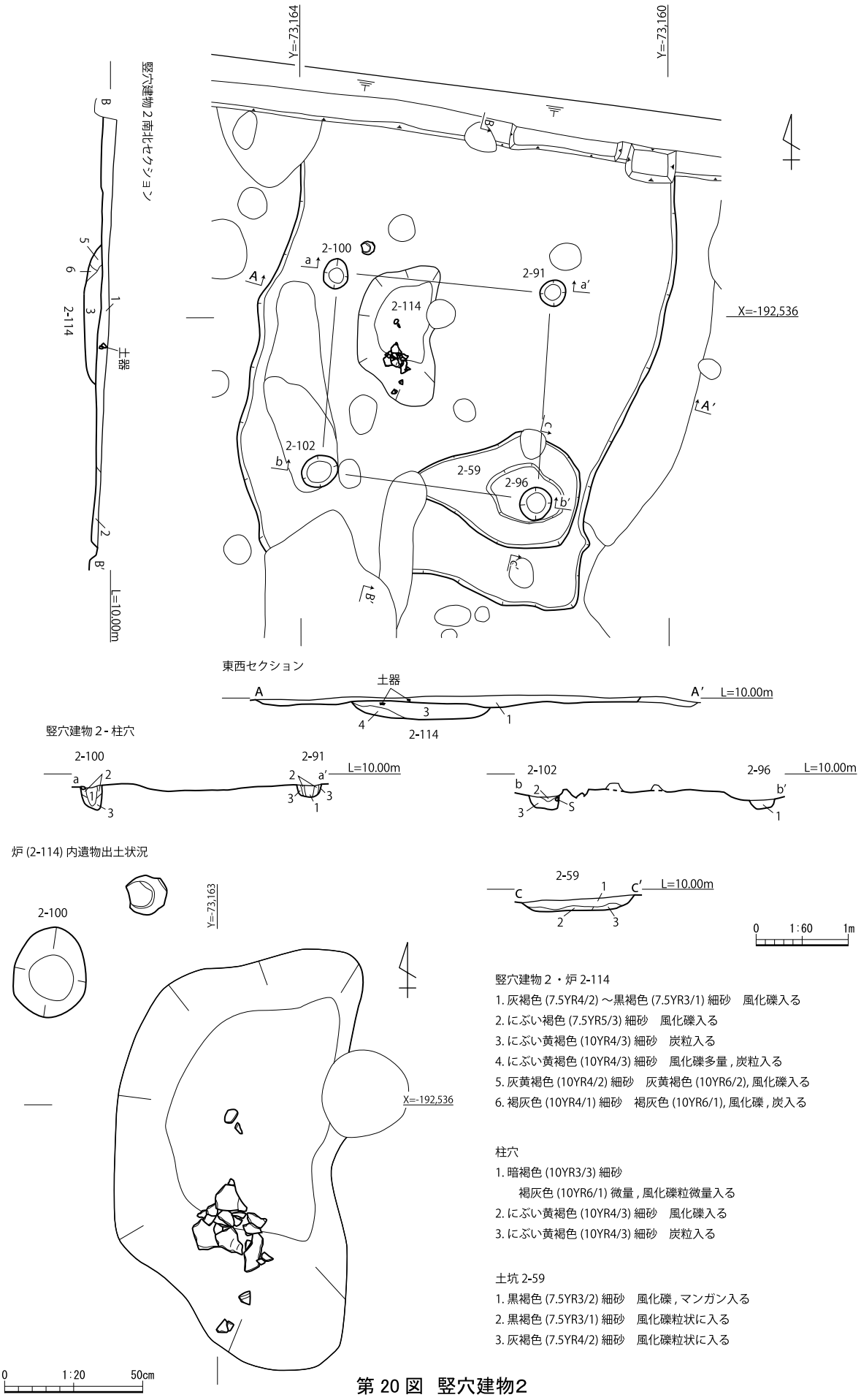
弥生時代の遺構

土坑2-113　調査区B6・m10に位置し、土坑2-101の下面で検出した遺構である。遺構の規模は長径1.25m、短径0.96mである。深さは0.18mで、埋土は暗褐色の細砂である。遺物は弥生時代中期の壺が出土している。

竪穴建物２　調査区西側に位置する遺構で、北側は調査区外に広がり、南側は他の遺構により削平されているため、規模平面形は不明である。検出した規模は、東西4.27m、東辺は4.98m以上となることから、長方形の竪穴建物と推測される。深さは0.1mで埋土は灰褐色から黒褐色の細砂である。遺物は埋土から弥生土器の甕が出土ており須恵器は含まれない。付属施設は中央やや西側に炉と推測される土坑2-114と４本の主柱穴（2-91・2-96・2-100・2-102）を検出した。土坑2-114は長径1.22m、短径0.84mの不整形な楕円形を呈し、深さは0.20mである。遺物は長頸壺が出土しており、底部は欠損している。埋土はにぶい褐色の細砂で炭が含まれる。柱穴は直径約0.20m ～ 0.30mで、深さは北側で約0.30m、南側の柱穴は上面遺構により削平され約0.10mが残存している。柱間は2-91と2-100の間で2.35m、2-96と2-102の間で2.40mである。また南北方向の2-100と2-102の間は2.14mで、2-91と2-96の間で2.34mである。埋土は柱痕が黒褐色の細砂で、掘方はにぶい黄褐色の細砂である。遺物は弥生土器の細片が含まれる。土坑2-114の遺物等から遺構の時期は弥生時代中期と推測される。



第 19 図　土坑 (2-101･2-113)・ピット (2-79･2-105)



竪穴建物２・炉 2-114

1. 灰褐色 (7.5YR4/2) ～黒褐色 (7.5YR3/1) 細砂　風化礫入る
2. にぶい褐色 (7.5YR5/3) 細砂　風化礫入る
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　炭粒入る
4. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫多量 , 炭粒入る
5. 灰黄褐色 (10YR4/2) 細砂　灰黄褐色 (10YR6/2), 風化礫入る
6. 褐灰色 (10YR4/1) 細砂　褐灰色 (10YR6/1), 風化礫 , 炭入る

柱穴

1. 暗褐色 (10YR3/3) 細砂
　褐灰色 (10YR6/1) 微量 , 風化礫粒微量入る
2. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　風化礫入る
3. にぶい黄褐色 (10YR4/3) 細砂　炭粒入る

土坑 2-59

1. 黒褐色 (7.5YR3/2) 細砂　風化礫 , マンガン入る
2. 黒褐色 (7.5YR3/1) 細砂　風化礫粒状に入る
3. 灰褐色 (7.5YR4/2) 細砂　風化礫粒状に入る

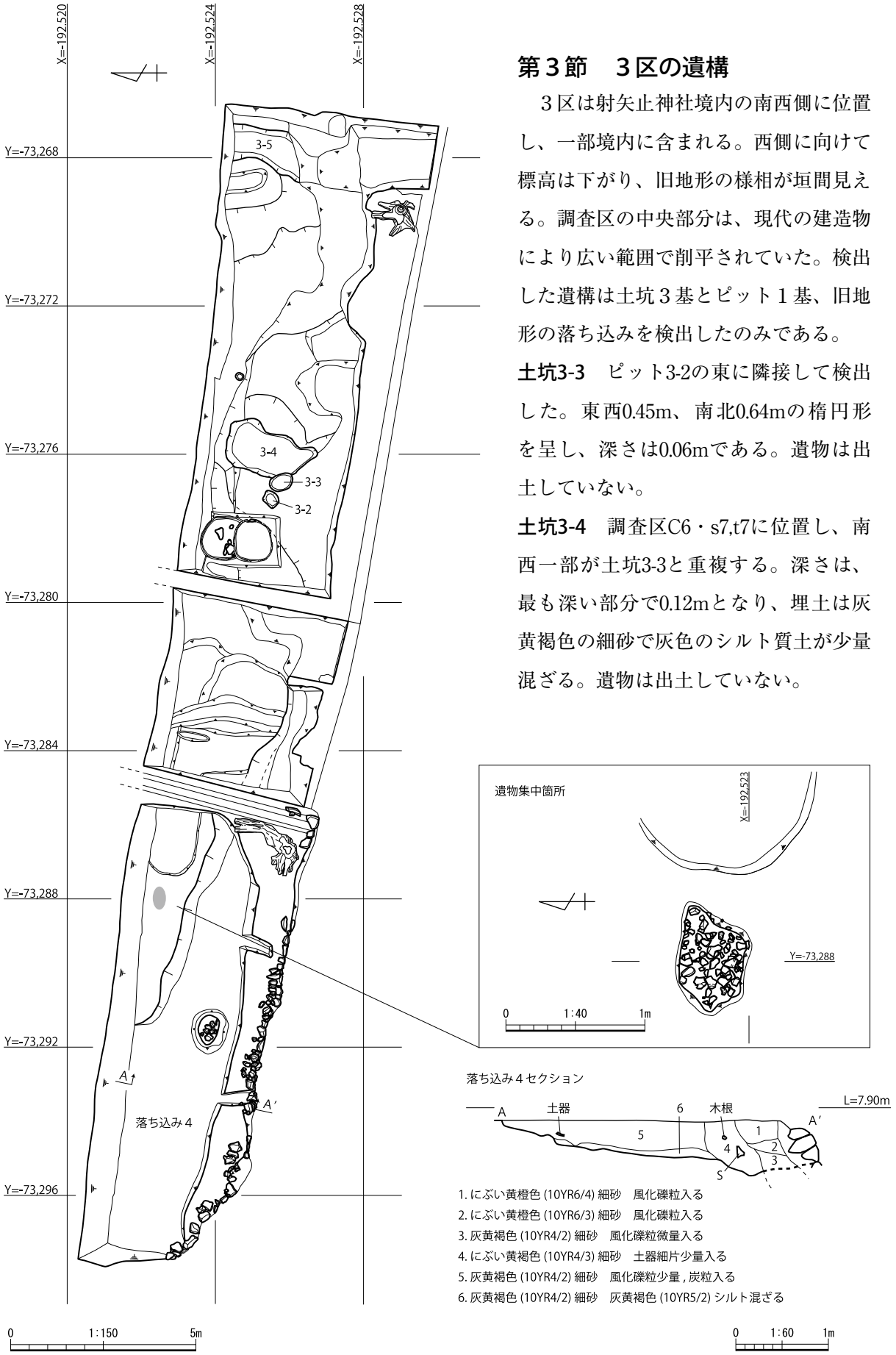
第 20 図　竪穴建物2

第３節　３区の遺構

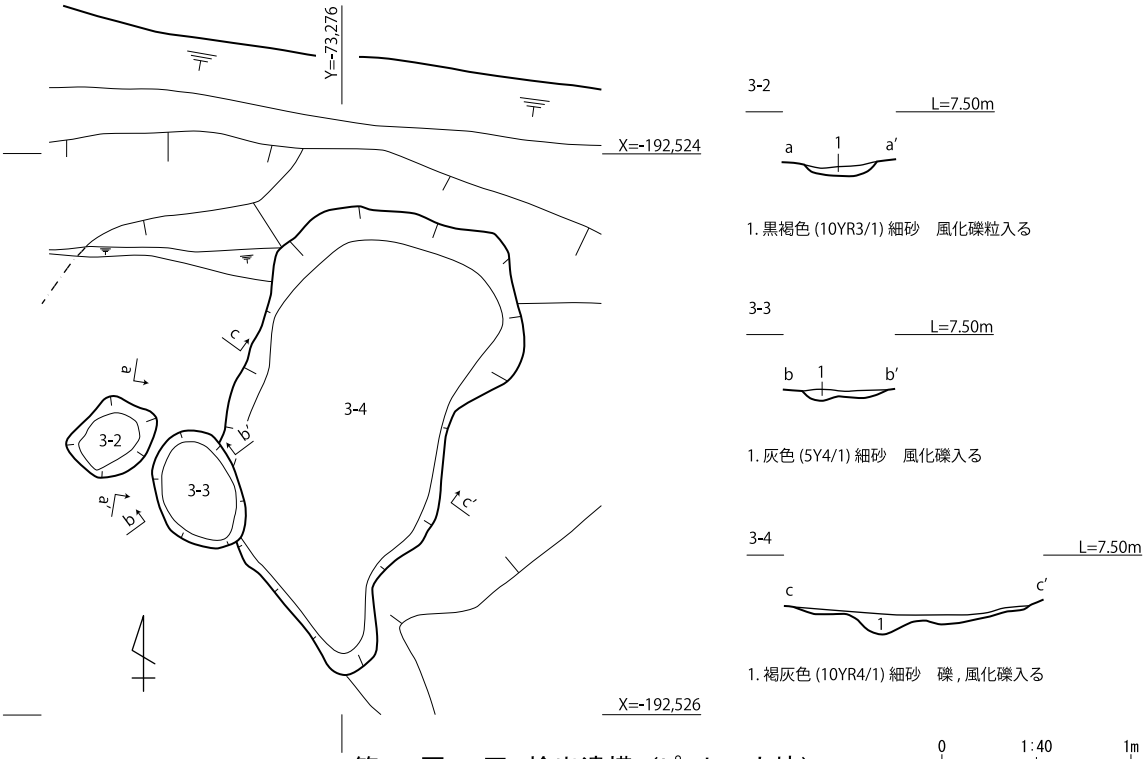
３区は射矢止神社境内の南西側に位置し、一部境内に含まれる。西側に向けて標高は下がり、旧地形の様相が垣間見える。調査区の中央部分は、現代の建造物により広い範囲で削平されていた。検出した遺構は土坑３基とピット１基、旧地形の落ち込みを検出したのみである。

土坑3-3　ピット3-2の東に隣接して検出した。東西0.45m、南北0.64mの楕円形を呈し、深さは0.06mである。遺物は出土していない。

土坑3-4　調査区C6・s7,t7に位置し、南西一部が土坑3-3と重複する。深さは、最も深い部分で0.12mとなり、埋土は灰黄褐色の細砂で灰色のシルト質土が少量混ざる。遺物は出土していない。



第 21 図　３区 遺構配置図・落ち込み４・遺物集中箇所



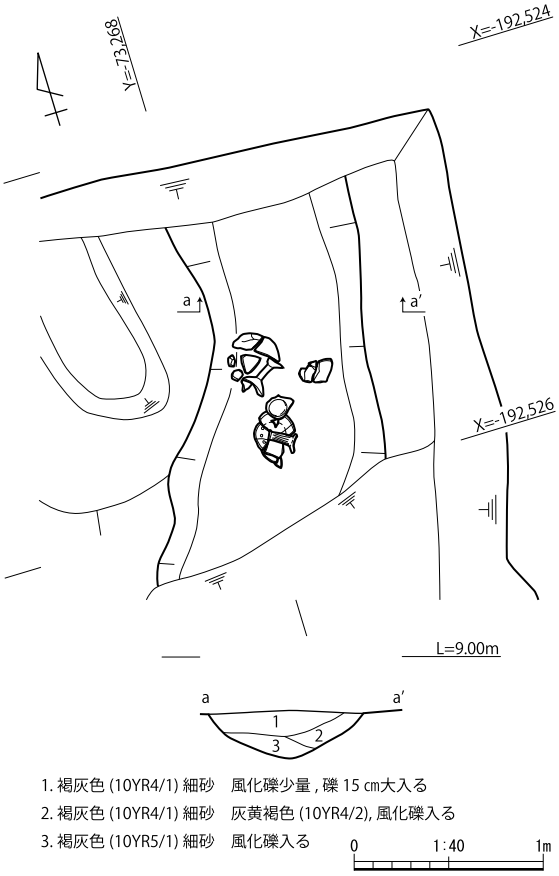
第 22 図　3区　検出遺構（ピット・土坑）

ピット3-2　調査区東側のC6・t7で検出した。規模は東西0.36m、南北0.48mで深さは0.05mの非常に浅いものである。遺物は土師器細片が１点のみ出土している。検出した遺構は、後世の建築物等により掘削されており、極浅く遺構が残存したと推測される。遺構の時期は不明である。

中世の遺構

調査区西側の遺構検出面において、土師器・瓦器が集中して出土した。

落ち込み４　調査区西から中央部の南西において検出した落ち込みである。床面は調査区西側の北東にかけて平坦面を持ち、西側に向かい標高を下げる。埋土からは弥生時代前期と考えられる遺物を初め、多くの遺物が出土している。埋土の堆積状況は灰黄褐色の細砂が固く締まった状態である。１区で検出した落ち込み２の西側の延長部分になると推測され、落ち込み２の西端部は射矢止神社付近で南側に広がり、３区の中央付近から西側にかけてやや北側に入ると考えられ、射矢止神社境



第 23 図　土坑 3-5

内付近はやや南側に張り出すように段丘地形が形成されていたと推測される。

弥生時代の遺構

土坑3-5　調査区東端で検出した。残存規模は東西約0.8m、南北約1.50mである。北側は調査区外となり南側については削平されていた。深さ0.35mを測り、埋土は褐色の細砂に地山の風化礫が混ざる。埋土から弥生時代後期の高杯が出土しており、弥生時代中期に帰属すると考えられる。

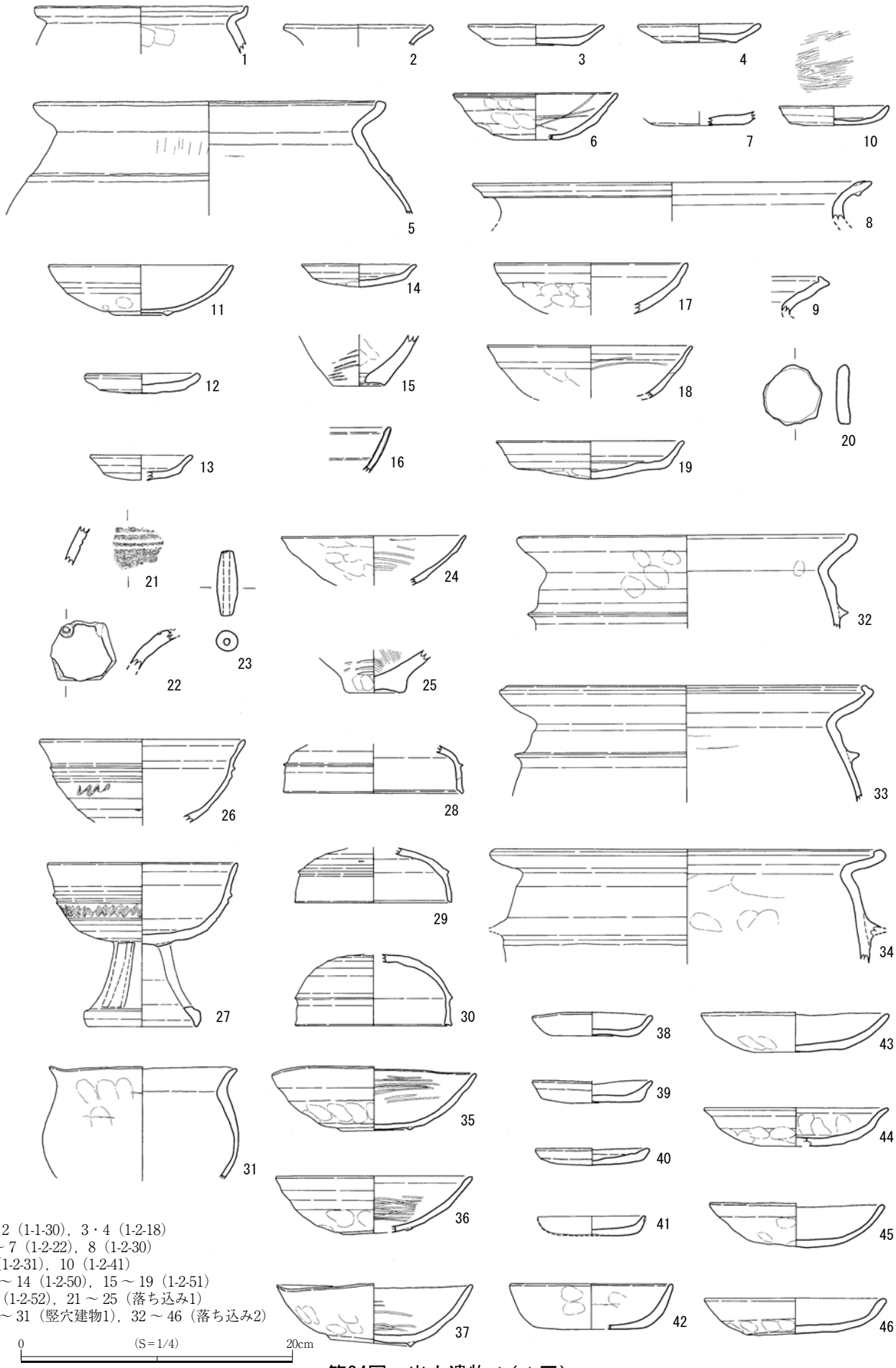
第５章　出土遺物

第１節　土器

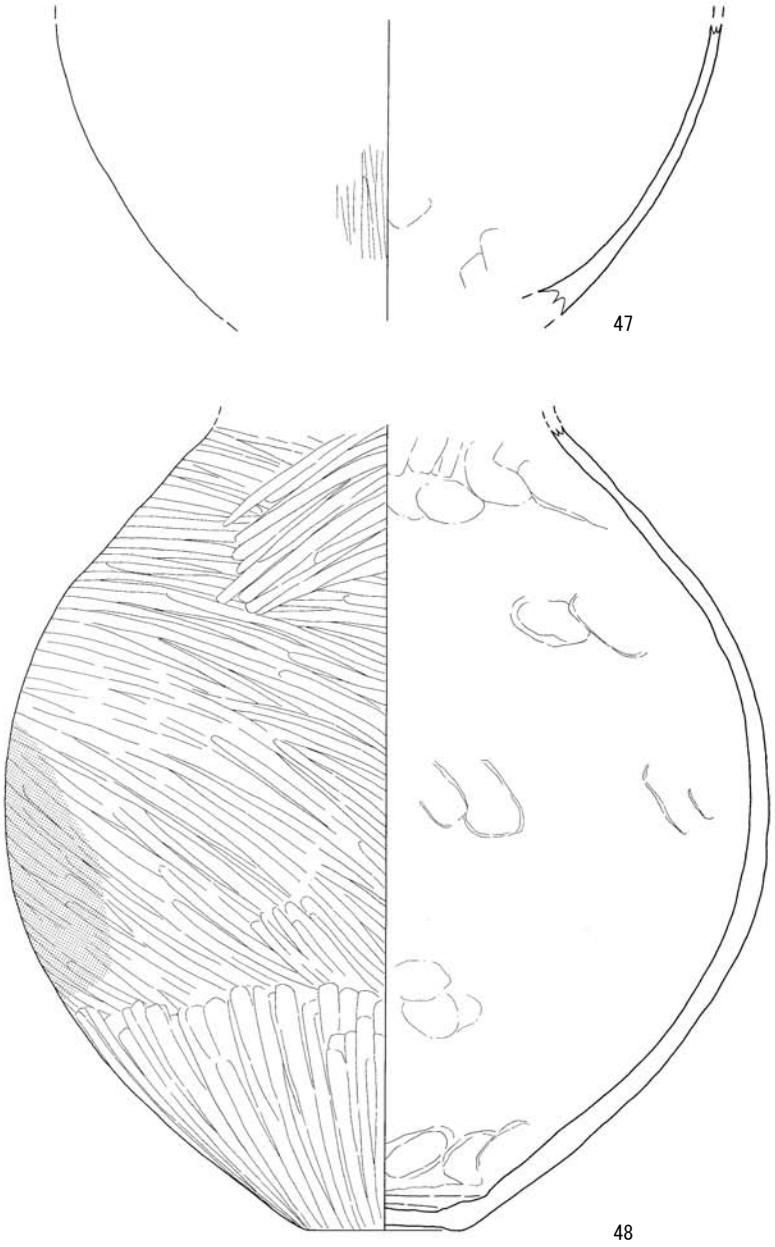
出土遺物は弥生土器、土師器、瓦器が大半を占める。一方、須恵器の出土量は少ない。また古代、近世の遺物も出土しているが比較的少ない。遺物の記載に関しては時代別に掲載すべきであるが、各遺構から多様な遺物が出土した為遺構別の記載とし、その順序については基本的に各調査区の遺構番号順とし、詳細については遺物観察表に記載した。

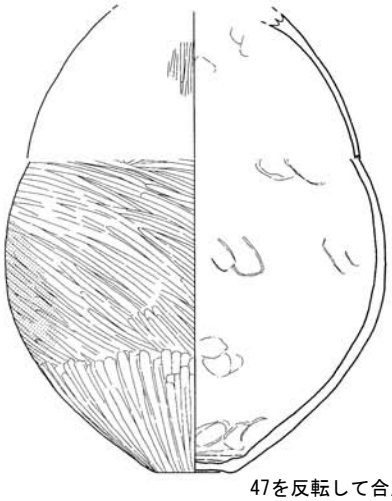
１区の遺物

1・2は土坑1-1-30から出土した遺物で、1は小型の甕である。庄内期に帰属すると考えられる。3･4は柱列から出土した土師器の小皿で13世紀の鎌倉時代と考えられる。4は底部に回転糸切痕が残る。5 ～ 7は土坑1-2-22から出土した遺物で、5は土釜である。体部上方で薄い突帯が張り付き、鍔部が退化したもので鎌倉時代のものと考えられる。6は瓦器碗で、高台が消滅しており、内面に平行する暗文が施される。9は土坑1-2-31から出土した土師器の土釜口縁部である。10は土坑1-2-41から出土した土師器の小皿で、手づくねにより成形したものと考えられる。見込みには渦巻き状のヘラミガキが密に施される。11 ～ 14は土坑1-2-50から出土した遺物で11 ～ 13は瓦器である。11は碗で退化した帯状の貼付高台が付く。12･13は小皿で､12は切り込み円盤技法と推測される。13の復原径は7.4㎝、器高1.9㎝と小さいものである。14は土師器小皿で口縁部にススが付着する。15 ～ 19は土坑1-2-51から出土した遺物で15は弥生土器で小型の鉢の底部である。底部中央には焼成前に内から外へ施された穿孔が見られる有孔土器である。外面にはやや右上がりのタタキが見られる。弥生時代後期に分類されたものと考えられる。17･18は瓦器碗､19は土師器皿で内面にススが付着している。また外面に粗い指頭圧痕が見られ調整は粗く、内面には凹凸が見られる。21 ～ 25は落ち込み１から出土した遺物である。21はやや粗い胎土で３条の凹線を配し、弥生時代前期の壺の頸部と考えられる。22は弥生土器の広口壺と考えられ、口縁部内面には竹管文が施され弥生時代中期のものである。23は管状土錘で長さは4.8㎝、最大幅1.5㎝の弥生時代のものである。24は瓦器碗で口縁部にヨコナデを施し、体部外面は粗い指頭圧痕が見られる。内面は渦巻き状に暗文が施され13世紀後半の鎌倉時代のものと推測される。26 ～ 31は竪穴建物１から出土した遺物である。26・27は須恵器の無蓋高杯である。27は短脚で３方向に方形の透かしを持つ。杯部は口縁上位に段をなし、中位に７本の波状文が見られる。また下位から底部にはヘラケズリが見られ、



第24図　出土遺物１（１区）





47を反転して合成
復元合成図（S＝1/8）

0　(S＝1/4)　20cm

第25図　出土遺物２（１区）

ロクロ回転方向は右周りである。28･29･30は須恵器の杯蓋である。28は天井部が平らなもので口縁端部は内傾する凹面で段となる。29・30は天井部がやや丸くなるもので、ロクロ回転方向は共に左回りである。26～30はいずれも古墳時代中期の5世紀後半のものと考えられる。31は土師器の小型の壺で、口縁はやや楕円形を呈するものと考えられる。また胴部上位が最大径となり、古墳時代中期～後期にかけてのものと考えられる。32～46は落ち込み２より出土した遺物である。32～33は土釜で、32･33の鍔部幅は１㎝未満のものとなる。34の鍔部幅は1.5㎝で、鍔の下部にススの付着がみられる。35～37は瓦器碗で35は断面逆三角形の高台をもち、36･37は紐状の高台がつく。38･39は瓦器小皿で、40～46は土師器である。40～42は小皿で、42は深身のものとなり、43～46の口径は12.6㎝から13.6㎝である。落ち込み２で検出した遺物は13世紀前半～後半と考えられ、鎌倉時代のものと推測される。47･48は土坑1-2-2より出土した土器棺である。47は弥生土器の甕の底部で上方を欠き逆さにして蓋として被せている。また底面部分は後世の削平により欠損しており一部が残存するものである。残存高は15.5㎝で、外面には縦方向のヘラミガキが見えるものの摩滅が著しい。48もまた弥生土器甕で頸部を打ち欠いたものである。平底の底部で底径は

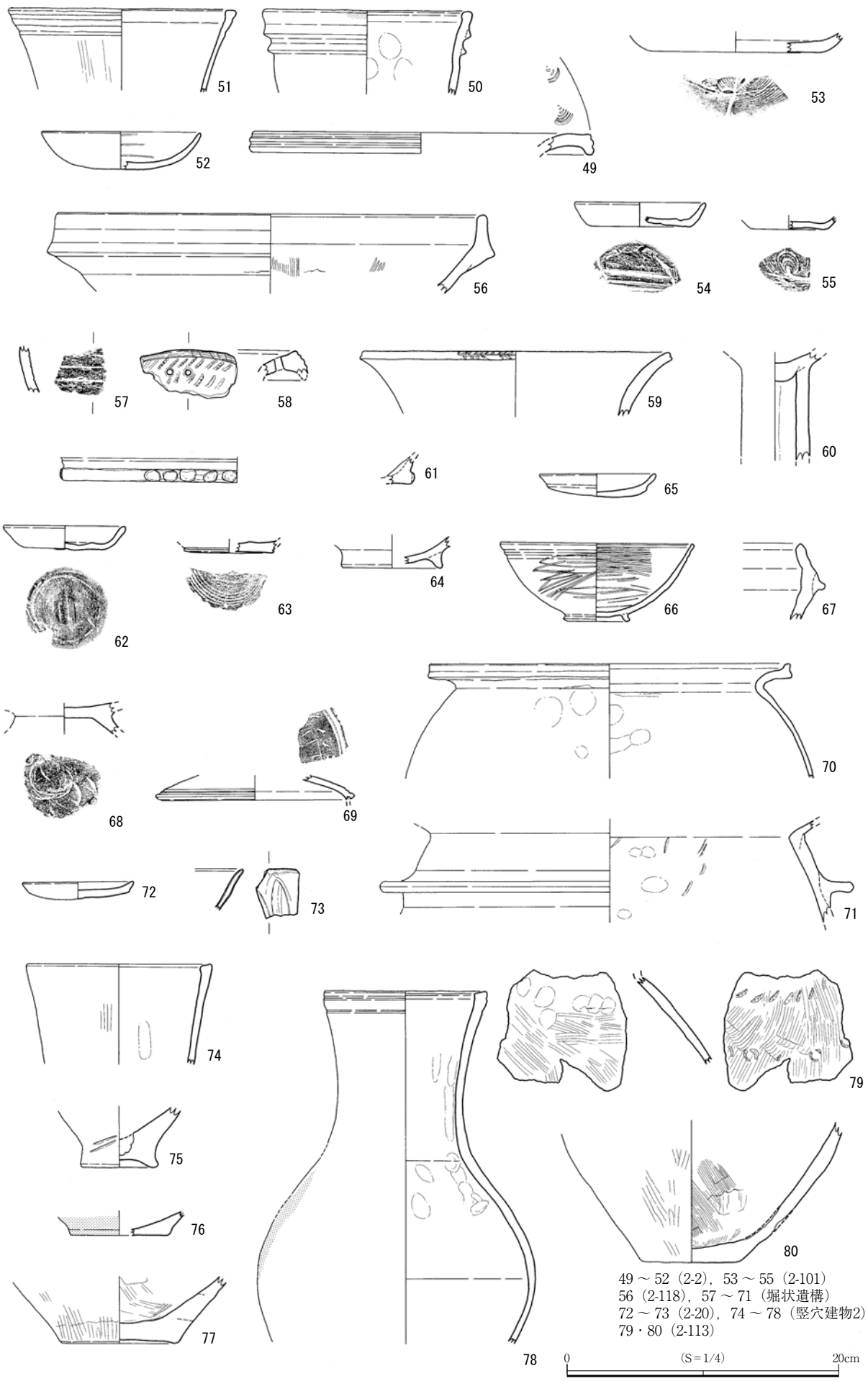
8.0㎝、残存高は42.5㎝となり、体部中央に40.2㎝の最大径をもつものである。外面は斜め方向と縦方向のヘラミガキが施され、黒斑が見られる。胎土はともにやや粗く、片岩粒を多く含む。弥生時代中期と考えられる。

2区の遺物

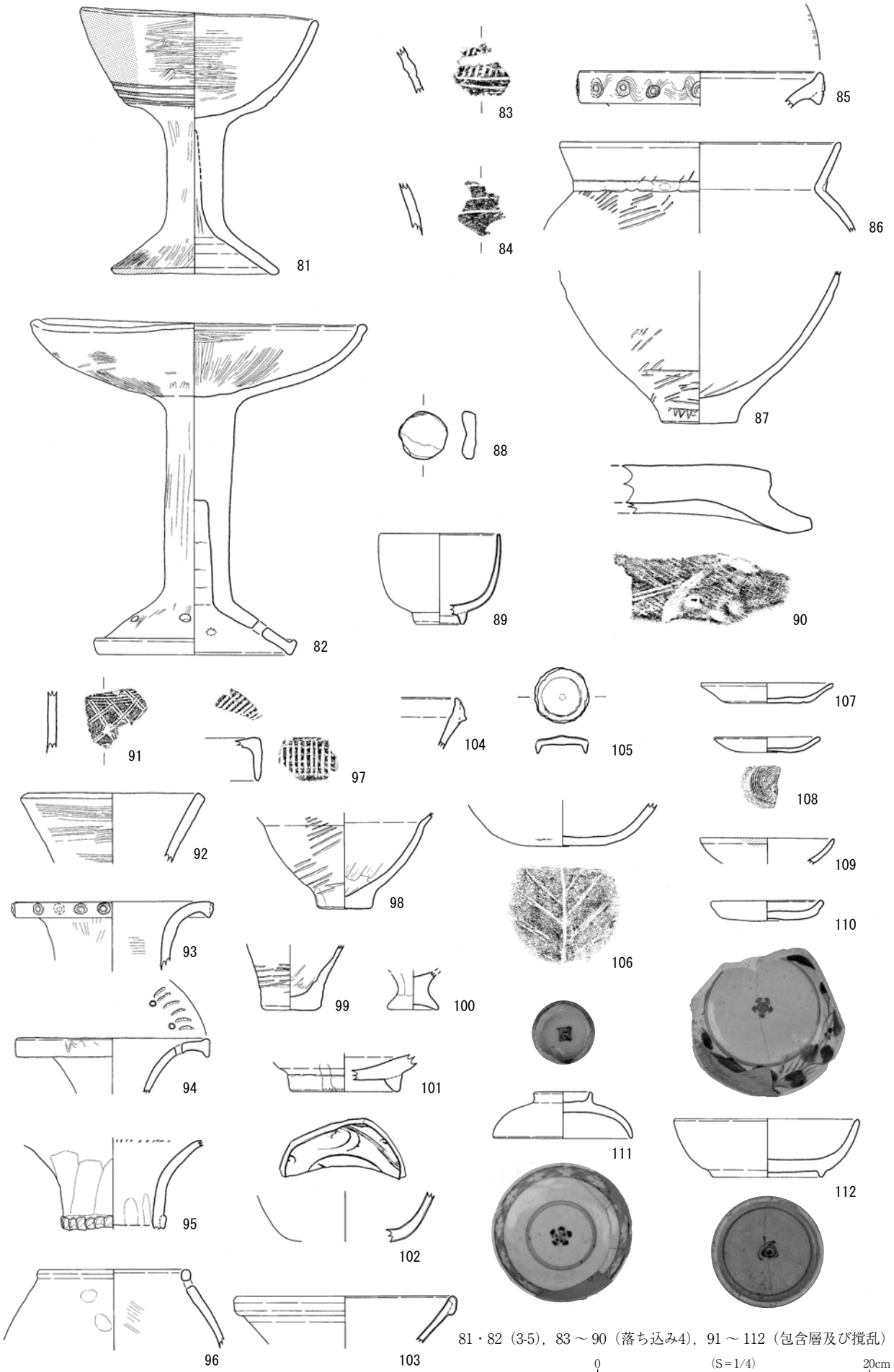
49 ～ 52は土坑2-2から出土した遺物である。49 ～ 52は弥生土器である。49は広口壺で口縁内面には櫛描扇形文が施される。50･51は長頸壺の口縁部である。50は端部にススが付着している。ともに、弥生時代中期中葉のものと考えられる。52は土師器皿で、口径は11.6㎝に復原でき、内面はヘラミガキが施される。14世紀中頃と推測される。54･55は土坑2-101から出土した遺物である。54・55は土師器小皿で回転糸切痕がみられる。また54は回転糸切後に板状工具を使って調整し、55は右回転の回転糸切痕が残る。56は土坑2-118から出土した備前焼擂鉢で灰赤色のものである。すり目は８本単位で形状から14世紀前半～ 15世紀末に見られる。57 ～ 71は堀状遺構2-1から出土した遺物である。58 ～ 61は弥生土器である。57は弥生時代前期と考えられ、3条の凹線が見られる。58･59は広口壺の口縁部で､60は生駒西麓産の高杯の脚柱部である。61は扁平した甕の器体に脚台がつく複合土器で、体部に付加する垂下部である。57 ～ 61は弥生時代中期中葉～後葉のものと推測される。62･63は土師器小皿で、64は高台を持つ碗である。65･66は瓦器で、66は碗で高くしっかりした高台が貼り付き、外面･内面にヘラミガキが見られる。12世紀前半と推定される。68･69は須恵器である。68は高台を持つものの底部で内面にはあて具の痕跡が見られる。69は杯蓋でつまみを持つものと思われる。天井部には羽状の線刻が見られる。70･71は土釜で､70は鍔部が退化したもので14世紀半ばと考えられる。72･73は土坑2-20から出土した遺物である。72は土師器小皿で、73は貿易陶磁器の青磁碗である。龍泉窯系のもので外面に縞蓮弁文があり13世紀中頃の所産と推測される。74 ～ 78竪穴建物２から出土した弥生土器である。74は直口壺の口縁部で､75は壺､76･77は甕の底部である。78は竪穴建物の炉と考えられる遺構から出土した直口壺で底部が欠損し、肩部に黒斑が見られる。共に弥生時代中期中葉のものと推測される。79・80は土坑2-113から出土した遺物である。にぶい黄橙色を呈する弥生土器の壺と考えられ、同一固体と考えられる。79は肩部と推測され、半月状の竹管文と櫛描列点文を持ち、ハケ目で調整している。80は底部で、外面はヘラミガキで調整される。また内面には７本程の単位でハケ目が見られる。弥生時代中期と考えられる。

3区の遺物

81･82は土坑3-5から出土した弥生土器の高杯である。81は杯部の下方に３条の凹線文があり、内面・外面はヘラミガキが見られる。82は皿状の杯部に内面は放射線状にヘラミガキがあり、赤色の塗料が見られる。口縁部には横方向のヘラミガキが見られる。脚台部には６箇所に穿孔が配されるものと考えられ、４箇所が残存する。81･82ともに弥生時代中期後葉のものと考えられる。83 ～ 90は落ち込み４より出土した遺物である。83 ～ 85は弥生土器で、83は２条の凹線に扁平な突帯を２条貼り付ける。突帯には刻み目がみられる。83･84は弥生時代前期の壺と考えられる。85



第26図　出土遺物３（２区）



第27図　出土遺物４（３区・包含層）

は垂下する口縁を持つ広口壺で、波状文の後貼り付け浮文に竹管文をつける。また口縁端部には刺突文が見られ弥生中期中葉のものと考えられる。86は土師器の甕で、頸部に帯状の粘土を貼り付ける。体部外面には右上がりのタタキが残る。87は甕又は鉢の底部で、底径は5.2cmである。庄内期と考えられる。89は陶器で三嶋唐津の櫛刷毛目碗である。口径は復原径8.8cmで、器高は6.65cmである。18世紀後半～19世紀初頭のものである。

包含層・撹乱の遺物

91～97は弥生土器であり、91は直線文と斜格子文を施す。98～100は土師器で100は脚を持つ製塩土器の底部である。106は土師器の皿で、底部には葉を用いて成形を行ったと考えられる葉脈の後が残る。107～110は土師器の小皿で、107～109は口縁部にススが付着した灯明皿である。107・108 は全面に透明釉がかかる。回転糸切は左回りで18世紀頃の所産と考えられる。111･112は磁器で､111は肥前系の染付碗の蓋である。内面には四方襷文が口縁部に、見込み部にはコンニャク印判の五弁花がある。外面の銘款は二重方形枠に渦「福」の銘がある。112は肥前系の染付皿で口径は13.4cmに復原できる。内面口縁部には草花文があり、見込み部にはコンニャク印判の五弁花がある。外面には唐草文が見られ、銘款は崩れた渦「福」があり、18世紀後半と考えられる。

第２節　石器

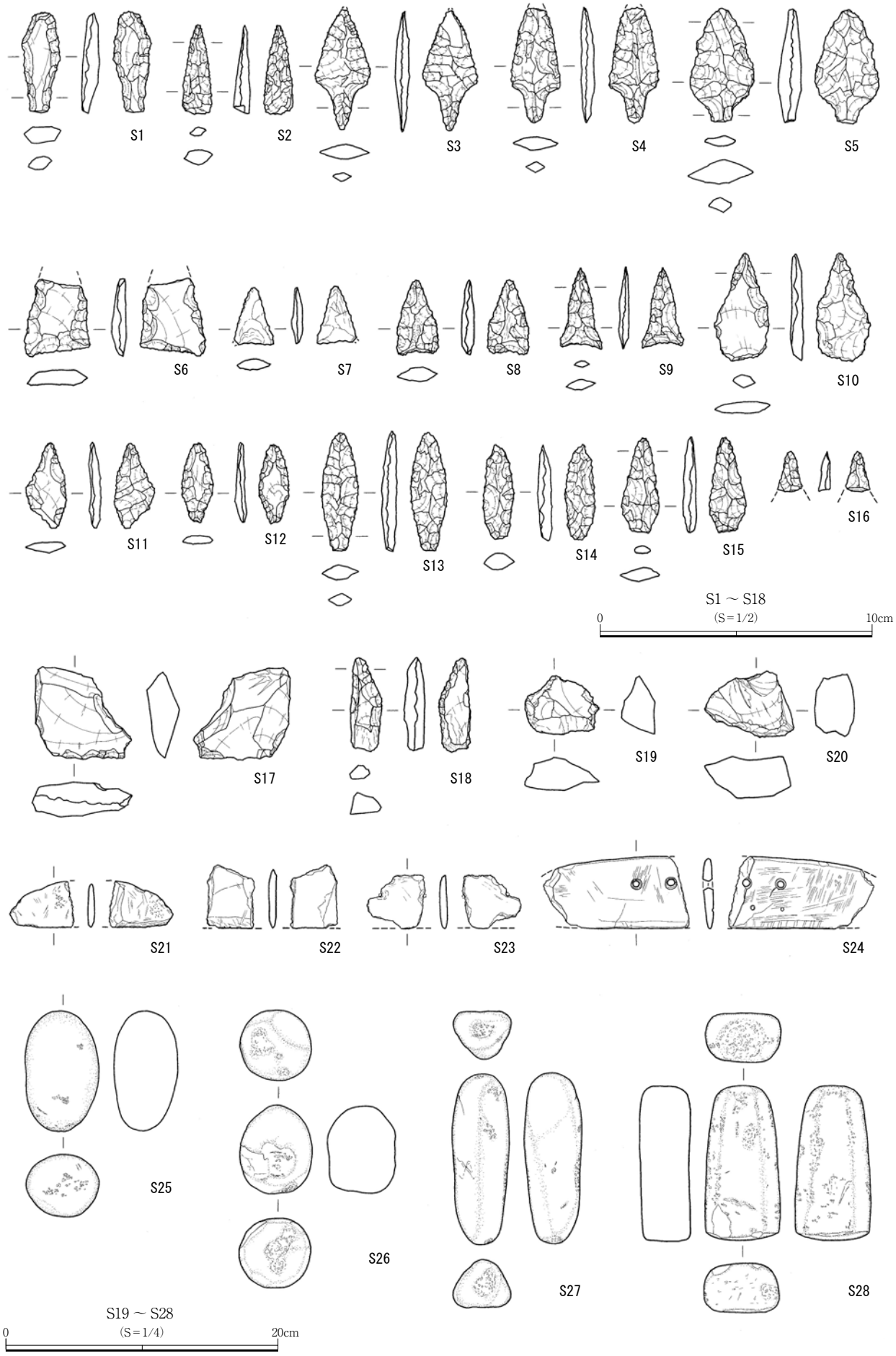
１区・２区の調査で、石器及び金属製品が出土した。遺構出土のものは遺構出土土器とともに報告すべきであるが、今回は遺物全体を概観するためにまとめで記載する。

石器は弥生時代の所産である石包丁や石錐・石鏃が出土し、素材剥片やチップが多く出土している。各形式の細分については、『太田･黒田遺跡（県1次調査)』(2007　(財)和歌山県文化財センター）による。

【石錐】　石錐はS1･S2 の２点出土している。S1は頭部には自然面がのこり錐部は欠損している。またS2 は棒状で丁寧に成形している。

【石鏃】　石鏃は計14点が出土している。石材はすべてサヌカイト製である。完成品は基部の形状から分類し、有茎式・凹基式･凸基式･平基式に大きく分類される。S3～S5の３点は有茎式の石鏃である。幅広の基部（茎）が明瞭に作り出されるもので、有茎式bに分類される。S3 ･S5は中軸に稜線が通る。S5は重量6.72gでやや大型である。S6は平基式で、大形の平基式bに分類される。やや不成形で縁辺に調整がされ自然面が残る。先端から1/3程度が欠損している。S7～S9の３点は通常の大きさの凹基式aに分類される。S7は全体に風化し、S9 は丁寧に成形されており、基部のやや上辺りにくびれを持つ。S10は涙滴形をしている凸基Ⅰ式に分類でき、基部が欠損しており凸基Ⅱ式もしくは石錐の可能性がある。S11～S15 は細身で凸基Ⅱ式bに分類される。S11･S12は自然面が残り、S13～S15は丁寧に成形しており中軸に稜線を持つものもある。またS15は基部が欠損しており、細身の有茎式aの可能性もある。S16は先端部分のみであり石錐の可能性もある。

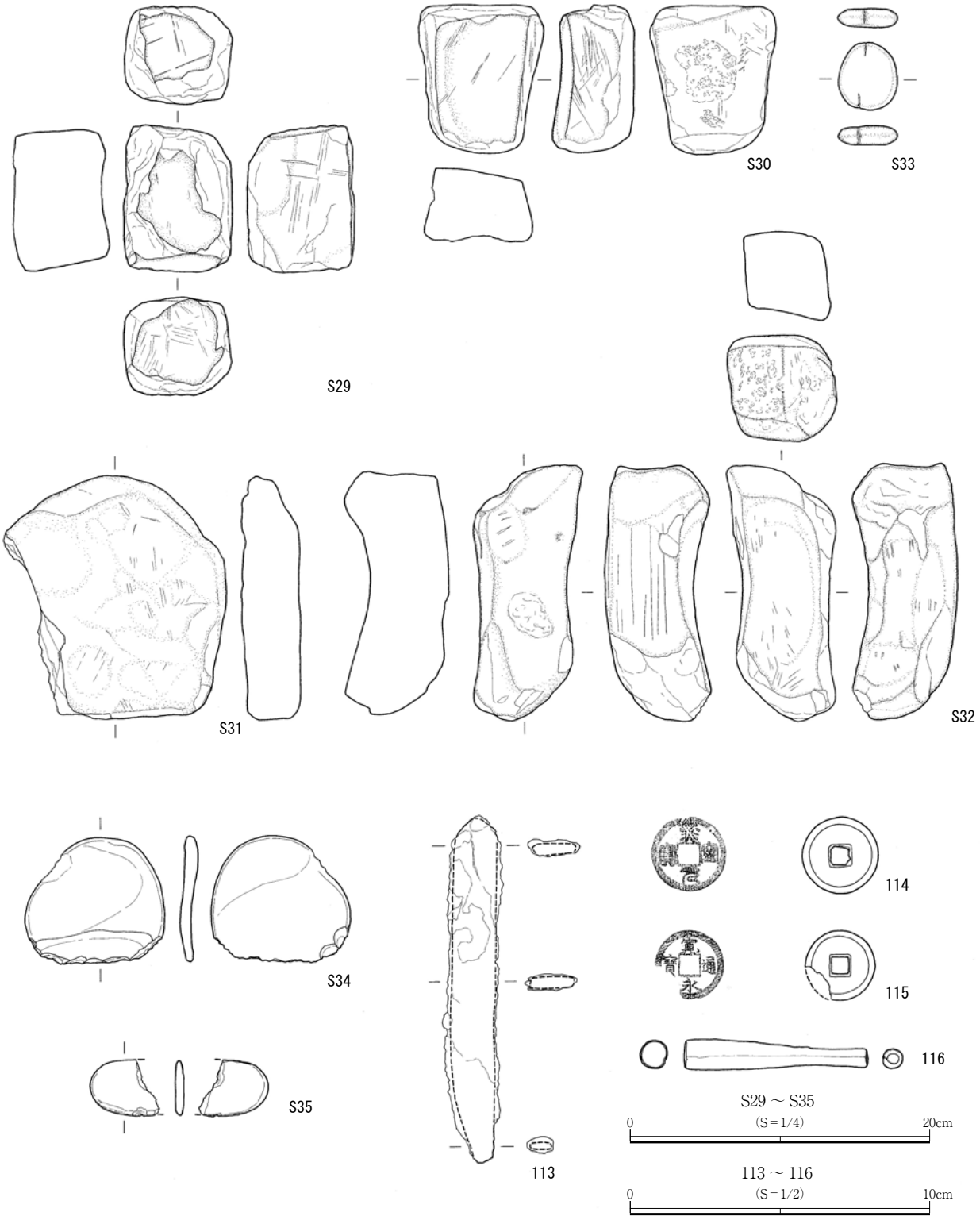
【石包丁】　S21～S24の計4点である。S21･S22は片刃で穿孔が残存しない破片の直線刃半月型で、



第28図　出土遺物５（石器）

S23･S24は2箇所に穿孔（回転穿孔）が残存する。S24はやや大形のもので体部に敲打痕が見られ、製作途中で穿孔の位置を変えたのか穿孔途中孔を２箇所確認した。杏仁形に分類される。

【敲石】 S25 ～ S27の計３点で砂岩製である。端部または縁辺部に敲打痕が明瞭に確認できる。S25･S26 は丸みのある石を使用し、S27は長さ12.5cm、径5.3cmの棒状を呈する。



第29図　出土遺物６（石器・金属製品）

【石杵】 S28は扁平な釣鐘型を呈している。上端面に敲打痕が明瞭に残り、下端面には擦痕と敲打痕が残る。

【砥石】 S29・S30の２点が出土している。S29は目が細かく、にぶい黄橙色で火熱を受けていると推測される。形状は四角柱を呈し、表裏及び側面に平らな面を形成し、表面が磨り減っている。遺構1-1-22からの出土状況から、地沈等の祭祀のために転用されたものと考えられる。S30は灰色を呈し、目は細かい。台形を呈し表面が平滑である。裏面には敲打痕が見られる。

【凹石・台石･石錘】 S31は凹石で、長さ16.1cm幅14.8cmで一部欠損している。厚さは4.0cmで磨面には凹みが多く、擦痕が見られる。S32は台石で、長さ34.0cm、幅14.4cm、厚さ14.1cmのもので砂岩製である。敲打痕、擦痕が見られる。S33は石錘で両端に切り目が見られ、長さ4.5cm、幅4.0cm、厚さは1.3cmの砂岩製である。

【その他】S34･S35は打欠いた加工痕がみられるが、用途は不明である。

第３節　金属製品

金属製品は刀子、煙管、銭貨がある。113は鉄製の刃子で長さ11.4cm、幅1.5cmである、全体に錆が付着している。114･115は銭貨である。114は中国の北宋銭である。1068年(熙寧元年)初鋳の熙寧元寶で、書体は篆書である。115は寛永通宝の古寛永で、左下部分が欠損している。116は銅製の煙管の吸口で、形状から18世紀後半以降の所産である。

第６章　まとめ

今回の六十谷遺跡の発掘調査では、弥生時代から近世までの遺構や旧地形の状況を確認し、集落の展開や土地利用など長期間に亘る生活活動の痕跡を明らかにすることができた。

旧地形の状況は、調査区東側から南西に向い標高を下げる地形を確認した。調査地は扇状地の段丘上端部に位置し、調査地中央の一部は南にやや張り出し、西側では斜面が形成され、やや北側に端部が入る地形を復元することができる。旧地形の落ち込み部分には弥生時代から室町時代の遺物が多く含まれる堆積層を確認した。堆積後の地表面は平坦面を成すことから、旧地形の傾斜を緩和し平地を拡張することを目的として整地されたと考えられ、遺物の包含状況から鎌倉時代～室町時代に行われたと推測される。

検出した遺構は、中世が大半を占めるが、弥生時代中期、古墳時代中期の遺構も確認され、分布する位置は標高10.00m前後の調査区中央から東側に多く位置する。弥生時代では竪穴建物、土坑、土器棺墓がある。古墳時代の遺構では竪穴建物を検出し、古墳時代中期前半の須恵器が出土している。六十谷遺跡の周辺には楠見遺跡など大陸文化に影響された遺跡が多く見られ、調査で検出した竪穴建物からも韓式系土器の甑が出土していることから当遺跡においても、その影響を少なからず受けていたと考えられる。中世に帰属する遺構では堀状遺構がある。文献資料から

六十谷遺跡周辺を本拠地とした湯浅党の一族があげられ、城跡の存在が推測される。主に鎌倉時代から南北朝時代まで活動が認められ、堀状遺構の時期と相違ない。調査区内では対となる堀状の遺構は検出されず、城跡を構成する明確な遺構も検出されていないことから、調査地は城跡の縁辺部にあたり、調査で確認した堀状遺構は西側に配されたものと考えられる。古代に関しては市第１次調査で平安時代からの屋敷地跡が検出されているが、調査区より北東の標高13mの場所に位置しており、今回の調査では確認できていない。

以上の調査成果から、標高10.00m前後の平地部分から調査区北側の標高が高くなる部分において弥生時代中期、古墳時代中期の居住域が形成され、中世にかけて土地を拡張して利用するために旧地形の整地を行ったという、調査地の様相が復原できる。今回の調査地は段丘上端の裾部の遺跡縁辺部の一部を明らかにすることができた。また周辺から採取された遺物より、弥生時代の集落や石器生産遺跡としての遺跡の展開や、古代南海道に伴う遺構などの六十谷遺跡の性格については、今後の調査に期待される。

表１　出土遺物観察表　（土器）

報告書番号	地区	遺構層位	種類器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	胎土	焼成	色調	形態・技法の特徴など	備考	時期
1	1区 C6・j5	1-1-30	土師器 甕	(15.5)	残 3.5	—	口縁部 10%	普通　雲母・2㎜以下の白石含む	良好	（内・外・断）橙色（7.5YR6/6）	小型甕・口縁部はくの字に屈曲・口縁端部は内側に短く摘み上げヨコナデを施す・体部内面左上がりのヘラケズリ	反転復元	庄内
2	1区 C6・j5	1-1-30	土師器 甕	(10.7)	残 1.5	—	口縁部 15%	普通　外面２㎜以下の白石含む	良好	（内）橙色（7.5YR7/6）（外）にぶい黄橙色（10YR7/4）（断）にぶい黄橙色（10YR7/3）	小型甕・口縁端部は内上方に僅かに摘み上げ稜状を成しヨコナデを施す	反転復元	庄内
3	1区 B6・x9	柱列 (1-2-18)	土師器 小皿	(10.0)	1.5	(6.0)	45%	普通	良好	（内・外・断）橙色（7.5YR7/6～7.5YR6/6）	ロクロ成形・口縁端部はヨコナデを施しやや外反し丸く収まる	反転復元	12C 中頃～13C
4	1区 B6・x9	柱列 (1-2-18)	土師器 小皿	(9.0)	1.4	(5.6)	25%	普通	良好	（内・外・断）にぶい黄橙色（10YR7/4）	ロクロ成形・口縁端部はヨコナデを施しやや外反し丸く収まる・回転糸切り	反転復元	12C 中頃～13C 中頃
5	1区 B6・y9	1-2-22	土師器 羽釜	(24.6)	残 8.2	—	口縁部 40%	普通　１㎜以下の粒含む	良好	（内）にぶい橙色（7.5YR6/4）（外）橙色（2.5YR6/6）～にぶい橙色（10YR6/4）（断）黄灰色（2.5Y5/1～2.5Y4/1）	頸部はくの字に内湾・口縁端部はやや面を持ち内側に摘み上げる・鍔は退化し薄く貼り付ける	反転復元	14C 後半
6	1区 B6・y9	1-2-22	瓦器 碗	(11.8)	3.5	(6.6)	25%	普通	良好	（内）灰白色（2.5Y7/1）（外）黄灰色（2.5Y6/1）（断）灰黄色（2/5Y7/2）	内湾する体部で口縁はヨコナデによりやや外反し丸く納める・体部内面に渦巻状のヘラミガキ・高台は見られない	反転復元	14C 初頭
7	1区 B6・y9	1-2-22	土師器 小皿	—	残 1.0	(6.6)	底部 20%	普通	良好	（内）橙色（7.5YR7/6）（外・断）にぶい黄橙色（10YR7/4）	ロクロ成形か？	反転復元	14C
8	1区 C6・c7/d7	1-2-30	土師器 甕	(28.8)	残 2.8	—	口縁部 10%以下	普通　１㎜以下の長石，石英粒含む	良好	（内）灰褐色（7.5YR5/2）（外）黒色（7.5YR2/1）（断）にぶい褐色（7.5YR6/3）	口縁部は外湾する・端部は直下の凸線とともにやや外傾する凹面をなす	反転復元	13C
9	1区 C6・c7	1-2-31	土師器 羽釜	—	残 3.6	—	口縁部 10%以下	やや粗　１㎜大長石，石英粒含む	良好	（内）にぶい赤褐色（5YR4/3）（外）灰褐色（5YR4/2）（断）にぶい褐色（7.5YR5/4）	口縁端部はやや面を持ち内側に摘み上げる	—	12C 前半～中頃
10	1区 C6・c8	1-2-41	土師器 小皿	8.0	1.4	—	100%	普通　１㎜大の赤色斑粒含む	やや軟	（内）にぶい橙色（7.5YR7/4）～明褐灰色（10YR7/2）（外）浅黄橙色（10YR8/3）～にぶい橙色（5YR7/4）	手づくねで成形・口縁端部は外上方に伸び丸く納まる・見込み部に平行線状の暗文を施す	—	13C 前半
11	1区 C6・d7	1-2-50	瓦器 碗	(13.4)	3.7	(4.0)	20%	密５～８㎜の砂岩微量含む	良	（内）灰色（N6/）（外）灰色（N4/）（断）灰白色（N8/）	内湾する体部・口縁部はヨコナデによりやや外反する・端部は丸く納まる・紐状の高台が貼り付く	反転復元	13C 後半
12	1区 C6・d7	1-2-50	瓦器 小皿	(8.2)	1.5	—	60%	密	やや軟	（内・外）灰白色（5Y7/1）～灰色（5Y6/1）（断）灰白色（N8/）	切り込み円板技法による成形・口縁部は強いヨコナデによりやや外上方に伸びる・口縁端部は丸く納める	反転復元	13C 後半
13	1区 C6・d7	1-2-50	瓦器 小皿	(7.4)	1.9	—	25%	密	良	（内・外・断）褐灰色（5YR6/1）	口縁部は強いヨコナデによりやや外上方に伸びる・口縁端部は丸く納める・底部粗いケズリの後ナデ	反転復元	13C 後半
14	1区 C6・d7	1-2-50	土師器 小皿（灯明皿?）	(8.4)	1.8	—	60%	普通 赤色斑粒含む	良好	（内）橙色（5YR6/6）～灰褐色（5YR4/2）（外）橙色（5YR6/6）～にぶい黄橙色（10YR6/4）（断）にぶい橙色（7.5YR7/4）	粘土紐巻上げによる成形・口縁端部は強いヨコナデを施し外反し丸く納める	反転復元	13C 後半
15	1区 C6・c8	1-2-51	弥生土器 小型鉢	—	残 3.7	3.6	底部 100%	普通　長石，石英微粒含む	やや軟	（内）赤褐色（2.5YR4/6）（外）橙色（5YR6/6）（断）にぶい黄褐色（10YR7/2）	外面にタタキを施す・底部には内面から外面に焼成前に孔を施す・底端部はヨコナデをしやや突出する	部分反転復元	弥生時代後期
16	1区 C6・c7	1-2-51	灰釉陶器 皿	—	残 3.3	—	—	緻密	良好	（内・外）オリーブ黄色（5Y6/3）（断）灰白色（5Y7/2）	内面・外面に施釉される口縁端部は薄くなる	—	10C 後半～11C 前半
17	1区 C6・c6,7	1-2-51	瓦器 碗	(14.2)	残 3.7	—	25%	密　１㎜大のチャート，長石粒，石英含む	軟	（内）暗灰色（N3/）（外）灰色（N4/）（断）黄灰色（2.5Y6/1）	体部は内湾・口縁部は強いヨコナデにより外上方に丸く納まる・外面はユビオサエによる調整	反転復元	12C 末～13C 初頭
18	1区 C6・c7	1-2-51	瓦器 碗	(15.0)	残 3.8	—	口縁部 20%	緻密	良好	（内・外）灰白色（2.5Y7/1）～灰色（N5/）（断）灰白色（5Y7/1）	内湾する体部・口縁部はヨコナデによりやや外反し凹線状になる・端部は丸く納まる	反転復元	13C 前半
19	1区 C6・c7	1-2-51	土師器 皿	(13.6)	2.8	—	50%	普通 赤色斑粒含む	やや軟	（内）橙色（7.5YR7/6）（外）橙（5YR7/6）～にぶい橙色（7.5YR7/3）	口縁は直立気味・口縁端部は強いヨコナデによりやや外反気味となる・底部は荒いユビオサエによる調整で平坦面は不整形である	反転復元	13C
20	1区 C6・b7	1-2-52	弥生土器 面子	4.4	4.3	1.0	—	やや粗　２㎜大の長石・チャート・石英粒含む	軟	（内）にぶい黄橙色（10YR7/2）（外）橙（7.5YR6/6）	二次加工	—	—
21	1区 C6・b8	落ち込み 1	弥生土器 壺	—	残 2.7	—	5% 以下	やや粗　１㎜大チャート，長石粒やや多く含む	やや軟	（内）にぶい黄褐色（10YR5/3）～明赤褐色（5YR5/6）（外・断）にぶい黄褐色（10YR6/3）	3条の凹線が施される	—	弥生時代前期
22	1区 C6・d8	落ち込み 2	弥生土器 広口壺?	—	残 3.5	—	10% 以下	普通　１㎜大のチャート，長石粒，雲母粒含む	やや軟	（内）橙色（5YR6/6）（外）明赤褐色（2.5YR5/6）	内面は横方向のヘラミガキ・外面は縦方向のヘラミガキ・口縁端面に竹管文を施す	—	弥生時代中期
23	1区 C6・b8	落ち込み 3	土製品 管状土錘	4.8	1.5	重量 8.04g	100%	普通	良好	（内・外）浅黄橙色（10YR8/3）（断）浅黄橙色（10YR8/3）		—	弥生時代
24	1区 C6・b8	落ち込み 4	瓦器 碗	13.4	3.6	—	—	密	やや軟	（内）灰白色～暗灰（N7/～N3/）（外）灰白色（7.5Y8/1）	口縁部は強いヨコナデによりやや外反し凹線状になる・端部は丸く納まる・体部はユビオサエによる調整	反転復元	13C 後半
25	1区 C6・c8	落ち込み 5	弥生土器 甕	—	残 2.6	4.2	—	普通 赤色斑粒含む	良好	（内）橙色（7.5YR6/6）（外）橙色（5YR6/6）（断）灰色（5Y4/1）	内面は放射状にハケメを施す・外面はタタキを施し底部はユビオサエにより整形する	—	弥生時代後期～庄内
26	1区 B6・x8	1-2-9	須恵器 無蓋高杯	(15.0)	残 6.1	—	杯部 20%	密 白色粒含む	良好	（内）灰色（N4/）（外）灰色（N5/）（断）灰褐色（7.5YR5/2）	口縁部は内湾後外方に伸び端部は丸く納める・口縁屈曲部に稜を持つ・杯部下方に波状文，沈線，ヘラケズリ	反転復元	古墳時代中期（5C）
27	1区 B6・v8/w8	竪穴建物 1	須恵器 無蓋高杯	(13.8)	12.0	(8.0)	口縁部 25% 脚部 25%	密　内面白色粒含，脚部外面２㎜以下長石少量含む	良好	（内・外・断）灰色（N6/～N5/）	口縁部は内湾後外方に伸びる・端部は丸く納まり稜を持つ・杯部中位に波状文，沈線を施し下位はヘラケズリを行う・脚部は三方に方形の透孔をもつ・脚部は外反し端部で内湾気味に曲げられる	反転復元	古墳時代中期（5C）
28	1区 B6・w9	竪穴建物 1	須恵器 坏蓋	(13.0)	残 3.5	—	口縁部 15%	密 白色粒含む	良好	（内・外）灰色（N5/）（断）褐灰色（7.5YR5/1）	口縁部はやや外湾気味で稜は短く鋭い・端部は内傾し段をなす	反転復元	古墳時代中期（5C）
29	1区 B6・ｘ8	竪穴建物 1	須恵器 坏蓋	(11.4)	残 4.0	—	口縁部 20%	密 3㎜白石含む	良好	（内・外）灰色（N6/）（断）褐灰色（7.5YR5/1）	天上部は丸く左回転のヘラケズリを施す・口縁部は外湾気味で稜は短く鋭い・端部は内傾する	反転復元	古墳時代中期（5C）
30	1区 B6・w9	竪穴建物 1	須恵器 坏蓋	(11.4)	5.2	—	30%	密 2～4㎜の石含む	良好	（内・断）灰白色（5Y7/1）（外）灰色（N6/）	天上部は丸く左回転のヘラケズリを施す・口縁部は内湾気味で稜はやや鈍い・端部は内傾し平たく段をなす	反転復元	古墳時代中期（5C）
31	1区 B6・w8	竪穴建物 1	土師器 甕	13.6	残 8.2	—	口縁部 30%	普通　2～3㎜の石多く含む，内面に直径1cmの石含む	良好	（内）にぶい黄橙色（10YR6/4）（外）明褐色（2/5YR5/6）（断）褐灰色（10YR4/1）	頸部はやや緩やかに屈曲し肥厚する・口縁端部は外反し丸く終わる	部分反転復元	古墳時代中期（5C）
32	1区 C6・e10	竪穴建物 1	土師器 羽釜	(24.0)	残 6.9	—	口縁部 20%	普通　3㎜以下の石を多く含む	良好	（内・断）にぶい黄灰色（10YR7/4～10YR6/4）（外）橙色（5YR6/6）	鍔は約0.8cm・頸部はくの字に屈曲・口縁端部は面を持ち内湾気味に終わる	反転復元	13C 中頃
33	1区 C6・f10	竪穴建物 1	土師器 羽釜	(26.2)	残 8.5	—	口縁部 15%	普通　雲母付着，片石，白色粒含む	良好	（内）にぶい橙色（7.5YR7/4～7.5YR6/4）（外）灰褐色（7.5YR6/2～7.5YR5/2）（断）黄灰色（2.5YR7/2）	鍔は約0.8cm・頸部はくの字に屈曲・口縁端部は内湾気味で内上方に短く摘み上げる	反転復元	13C 中頃
34	1区 C6・e10	竪穴建物 1	土師器 羽釜	(28.0)	残 8.3	—	口縁部 20%	普通　1㎜大チャート，長石，片岩粒，赤色斑粒含む	良	（内にぶい橙色（7.5YR7/4）（外）橙色（7.5YR7/6）（断）浅黄橙色（7.5YR8/6）	頸部はくの字に内湾・口縁端部は肥厚しやや面を持ち内上方に摘み上げる	反転復元	13C 前半
35	1区 C6・f10	竪穴建物 1	瓦器 碗	14.9	4.7	5.0	95%	密	良好	（内）灰白色（N8/～N7/）（外）灰色（N6/）（断）灰白色（N7/）	内湾する体部で口縁はヨコナデによりやや外反し丸く納める・体部内面に渦巻状のヘラミガキ・高台は紐状に張り付く	—	13C 前半
36	1区 C6・f10	竪穴建物 1	瓦器 碗	14.4	4.1	(5.2)	80%	密　マーブル状の胎土，赤色斑粒混じる	軟	（内）浅黄色（2.5Y7/3）～灰色（N5/）（外）灰黄色（2.5Y7/2）～灰白色（5Y7/2）（断）灰白色（5Y7/1）～浅黄色（2.5Y7/3）	内湾する体部で口縁はヨコナデによりやや外反し丸く納める・体部内面に渦巻状のヘラミガキ・高台は紐状に張り付く	—	13C 前半
37	1区 C6・e10/f10	竪穴建物 1	瓦器 碗	14.2	4.6	5.9	70%	密	やや不良	（内）灰色（N5/～N4/），灰白色（5Y8/1）（外）灰色（N4/），灰白色（5Y8/1）	内湾する体部で口縁はヨコナデによりやや外反し丸く納める・体部内面に渦巻状のヘラミガキ・断面逆三角形の高台が張り付く	—	13C 前半
38	1区 C6・e10/f10	竪穴建物 1	瓦器 小皿	8.8	1.8	7.0	85%	密	良好	（内）灰色（N6/～N5/）（外）灰色（5Y8/1），灰色（N6/～N5/）（断）灰色（5Y8/1）	口縁端部はヨコナデを施し丸く納める・底部・見込部はナデを施す	—	13C
39	1区 C6・e10/f10	竪穴建物 1	瓦器 小皿	8.8	1.7	7.5	80%	密	良好	（内・外・断）灰白色（2.57/1）	口縁端部はヨコナデを施し丸く納める・見込部はナデを施す・底部はナデ？	—	13C
40	1区 C6・f10	竪穴建物 1	土師器 小皿	8.0	1.2	—	100%	普通	良好	（内・外・断）橙色（5YR7/6）	口縁端部は厚く、外上方に少し伸びヨコナデを施す・底部は板状工具によるナデ？	—	13C
41	1区 C6・e10/f10	竪穴建物 1	土師器 小皿	7.8	1.4	7.0	70%	普通	良好	（内）橙色（2.5YR6/8）（外）橙色（2.5YR6/8），明黄橙色（10YR7/6）	口縁端部ヨコナデを施しやや上方に伸び丸く納める・見込み部はナデを施す	—	13C
42	1区 C6・f10	竪穴建物 1	土師器 皿	(11.8)	3.3	(8.4)	20%	普通　赤色粒，長石少量含む	良好	（内・外）橙色（5YR7/6）（断）浅黄橙色（10YR8/3）	底部から体部やや肥厚・口縁は内湾しながら外上方に伸びナデを施す・口縁端部は丸く納める	反転復元	13C 中頃
43	1区 C6・f10	竪穴建物 1	土師器 皿	13.6	3.0	7.2	100%	普通　外面５㎜の長石含む	良好	（内・外・断）橙色（5YR7/6）	口縁端部ヨコナデを施しやや上方に伸び丸く納める・外面体部はユビオサエ　やや厚い	—	13C 後半
44	1区 C6・f10	竪穴建物 1	土師器 皿	13.4	2.8	(5.2)	50%	普通　1㎜大石英，長石粒，赤色斑粒含む	やや軟	（内）明赤褐色（2.5YR5/6）（外・断）明赤褐色（2.5YR5/8）	口縁端部は強いヨコナデにより外反する・内面，外面体部から底部にかけてユビオサエ・底部は粗いナデを施す	—	13C 中頃～後半
45	1区 C6・e10/f10	竪穴建物 1	土師器 皿	12.6	3.2	—	85%	普通	良好	（内・外・断）浅黄橙色（10YR8/3）	口縁端部はヨコナデで丸く納める・底部はユビオサエ	—	13C 中頃～後半
46	1区 C6・f10	竪穴建物 1	土師器 皿	13.2	2.7	—	75%	普通	良好	（内・外・断）にぶい黄橙色（10YR7/4）	口縁端部は肥厚しヨコナデを施し丸く納める・体部はユビオサエを施し底部は未調整	—	13C
47	1区 B6・w10	1-2-2	弥生土器 甕	—	残 15.5	—	40%	やや粗　２㎜大の石英・片岩粒含む	やや軟	（内）にぶい黄橙色（10YR7/2）（外・断）浅黄橙色（10YR8/2）	体部中央に最大径を持つ・斜め方向のヘラミガキ・頸部内面は放射状に指頭圧痕あり・黒斑あり	反転復元	弥生時代中期
48	1区 B6・x10	1-2-2	弥生土器 甕	—	残 42.5	8.0	80%	やや粗 片岩粒多く含む	やや軟	（内）黒褐色（7.5YR3/2）（外）にぶい橙色（7.5YR6/4）（断）黒褐色（10YR3/2）	外面縦方向のヘラミガキ	部分反転復元	弥生時代中期

報告書番号	地区	遺構層位	種類器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	胎土	焼成	色調	形態・技法の特徴など	備考	時期
49	2区 B6·m10	2-2	弥生土器 広口壺	(24.6)	残 1.5	—	5% 以下	やや粗 結晶片岩を多く含む	やや不良	(内)橙色(5YR6/6)(外)橙色(2.5YR6/6)(断)灰白色(5Y8/1)	口縁部は稜を持って斜め下方に折れ曲がる・内面に櫛描扇形文を施し、口縁端面に2条の凹線文を施す	反転復元	弥生時代中期
50	2区 B6·m10	2-2	弥生土器 壺	(15.6)	残 6.1	—	口縁部 15%	普通 2mm位の石多量に含む	やや不良	(内)灰色(5Y6/1),明赤褐色(5YR5/6)(外)橙色(7.5YR7/6),にぶい橙色(2.5YR6/4)(断)淡橙色(5YR8/3),灰(N6/)	口縁部上部に断面三角形の貼付突帯を2条施す・端部内側にのみ肥厚しヨコナデ施す	反転復元	弥生時代中期
51	2区 B6·Ⅰ11	2-2	弥生土器 直口壺	(16.6)	残 6.0	—	口縁部 40%	普通4mm位の片岩少量含む	良好	(内・外)にぶい黄橙色(10YR7/4)(断)灰色(N4/)	口縁部内側に肥厚する・口縁部は2条の凹線文を施す・縦方向に磨耗したハケ目	反転復元	弥生時代中期
52	2区 B6·Ⅰ11	2-2	土師器 皿	(11.6)	2.8	—	30%	普通	良好	(内・外・断)浅黄橙色(10YR8/3)	内面ナデ・口縁部はヨコナデを施し丸く納まる・内面ヘラミガキあり・やや厚手	反転復元	14C中頃
53	2区 B6·g10,11/h10,11	2-101 最下層	土師器 皿	—	残 1.45	(12.2)	5% 以下	普通 1mm以下の黒色粒・赤色粒を多量に含む	不良	(内・外・断)橙色(7/5YR7/6)	回転糸切痕	反転復元	中世
54	2区 B6·g10,11/h10,11	2-101 最下層	土師器 小皿	(9.4)	1.8	(7.5)	30%	普通	良好	(内)にぶい黄橙色(10YR7/4)(外)浅黄橙色(10YR8/4)(断)灰色(N5/)	糸切後板状圧痕を施す・口縁部は外上方にのび強いヨコナデにより丸く納まる	反転復元	16C?
55	2区 B6·g10,11/h10,11	2-101 最下層	土師器 小皿	—	残 0.9	(5.6)	底部 25%	普通 赤色酸化粒付着	良好	(内・外)にぶい黄橙色(10YR7/4)(断)灰色(N5/)	回転糸切(右回転)・底部内部ナデにより調整	反転復元	中世
56	2区 B6·h12,13/i12,13	2-118	備前焼 擂鉢	(31.2)	残 5.7	—	口縁部 10%以下	緻密	良好	(内)にぶい赤褐色(5YR5/3)(外)灰赤色(2.5YR5/2)(断)灰色(5/)	すり目は8本単位・口縁部上下に太くのびる	反転復元	14C前半～15C末
57	2区 B6·i10	2-1 下層	弥生土器 壺	—	—	—	10% 以下	普通2mm以下の小礫を含む	良	(内)にぶい橙色(7.5YR6/6)(外)橙色(7.5YR6/6)(断)にぶい黄橙色(10YR6/3)	2条の凹線を施す・肩部か?	—	弥生時代前期
58	2区 B6·h10	2-1 中層	弥生土器 壺	—	残 1.8	—	10% 以下	普通 1mm以下の小礫(黒色粒・白色粒)砂粒を含む	不良	(内)赤橙色(10R6/6)(外)橙色(2.5YR6/8),にぶい黄橙色(10YR7/4),黄灰色(2.5Y4/1)(断)灰色(N4/)	口縁部は外反し下方に肥厚する・口縁内側に紐孔?を3箇所残存し櫛描列点文を施す・口縁端部の面には凹線文後刻み目?	—	弥生時代中期
59	2区 B6·g11/h11/i11	2-1 下層	土師器 一	—	—	—	口縁部 10%以下	普通 3mm以下の小礫(赤色斑粒・白石粒・黒色粒)雲母を含む	良	(内)橙色(5YR6/6),黄橙色(10YR7/3)(外)にぶい橙色(7.5YR7/4)(断)橙色(5YR6/6)	口縁部は外反し面を持つ・面には羽状文が施される	反転復元	弥生時代中期
60	2区 B6·g10/h10	2-1 下層	弥生土器 高坏	—	残 7.9	—	30%	普通 6mm以下の小礫砂粒を多量に含む	良	(内)灰(N4/～N5/)(外)灰(N5/),にぶい黄橙(10YR6/4)(断)灰(N5/),灰黄(2.5Y7/2)	生駒西麓産・柱状の脚部・円盤充填技法か?	部分反転復元	弥生時代中期
61	2区 B6·f10/g10	2-1 中層	弥生土器 複合土器	—	残 1.8	—	10% 以下	普通 4mm以下の小礫を多量に含む	良	(内)灰色(N6/)(外)浅黄橙色(10YR8/3),橙色(5YR6/6)(断)灰色(N6/),浅黄橙色(10YR8/3)	凹線文の後浮文貼り付け	反転復元	弥生時代中期
62	2区 B6·g10,11/h10,11	2-1 下層	土師器 小皿	8.8	1.8	6.0	70%	普通	良好	(内・外・断)浅黄橙色(10YR8/3)	内面・口縁部は強いヨコナデを施し端部は丸く納まる・底部外面が板状圧痕を施す	—	13C前半
63	2区 B6·g10,11/h10,11	2-1 下層	土師器 小皿	—	残 1.0	6.4	底部 40%	普通 1mm以下の砂粒を多量に含む	良好	(内・外)にぶい黄橙色(10YR7/3)(断)灰色(N6/)	底部に糸切痕・内面ヨコナデにより成形	反転復元	13C
64	2区 B6·g10/h10	2-1 下層	土師器 碗	—	残 2.3	(7.2)	底部 30%	普通 1mm以下の砂流・雲母を多量に含む	普通	(内)にぶい黄橙色(10YR7/3),灰(N4/)(外)にぶい橙色(7.5YR7/4),黄灰色(2.5Y5/1),にぶい黄橙(10YR7/3)(断)にぶい黄橙色(10YR7/4),灰色(N4/)	しっかりした貼付高台・高台端部は丸く納める	反転復元	14C初頭
65	2区 B6·i10,11	2-1	瓦器 小皿	8.4	1.8	—	100%	蜜 1mm以下の砂流を多量に含む	不良	(内・外)灰色(N5/),灰白色(5Y7/1)	口縁部は外反するようナデを施し立ち上がり稜が見られる・口縁端部は丸く納まる・切込円盤技法か?	—	13C後半
66	2区 B6·g10	2-1 下層～最下層	瓦器 碗	(14.0)	5.7	4.3	口縁部 20%	密	良好	(内)灰色(N6/)(外)灰色(N5/)(断)灰白色(N8/)	しっかりした貼付高台・やや内湾する体部・口縁部に2条の沈線と端部内面に沈潜を配する・内面外面に暗文あり	部分反転復元	12C前半
67	2区 B6·f10/g10	2-1 中層	備前焼 擂鉢	—	残 5.0	—	10% 以下	4mm以下の小礫を含む	不良	(内)暗赤灰色(5R4/1)(外)暗赤灰色(10R4/1)(断)黄灰色(2.5Y6/1),灰色(N4/)	口縁部内側上方にのび下方はやや下がる	—	14C後期
68	2区 B6·g10/h10	2-1 下層	須恵器 一	—	残 2.3	—	底部 40%	密 2mm以下の白色粒・黒色粒・砂粒を含む	良好	(内・外)青灰色(5B5/1)(断)灰色(5Y5/1)	底部内面?にあて具痕あり	反転復元	古代?
69	2区 B6·i10,11	2-1 下層	須恵器 坏蓋	(13.6)	残 1.8	—	5% 以下	密 1mm以下の白色粒・黒色粒・雲母を少量含む	良好	(内)灰色(N6/)(外)暗青灰色(5B4/1)(断)灰色(N6/)	口縁部のにぶい稜がつく・羽状に櫛描列点文?が施される	反転復元	古墳時代中期(5C)
70	2区 B6·g11/h11/i11	2-1 下層	土師器 羽釜	(25.8)	残 8.4	—	口縁部 15%	普通 3mm以下の小礫を多量に含む	不良	(内)灰色(N4/)(外)にぶい橙色(5YR6/4),褐灰色(10YR4/1)(断)にぶい橙色(7.5YR6/4),灰黄褐色(10YR5/2)	頸部はくの字に屈曲・口縁端部はで上方に短く摘み上げ下方はやや肥厚する・鍔は消滅	反転復元	14C
71	2区 B6·g10/h10	2-1 下層	土師器 羽釜	—	残 7.5	—	10% 以下	普通 4mm以下の小礫を多量に含む	不良	(内・外)にぶい黄橙色(10YR7/3)(断)灰白色(10YR7/1)	頸部はくの字に屈曲・1.5cmの鍔を貼り付ける	反転復元	12C後半
72	2区 B6·i11,12	2-20	土師器 小皿	8.0	1.4	—	60%	普通 赤色酸化粒付着	良好	(内・外)橙色(5YR6/6)(断)にぶい黄橙色(10YR7/4)	厚手で口縁部は短く立ち上がる・口縁端部は外反し丸くヨコナデを施す	部分反転復元	13C後半
73	2区 B6·i10	2-20	青磁 碗	—	残 3.0	—	10% 以下	緻密	良好	(内)オリーブ黄色(5Y6/3)(外)灰オリーブ色(5Y5/2)(断)灰黄色(2.5Y7/2)	龍泉窯系・外面に縞蓮弁文	—	13C中頃
74	2区 B6·p10/q10	竪穴建物2	土師器 直口壺	(13.4)	残 7.3	—	口縁部 20%	普通 白色粒中量含む。断面直径7mmの石含む	良好	(内)橙色(5YR6/8)(外・断)にぶい黄橙色(10YR7/4)	口縁端部は内側に肥厚し面をなす	反転復元	弥生時代中期
75	2区 B6·p10	竪穴建物2	土師器 甕 底部	—	残 4.4	5.7	底部 75%	普通 1mm以下の石少量含む	良好	(内)灰褐色(7.5YR6/2)(外)橙色(2.5YR6/6)(断)橙色(5YR6/8)	体部に右上がりのタタキが施される	部分反転復元	弥生時代後期
76	2区 B6·p9	竪穴建物2	弥生土器 壺	—	残 1.8	7.3	底部 50%	やや軟 1mm位の石少量含む	良好	(内)明黄褐色(10YR7/6～10YR6/6)(外)灰色(N4/),にぶい黄橙色(10YR7/4)(断)黄灰色(2.5Y5/1)	端部はナデにより丸く納まる	—	弥生時代中期
77	2区 B6·p9	竪穴建物2	弥生土器 壺 底部	—	残 4.9	(8.4)	底部 80%	普通 1～2mmの石多く含む	良好	(内)にぶい黄橙色(10YR7/4)(外)橙色(5YR6/8)(断)黄灰色(2.5Y6/1)	内面はハケ目による調整・外面はヘラミガキによる調整	反転復元	弥生時代中期
78	2区 B6·q10	竪穴建物2	弥生土器 直口壺	11.8	残 25.7	—	60%	普通 5mm以下の小礫を含む 黒色粒,赤色粒,白色粒を含む	良好	(内)にぶい黄橙色(10YR7/3)～にぶい橙色(7.5YR7/4)(外)橙色(7.5YR7/6)～灰褐色(7.5YR5/2),暗灰色(N3/)(断)褐灰色(10YR4/1)	口縁端部に面を持つ・口縁部上方に2条の凹線を施す・体部は丸く外面は細かいヘラミガキか?・黒斑あり	部分反転復元	弥生時代中期
79	2区 B6·m10/n10	2-113	弥生土器 壺 肩部	—	残 6.4	—	5% 以下	普通 断面に1mm～6mmの石含む	良好	(内)褐灰色(10YR4/1)(外)灰黄褐色(10YR5/2～4/2)(断)灰黄褐色(10YR5/2)	外面ハケ目が施された後半月状の竹管文・4本の櫛描列点文を施す	—	弥生時代中期
80	2区 B6·m10	2-113	弥生土器 壺	—	残 10.3	7.2	底部ほぼ 100%	普通 長石・石英当含む	良好	(内)褐灰色(10YR4/1)(外)にぶい黄橙色(10YR6/3)(断)黒褐色(10YR3/1)	内面は7本程の単位でハケ目・外面はヘラミガキが施される	部分反転復元	弥生時代中期
81	3区 C6·r7	3-5	弥生土器 高坏	17.2	19.5	11.3	90%	やや軟 2mm以下の石少量含む	良好	(内・外・断)橙色(5YR6/8)	口縁部は外反し立ち上がり口縁端部は丸く納まる・杯部下方に3条の凹線を配する・脚端部丸く納まる・黒斑あり	—	弥生時代中期
82	3区 C6·r7	3-5	土師器 高坏	24.0	24.6	14.0	底部 65% 杯部 80%	普通 2mm位の石多量に含む	良好	(内・外)浅黄橙色(10YR8/3)	浅い皿状の杯部で口縁端部は丸く納まる・脚端部は上下に肥厚する・脚部に4箇所の穿孔が残存する	—	弥生時代中期
83	3区 C6·w6,7	土器集中	弥生土器 壺?	—	残 3.4	—	10% 以下	普通 2mm以下の小礫を含む	不良	(内)褐灰色(10YR4/1)(外)黄灰色(2.5Y5/1),にぶい黄橙色(10YR7/4)(断)黒褐色(2.5Y3/1)	2条の凹線・扁平な突帯を2条配し幅の広い凹線文を配し刻み目持つ	—	弥生時代前期
84	3区 C6·v7	土器集中	弥生土器 壺?	—	残 3.8	—	10% 以下	普通 3mm以下の小礫を含む	普通	(内・断)橙色(7.5YR6/6)(外)灰黄褐色(10YR5/2),橙色(7.5YR6/6)	3条の凹線文を施す	—	弥生時代前期
85	3区 C6·w6,7	土器集中	土師器 一	17.4	残 2.6	—	10% 以下	普通 1mm以下の砂粒・黒色石・赤色石を含む	不良	(内)浅黄橙色(7.5YR8/4),橙色(7.5YR7/6)(外)にぶい橙色(7.5YR7/4)(断)橙色(7.5YR6/6)	口縁端部は上下に肥厚しやや垂下する・口縁部の面には貼り付け浮文に竹管文を施す	反転復元	弥生時代中期
86	3区 C6·w6,7	落ち込み4	土師器 甕	(20.4)	残 6.65	—	20%	普通 7mm以下の小礫を含む	やや軟	(内)橙色(7.5YR7/6)(外)にぶい橙色(5YR7/6)(断)浅黄橙色(7.5YR8/6)	頸部はくの字形に屈曲し帯状に粘土を貼り付ける・体部はタタキを施す	反転復元	庄内～布留
87	3区 C6·w6,7	落ち込み4	弥生土器 甕	—	残 11.2	5.2	底部 100%	普通 4mm以下の小礫(赤色石・黒色石)・砂粒を含む	不良	(内)橙色(7.5YR7/6),にぶい黄橙(10YR7/4),黄灰(2.5Y4/1)(外)橙色(5YR6/6),にぶい黄橙色(10YR7/4)(断)浅黄橙色(7.5YR8/6),黄灰色(2.5Y4/1)	外面タタキを施す・内面ヘラケズリ・ナデを施す	部分反転復元	弥生時代後期
88	3区 C6·w6,7	落ち込み4	土師器 泥面子	—	幅 3.6	厚さ 0.1	100%	普通 1mm以下の赤色粒を多く含む	普通	(内)にぶい橙色(10YR7/4)(外)にぶい橙色(7.5YR7/6)(断)灰白色(2.5Y7/1)	2次加工	—	—
89	3区 C6·v7	落ち込み4	陶器 碗	(8.8)	6.65	(3.5)	40%	密	良好	(内)浅黄色(2.5Y7/3),灰褐色(7.5YR5/2)(外)褐灰色(7.5YR6/1),灰褐色(7.5YR5/2),浅黄色(2.5Y7/3)(断)にぶい赤褐色(5YR5/4)	貼付高台・刷毛目唐津	反転復元	18C後半～19C初頭
90	3区 C6·X6	落ち込み4	瓦器 丸瓦	—	4.85	—	—	蜜 4mm以下の小礫・砂粒を多く含む	普通	(内)灰色(5Y5/1),灰色(N5/)(外)灰色(N6/),灰黄色(2.5Y7/2),黄灰色(2.5Y7/1)(断)にぶい黄橙色(10YR7/3),灰黄褐色(10YR4/2)	凹面布目痕あり・側面面取りを施す	—	近世
91	1区 B6·s9	側溝	弥生土器 壺 体部	—	残 5.0	—	5% 以下	普通 1mm以下の石少量含む	良好	(内)橙色(5YR6/6)(外)にぶい橙色(7.5YR6/4)(断)灰褐色(7.5YR5/2)	ハケ目を施す・横方向の直線文後2条の斜格子文を施す	—	弥生時代中期
92	1区	機械	弥生土器 壺 口縁部	(12.2)	残 5.0	—	15%	普通 3mm以下の長石含む	良好	(内・外)橙色(7.5YR7/6)(断)橙色(5YR6/6)	上端は面をなすもの・口縁部に等間隔の櫛描直線文帯が施される	反転復元	弥生時代中期
93	1区 C6·d8	包含層3層	弥生土器 壺	(14.2)	残 5.0	—	口縁部 25%	普通	良	(内・外)にぶい黄橙色(10YR7/4),橙色(2.5YR6/6)(断)にぶい黄橙色(10YR7/4)	短く垂下する口縁部をもちヘラによる横方向のナデ・口縁の面には竹管文を施す	反転復元	弥生時代中期

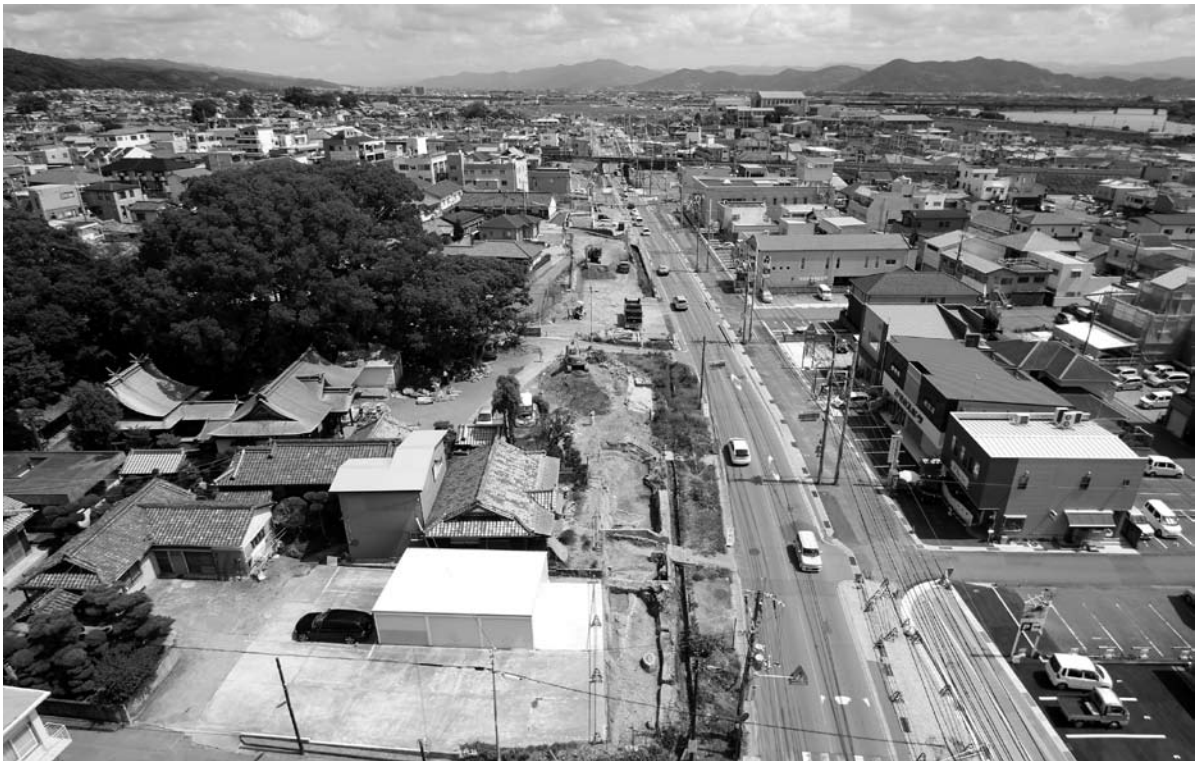
報告書番号	地区	遺構層位	種類器種	法量(cm) 口径	器高	底径	残存率	胎土	焼成	色調	形態・技法の特徴など	備考	時期
94	2区 B6･k11	包含層3層	弥生土器壺	(14.0)	残4.0	—	口縁部10%以下	やや軟 1～2㎜の石中量含む	良好	(内)橙色(7.5YR6/6)(外)明黄褐色(10YR6/6)(断)灰色(N6/)	紐孔2つ有・刺突文を施す・口縁端部に波状文を施す	反転復元	弥生時代中期
95	2区 B6･p9,10/q9,10	包含層3層	弥生土器広口壺頸部	—	残6.4	—	頸部30%	普通	良好	(内)橙色(5YR7/6)～(5YR6/6)(外)にぶい橙色(7.5YR7/4),橙色(5YR6/8)(断)灰白色(10YR8/2)	頸部に指頭圧痕貼付突帯1条・口縁部板状工具によるナデを施す	反転復元	弥生時代中期
96	2区 B6･k11	包含層3層	弥生土器無頸壺	(11.0)	残5.8	—	口縁部15%	普通 1㎜以下の石中量含む	良好	(内・外)にぶい黄橙色(10YR7/4)(断)浅黄橙色(10YR8/3)	紐孔2つ有・内面ハケ目外面ナデ・口縁部は内湾しのび、口縁端部丸く納まる	反転復元	弥生時代中期
97	2区 B6･k10	包含層3層	弥生土器広口壺	—	残3.2	—	5%以下	普通 結晶片岩少量含む	良好	(外)にぶい橙色(5YR7/4)(断)にぶい黄橙色(10YR7/4)	垂下する口縁部・口縁内面及び口縁面部に櫛描刺突文が施される	—	弥生時代中期
98	3区 西側	側溝	土師器鉢	(13.2)	残7.1	(4.0)	底部100%	普通 赤色酸化粒付着 外面7㎜の褐色石含む	良好	(内)橙色(7.5YR7/6～6/6)(外)浅黄橙色(10YR8/3),灰黄(2.5Y7/2)(断)灰色(N5/～N4/)	内面板状工具によるナデ・外面右上がりのタタキ・口縁部短く外反し屈曲して口縁端部丸く納まる	反転復元	庄内？
99	3区 西側	側溝	— —	—	残4.8	4.2	底部100%	普通 5㎜以下の小礫・黒色石・赤色石・白色石を含む	不良	(内)橙色(7.5YR7/6)(外)橙色(7.5YR6/6),浅黄橙色(7.5YR8/6)(断)浅黄橙色(7.5YR8/6)	内面にヘラナデ・外面に平行なタタキ	部分反転復元	弥生時代後期
100	1区 C6･j5,6	包含層3層	土師器製塩土器	—	残2.8	(3.6)	底部50%	蜜 直径1㎜以下の長石少量	良	(内)橙色(2.5YR7/6)(外)淡赤橙色(2.5YR7/3)～橙色(2.5YR7/6),浅黄橙色(10YR8/4)(断)灰色(N5/)	2次焼成を受ける	反転復元	庄内～布留
101	1区 B6･y9	包含層4層	陶器山茶碗	—	残2.2	(7.8)	底部40%	密	良好	(内・外・断)灰黄色(2.5Y7/2)	東濃型・底部に回転糸切・断面逆三角形のしっかりした貼り付け高台である	反転復元	13世紀前半
102	1区 B6･y9	包含層4層	青磁皿	—	残3.5	—	40%	密	良好	(内)灰色(10Y6/1)(外)オリーブ灰色(2.5GY6/1)(断)灰白色(N7/)	同安窯系・内面に櫛描文が施される	反転復元	13C末～14C初
103	2区 B6･l10	包含層3層	青磁碗	(16.0)	残3.5	—	口縁部10%以下	緻密	良好	(内・外)灰白色(7.5Y7/1～7.5Y7/2)(断)灰白色(N8/)	口縁端が外方下に曲がり肥厚する	反転復元	13C前半
104	3区 C6･x6,7	包含層3層	須恵器—	(17.4)	残3.75	—	口縁部10%	蜜 2㎜以下の小礫(白色粒・黒色粒)を含む	良好	(内・外)灰色(N6/)(外)灰色(N4/～N6/)	口縁端部は上方に摘み上げ、下方は肥厚し面をなす・面には波状文を施した後貼付浮文に竹管文を施す	—	13C前半～後半
105	3区 C6･t7	撹乱	磁器面子	—	1.4	3.6	100%	緻密	良好	(内・断)灰白色(5Y8/1)(外)灰白色(7.5Y7/2)	小鉢蓋を転用・鍔部分を打欠整形・淡緑色釉薬かかる	—	18C中頃
106	1区 B6･w8,9	5層上面	土師器皿	—	残3.1	—	40%	普通 内面4㎜以下の石少量含む	良	(内・断)にぶい黄橙色(10YR7/4)(外)にぶい黄橙色(10YR7/4),橙色(7.5YR6/6)	底部に葉脈が見られる・表面剥離のため不明瞭	反転復元	8C
107	3区 C6･v6,7	包含層3層	土師器灯明皿	(9.6)	残1.5	(6.5)	底部15%	密	良好	(内・外・断)橙色(7.5YR7/6～6/6)	薄手の皿・回転糸切痕	反転復元	18C後半
108	3区 C6･t7	撹乱	土師器灯明皿	(7.7)	残1.1	(5.1)	口縁部10%	普通	良好	(内)明赤褐色(5YR5/8)(外・断)橙色(7.5YR7/6～6/6)	回転糸切痕(左まわり)・透明釉が全面にかかる	反転復元	18C後半
109	3区 C6･t7	撹乱	土師器灯明皿	(9.8)	残1.8	—	10%以下	普通 1㎜以下の砂粒を少量含む	良好	(内)橙色(7.5YR6/8),黒褐色(7.5YR3/2)(外)橙色(7.5YR7/6),黒色(N5/)(断)橙色(7.5YR7/6)	口縁端部ヨコナデを施す・スス付着	反転復元	18C後半
110	3区 C6･x6	包含層3層	土師器皿	(7.4)	1.5	—	70%	普通 1㎜以下の砂粒・黒色粒を含む	普通	(内)にぶい黄橙色(10YR6/4),明黄褐色(10YR7/6)(外)にぶい黄橙色(10YR6/4),橙色(5YR6/6),明黄褐色(10YTR7/6)(断)灰色(5Y5/1),浅黄橙色(10YR8/4)	端部はナデにより丸く納まる・やや厚手・切り込み円盤技法か？	部分反転復元	13C
111	3区 中央	撹乱	肥前系染付碗蓋	(10.1)	3.4	4.0	口縁部60% 摘部50%	緻密	良好	(内)灰白色(5GY8/1)(外)明オリーブ灰色(5GY7/1)(断)灰白色(N8/)	内面に四方襷文・見込みコンニャク印判による五花弁・銘款に2重方形枠に渦「福」	部分反転復元	18C後半
112	3区 西側	包含層3層	磁器染付皿	(13.4)	残4.3	8.0	60%	緻密	良好	(内・外)明オリーブ灰色(2.5GY7/1)(断)灰白色(2.5Y8/2)	高台にはなれ砂痕あり・内面に草花文,外面唐草文・見込みコンニャク印判による五花弁・銘款に崩れた「福」	部分反転復元	18C後半

表２　出土遺物観察表（石器）

報告書番号	地区		遺構層位	種類	器種	法量(cm) 長軸	短軸	厚さ	重量(g)	石材	形態・技法の特徴など
S1	1区	B6･x10	包含層4層	打製石器	石錐	3.7	1.4	0.6	3.83	サヌカイト	錐先欠損・頭部自然面あり
S2	1区	C6･e10付近	包含層4層	打製石器	石錐	3.3	1.1	0.6	1.81	サヌカイト	頭部欠損・丁寧な成形・中軸に稜線あり
S3	1区	C6･b8	4層上面	打製石器	石鏃有茎式b	4.4	2.1	0.6	3.45	サヌカイト	先端部ごく一部欠損・剥離あり
S4	1区	B6･w9	1-2-9	打製石器	石鏃有茎式b	4.2	1.8	0.5	3.98	サヌカイト	先端部欠損
S5	2区	B6･g11/h11/i11	1-2-1	打製石器	石鏃有茎式b	4.2	2.4	0.9	6.72	サヌカイト	大型のもの・中軸に稜線あり
S6	1区	C6･d7,8	4層上面	打製石器	石鏃平基式b	2.8	2.4	0.6	4.26	サヌカイト	先端欠損・自然面あり
S7	1区	B6･v10	包含層4層	打製石器	石鏃凹基式a	2.1	1.5	0.4	0.95	サヌカイト	全体的に風化・先端欠損
S8	1区	B6･x9	包含層4層	打製石器	石鏃凹基式a	2.7	1.5	0.5	2.23	サヌカイト	自然面あり
S9	1区	C6･i5	1-2-98	打製石器	石鏃凹基式a	3.0	1.5	0.4	1.03	サヌカイト	中軸に稜線あり
S10	1区	C6･d8	落ち込み1	打製石器	石鏃凸基Ⅰ式	3.9	2.0	0.5	3.78	サヌカイト	茎部欠損・凸基Ⅱ式・石錐かも
S11	1区	C6・b9	4層上面	打製石器	石鏃凸基Ⅱ式b	3.1	1.5	0.4	1.62	サヌカイト	基部欠損・1方面に中軸に稜線あり
S12	1区	C6･d7	包含層4層	打製石器	石鏃凸基Ⅱ式b	2.9	1.2	0.4	1.08	サヌカイト	先端・基部欠損・自然面あり
S13	1区	C6･b8	1－1-16	打製石器	石鏃凸基Ⅱ式b	4.3	1.4	0.6	3.30	サヌカイト	基部欠損・丁寧な成形・中軸に稜線あり
S14	1区	B6･u10	包含層4層	打製石器	石鏃凸基Ⅱ式b	3.4	1.1	0.6	2.67	サヌカイト	基部欠損・石錐かも
S15	2区	B6･l10	包含層3層	打製石器	石鏃凸基Ⅱ式b	3.5	1.4	0.5	2.21	サヌカイト	有茎式かも・基部欠損
S16	1区	C6･c8	1-2-51	打製石器	石鏃	1.5	0.9	0.4	0.38	サヌカイト	先端のみ
S17	2区	B6･l10,11/k10.11	包含層3層	打製石器	未製品	3.4	3.6	1.3	14.45	サヌカイト	スクレイパーか？・片面に加工痕あり
S18	1区	B6･u10	包含層4層	打製石器	未製品	3.4	1.2	0.8	3.75	サヌカイト	縁辺部丁寧な成形・石錐かも
S19	1区	B6･x10	4層上面	打製石器	石核	4.3	5.5	2.5	54.25	サヌカイト	
S20	1区	C6･c8	包含層4層	打製石器	石核	4.9	6.6	3.1	110.81	サヌカイト	
S21	1区	B6･w9	5層上面	磨製石器	石包丁	4.7	3.3	0.5	11.25	緑泥片岩	片刃(稜あり)・背部丸みあり・孔なし
S22	1区	C6･b8	1-1-16	磨製石器	石包丁	3.5	4.6	0.6	17.15	緑色片岩	片刃(稜あり)・背部欠損・孔なし
S23	1区	C6･d16	包含層4層	磨製石器	石包丁	4.3	3.9	0.5	14.25	緑色片岩	片刃か？・背,刃部欠損・0.5孔2つ残存(敲打穿孔か?)
S24	2区	B6･h10	2-1下層	磨製石器	石包丁	10.6	5.3	0.8	69.73	緑泥片岩	両刃か?(稜あり)・背部丸みあり・2孔残存(回転穿孔)
S25	2区	B6･g01/h10	2-1下層	礫石器	敲石	8.8	5.3	4.6	295.35	砂岩	端部・縁辺部に敲打痕あり
S26	2区	B6･Ⅰ12	包含層3層	礫石器	敲石	65.0	5.3	5.1	245.65	砂岩	端部・面部に敲打痕あり
S27	2区	B6･Ⅰ10	包含層3層	礫石器	敲石	12.5	4.2	3.5	253.35	砂岩	端部・縁辺部に敲打痕あり
S28	2区	B6･g10,11/h10,11	2-101最下層	礫石器	石杵	11.3	5.6	3.6	446.94	砂岩	上端部に敲打痕・下端部は擦痕・敲打痕あり
S29	1区	B6･y9	1-2-22	礫石器	砥石	9.8	7.2	6.5	646.80	砂岩	被熱を受け変色している・4面使用か？
S30	1区	B6･w8	1-2-59	礫石器	砥石	9.9	8.3	4.9	594.63	砂岩	2面使用か？・敲打痕あり・凹石として利用か？
S31	2区	B6･f10,11/g10,11	2-1中層	礫石器	凹石	16.1	14.8	4.0		砂岩	磨面・凹みが多い
S32	2区	B6･l11	2-2	礫石器	台石	34.0	14.4	14.1		砂岩	敲打痕あり
S33	2区	B6･i10	2-1下層	礫石器	石錘	4.5	4.0	1.3	32.27	砂岩	切目石錘・両端に切り目あり
S34	2区	B6･k10	包含層3層	打製石器	不明	4.2	4.6	0.6	16.11	緑泥片岩	スクレイパーか？・片面に加工痕あり
S35	1区	C6･c7	1-1-7	磨製石器	不明	3.8	4.7	0.6	15.50	泥質片岩	打痕あり

表３　出土遺物観察表　（金属製品）

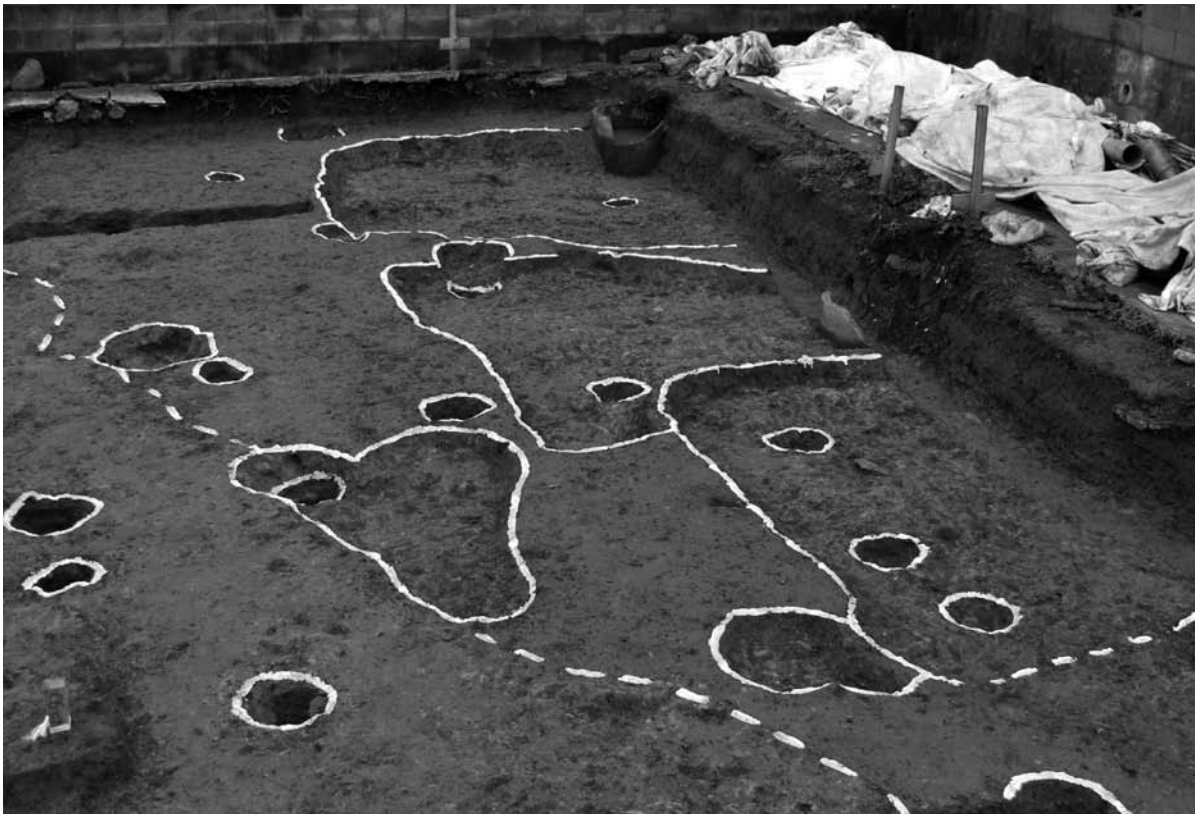
報告書番号	地区		遺構層位	種類	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	残存率	備考
113	1区	C6･j8	5層上面	鉄製品	刃子	11.4	1.5	0.4	22.67	—	鉄
114	2区	B6･h10	2-1下層	金属製品	銅銭	外縁外径平均2.53	内郭内径平均0.60	—	1.98	100%	熙寧元寶
115	1区	C6･i8	5層上面	金属製品	銅銭	外縁外径平均2.33	内郭内径平均0.58	—	1.98	80%	寛永通宝
116	2区	C6･a10	5層上面	銅製品	煙筒吸口	6.1	1.0(最大幅)	—	4.56	100%	銅



1. 調査地全景（西から）

2. １区全景（第１遺構面）

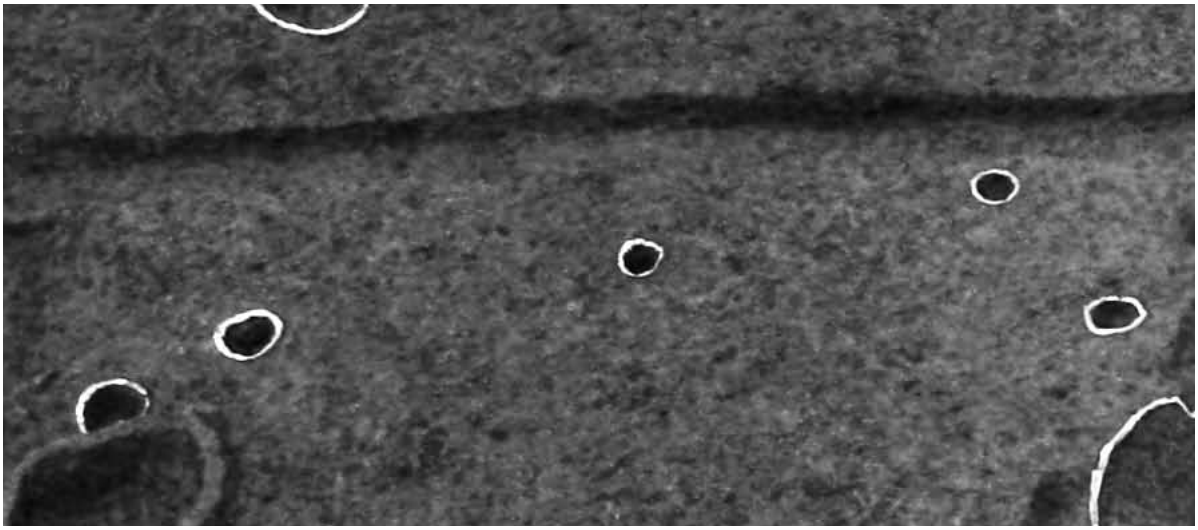
3. １区全景（第２及び第３遺構面）



1. 土坑 1-2-50･1-2-51･1-2-52（東から）

2. 土坑 1-1-30（南西から）

3. 柱穴 2-2-18 遺物出土状況



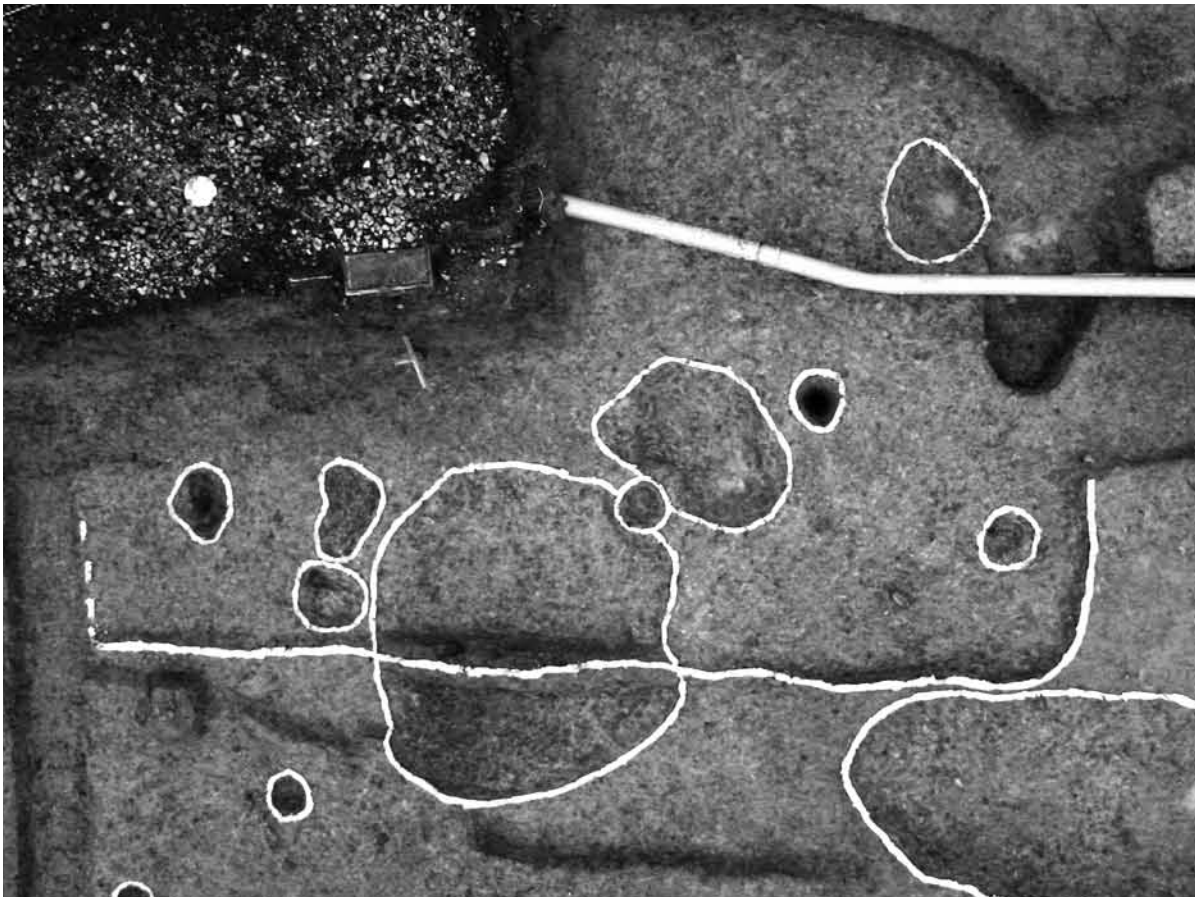
4. 柱列（東から）

1. 土坑 1-2-2（南東から）

2. 土坑 1-2-2 土層断面

3. 土坑 1-2-22 遺物出土状況

4. 土坑 1-2-22 土層断面



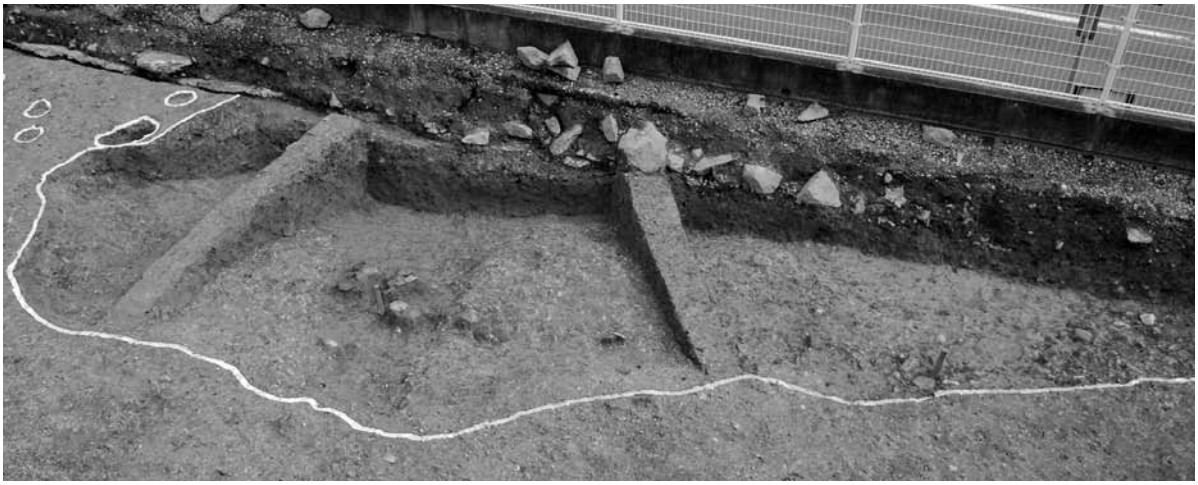
5. 竪穴建物１

1. 土坑 1-2-59 土層断面

2. 土坑 1-2-60 土層断面

3. 柱穴 1-2-61 土層断面

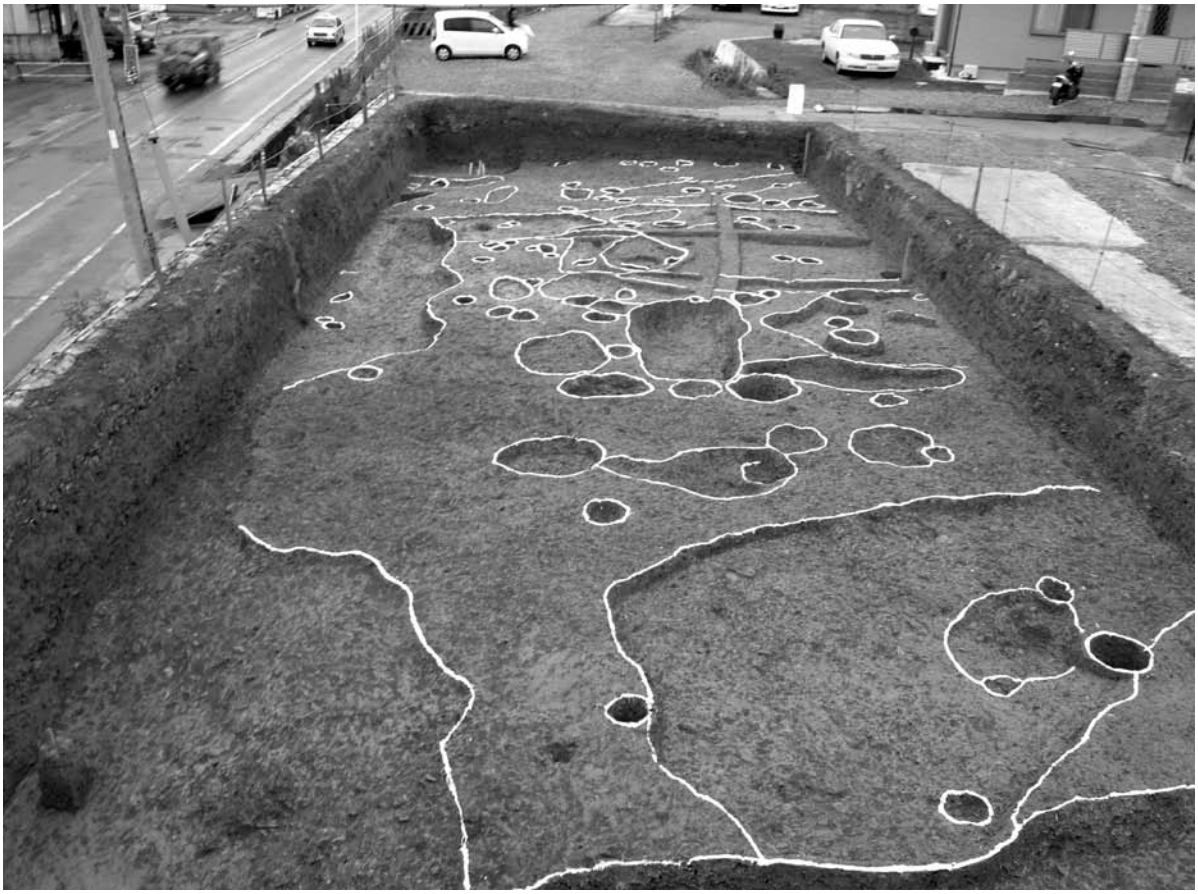
4. 井戸状遺構 1-2-94（北西から）



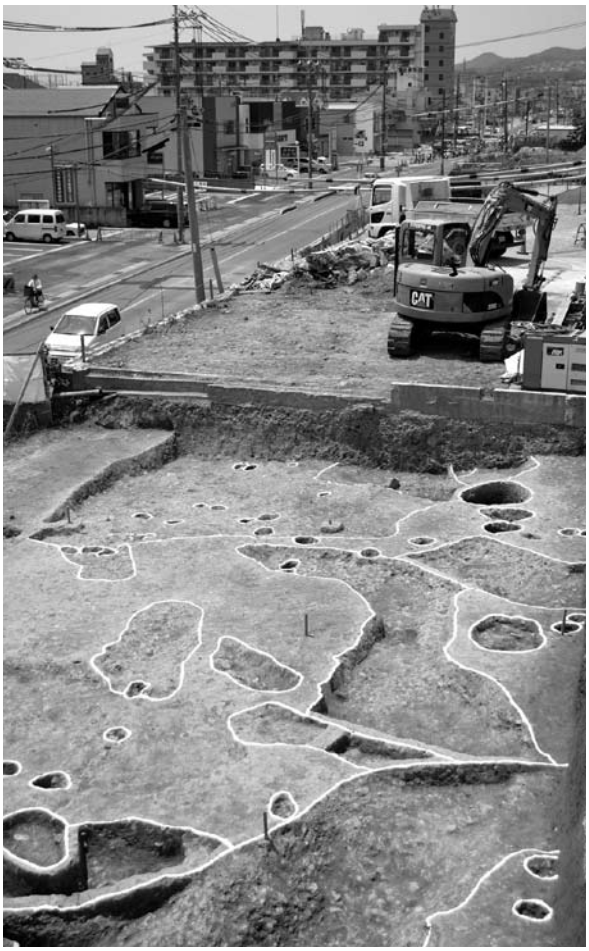
5. 落ち込み２西半（北から）

6. 落ち込み２土層断面

7. 落ち込み２遺物出土状況



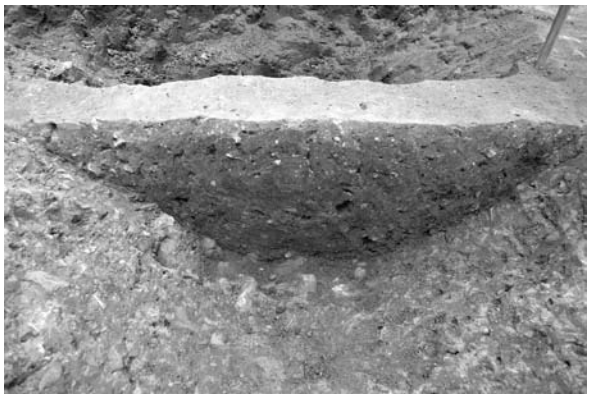
1. ２区西半全景（東から）



2. ２区東半全景（東から）

3. ２区東半全景（西から）

4. ２区南西部全景（北西から）



1. 溝 2-20 土層断面

2. 土坑 2-118 土層断面

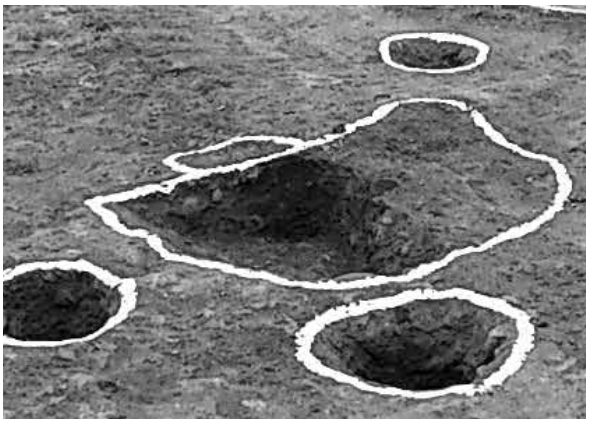
3. 土坑 2-2（北から）

4. 土坑 2-2 付近検出柱穴及びピット（南から）

1. 堀状遺構 2-1（南西から）

2. 堀状遺構 2-1 土層断面（南から）

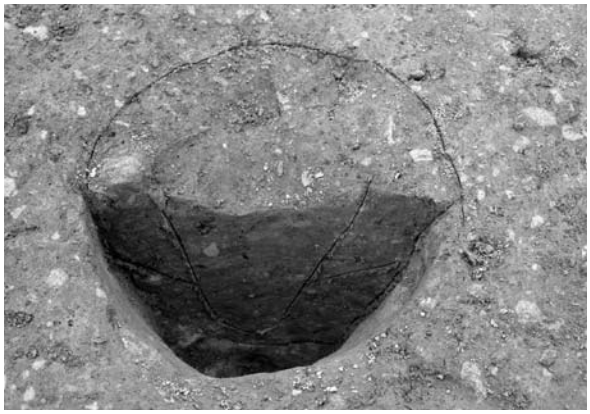
1. 竪穴建物２全景（南西から）



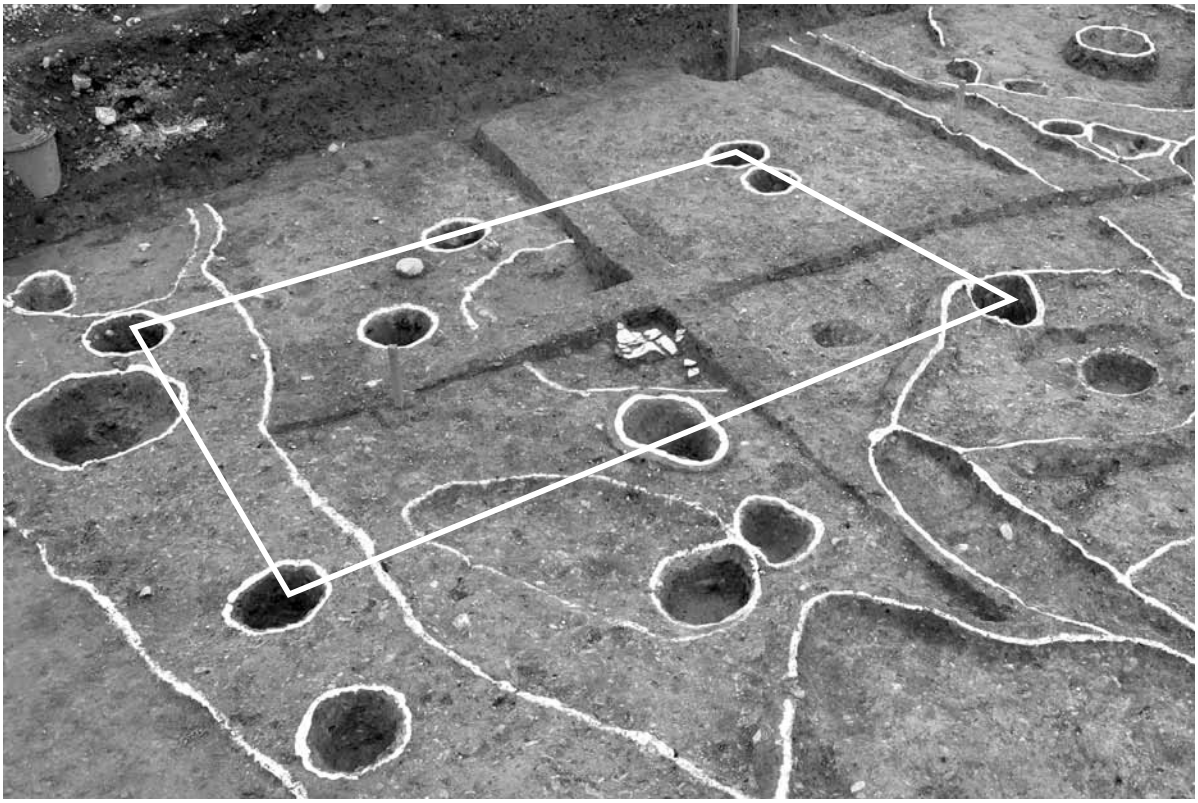
2. 土坑 2-114（炉）（北西から）

3. 土坑 2-114（炉）遺物出土状況

4. 柱穴 2-91 土層断面

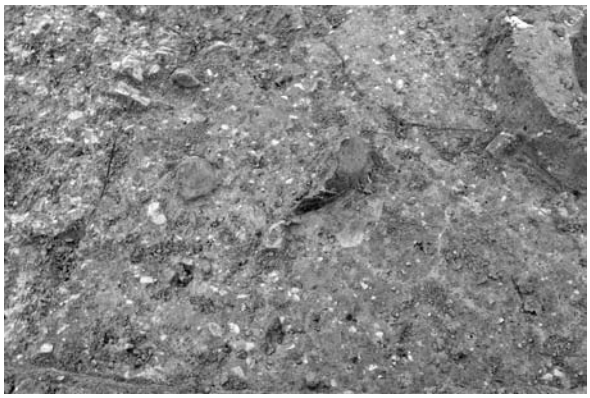


5. 柱穴 2-100 土層断面



1. 掘立柱建物（南西から）

2. 土坑 2-101 及び 2-113（南西から）

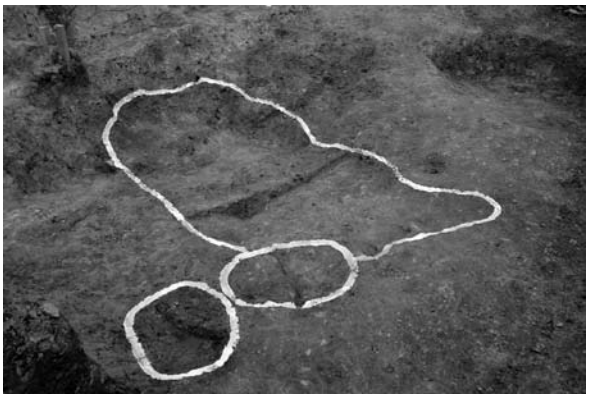


3. 土坑 2-113 遺物出土状況

4. 落ち込み３土層断面

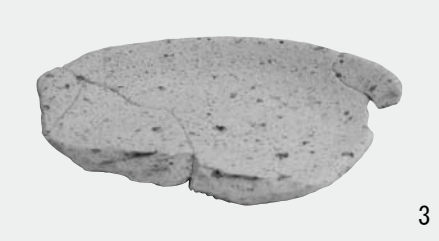
1. ３区全景（西から）

2. 土坑 3-5（南西から）



3. 土坑・ピット（南西から）

4. 土坑 3-5 遺物出土状況


3

4

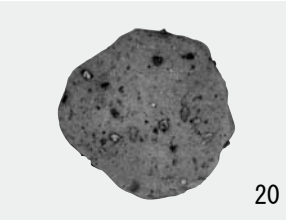
10

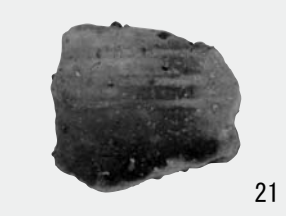
14

15

5

26


20


21

27

23

29

30

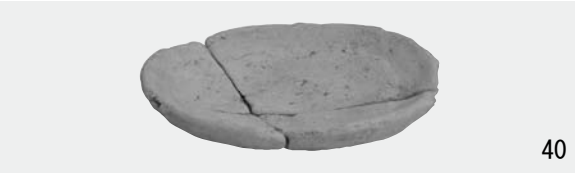
出土遺物（１）

31

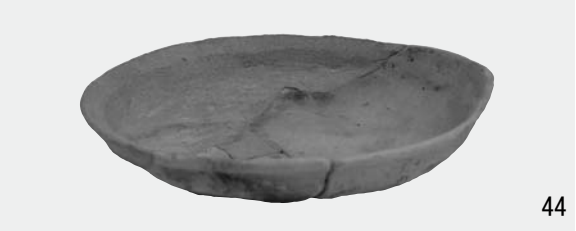
35

36

37


40

41


44

32

33

34

38

39

43

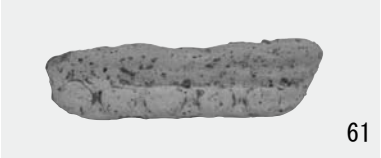
45

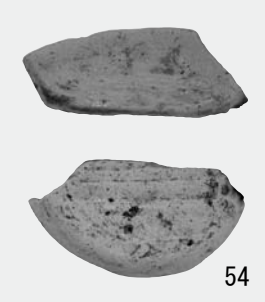
出土遺物（２）

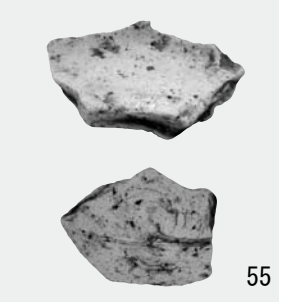
47・48

56

57


61


54


55

60

68

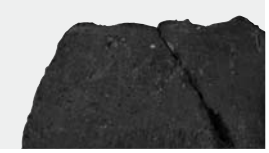
69

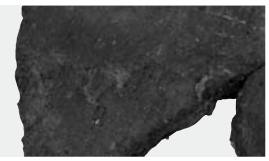
73

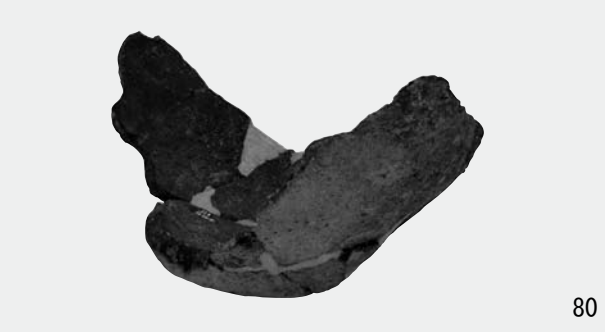
71

78

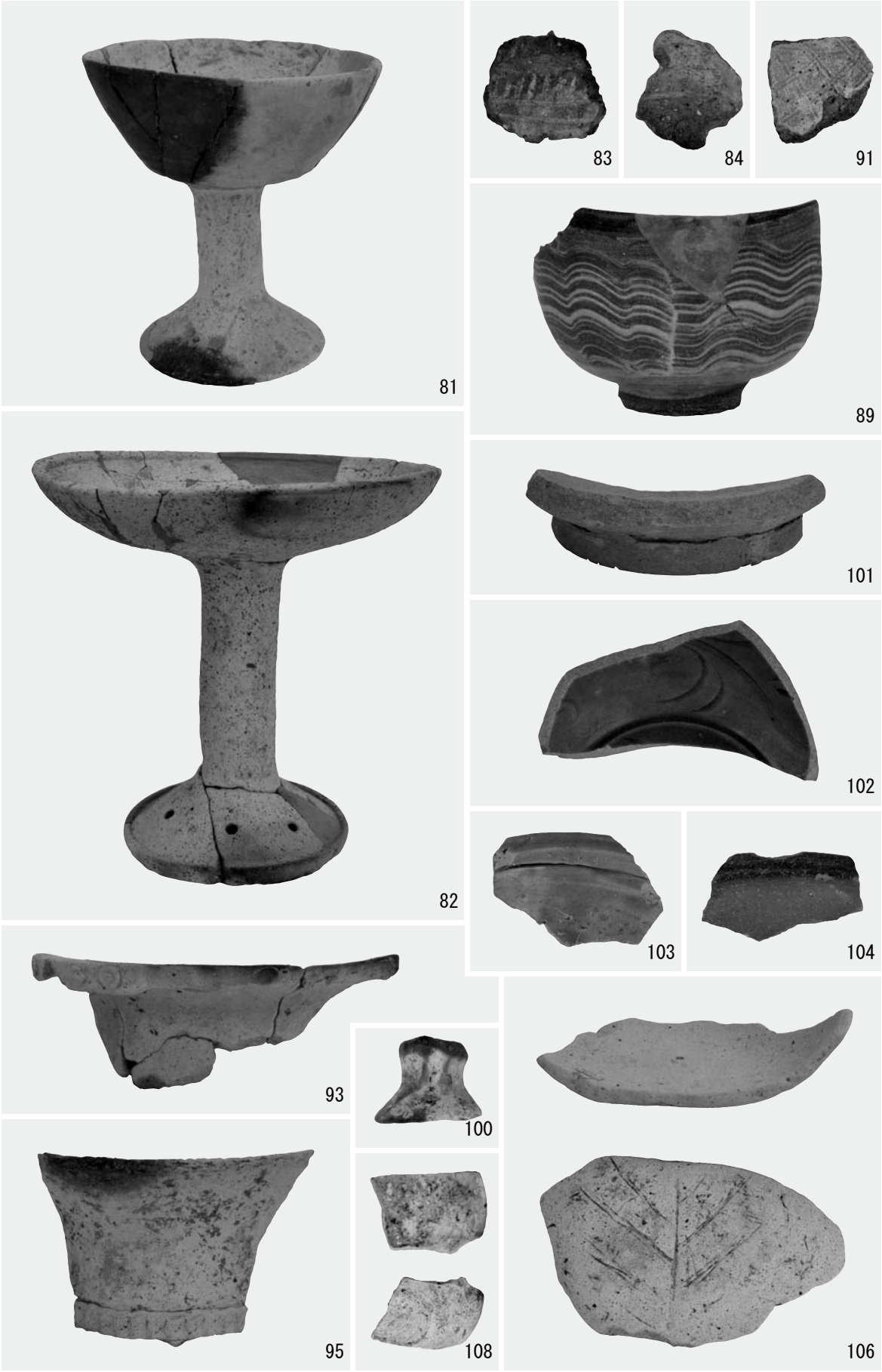
79



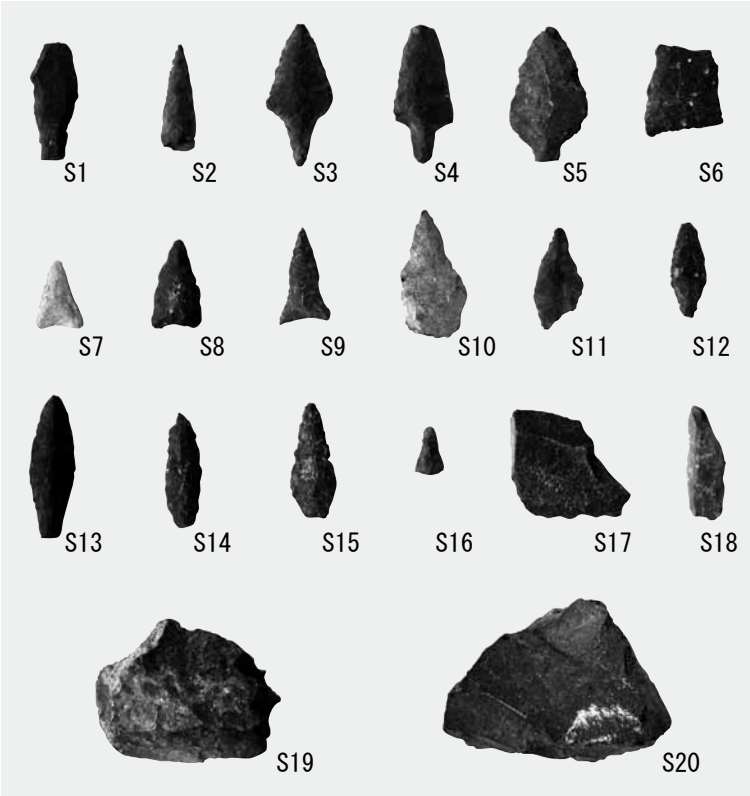


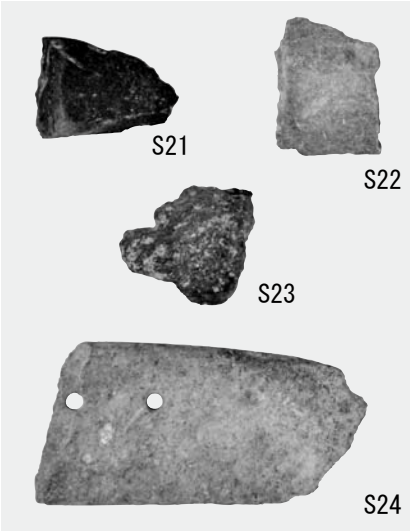

80

出土遺物（３）



出土遺物（４）


S1
S2
S3
S4
S5
S6
S7
S8
S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20


S21
S22
S23
S24

S25
S26
S27

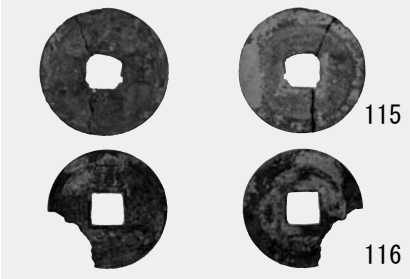
S29
S30

S31

S32

S28

114


115
116

出土遺物（５）

報 告 書 抄 録

ふりがな	むそたいせき
書名	六十谷遺跡
副書名	都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）道路改良事業に伴う発掘調査報告書
編著者名	津村　かおり
編集機関	公益財団法人和歌山県文化財センター
所在地	〒640-8404　和歌山県和歌山市湊571番1　　TEL073-433-3843
発行年月日	西暦2013年9月4日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
六十谷遺跡（むそたいせき）	和歌山市（わかやまし）六十谷（むそた）	30201	84	34° 15′ 42″	135° 12′ 18″	【第1次】 2011年5月18日 ～ 2011年8月5日 【第2次】 2012年3月28日 ～ 2012年6月29日 【第3次】 2012年8月21日 ～ 2012年9月7日	1,667㎡	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
六十谷遺跡	集落	弥生時代	土坑・土壙墓・竪穴建物	弥生土器、土器棺、石鏃	特になし
		古墳時代	土坑・竪穴建物	須恵器、土師器、石製品	
		中世時代	ピット・土坑・堀状遺構・落ち込み	瓦器、土師器、青磁、白磁	

要約	六十谷遺跡の発掘調査を行った。弥生時代から近世にかけての遺構を検出した。弥生時代では土器棺墓を初め、竪穴建物、土坑や弥生時代前期と考えられる土器片やサヌカイト製石鏃を多く確認した。古墳時代には5世紀代の須恵器が伴う竪穴建物がある。中世では旧地形の整地を行ったと推測できる落ち込みを確認した。また調査区東側で検出した堀状遺構は、周辺に中世城跡の存在を考えさせる遺構である。弥生時代前期～中世にかけて幅広い時代に集落等の遺構が展開していたと推測される。

六十谷遺跡
－都市計画道路西脇山口線（園部・六十谷）道路改良事業に伴う発掘調査報告書－

2013年9月

編集・発行　公益財団法人 和歌山県文化財センター
印刷・製本　白光印刷株式会社